

---

# 魔法少女リリカルなのは～黄泉路への案内人～

楽一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは＼黄泉路への案内人＼

### 【Nコード】

N2069X

### 【作者名】

楽一

### 【あらすじ】

かつて彼は『黄泉路への案内人』と呼ばれ民も、国からも恐れられた。

在る者を助ければ在る者は見捨てて。

死後彼は何を求め闘うのか、誰のために戦うのか。

※処女作なので誤字脱字はあるかもしれません。更新もきまぐれです。

それでも楽しんで読んでいただければ幸いです。

## 登場人物紹介（前書き）

とりあえず設定を先にきめとかなきゃという思いから作りました！

## 登場人物紹介

かなづき  
神無月 葵 あおい

本作の主人公

転生前年齢 20歳

転生後年齢 9歳

転生前後の体重 平均より1kg軽いぐらい

好きなこと 家事全般、小物作り、可愛い物をめでる、読書

嫌いなこと いい加減なこと、正義（過去何かあったらしい）

容姿

典型的な日本人だが、瞳の色だけは青色。顔はまだ幼さが残っている。いわゆる女顔だが

本人は全く気にしていない。魔法を使う時に限り髪の色がなぜか白銀に変わる。

性格

基本は優しい。だが、相棒であるエクスとルミルに暴言やひどいことをするとたとえ相手が友人でもトラウマになるほどの公開を与える。

エクス

主人公の神姫（いわゆるデヴァイス）

年齢 転生前後ともに不明

体重 「いっちゃだめー！」

好きなこと マスターと一緒にいること

嫌いなこと マスターと離れていること

容姿 武装神姫アーンヴァルMk.？

性格

素直だが、葵のことになると周りが見えなくなる。葵をこよなく愛している。

モード 白騎士

恰好はMH2Gのウカム装備（男性） 主に攻撃と防御に主体を置いている。

遠距離、中距離に主体性を置いており砲撃魔法と銃撃戦が得意。接近戦用も装備しているがあくまでも非常事態専用。

ルミル

主人公の神姫

年齢 転生前後ともに不明

体重 「良い度胸だ。塵と化すか？」ガタガタガタ

好きなこと マスターと共に戦うこと

嫌いなこと 一人でいること

容姿 武装神姫ストラーフMk'？

性格

クールだが頼りになる一面もある。葵をこよなく愛している。

モード 黒騎士

恰好はFateのアーチャーの全黒！そして外套の上が無い感じ。  
主に近距離、中距離に主体を置いており、速度と攻撃性重視。

武器は両翼刀という翼の形をした白翼刀はくよくがたなという刀と黒翼刀こくよくがたなという刀。  
中距離武器は弓矢。

神姫しんぎ 葵たちがいた世界のデヴァイスみたいなもの。

人型、精霊型といわれるモードに変更できる。

## 登場人物紹介（後書き）

こんな感じで書き続けていききたいと思います。

## プロローグ（前書き）

処女作です。楽しんで読んでいただければ幸いです！



## プロローグ

### プロローグ

「はて？　ここはどこでしょう？」

そこにたっていたのは上下全て黒で統一されところどころ白い刺繍が入っている服（イメージはFateのアーチャー。ただし上の外套は着ず、外套も赤ではなく黒）を着ている男性。

見た目は20歳。髪の毛は白銀、瞳は青色。右の耳に黒と白のイヤリングをしている。

そして彼の目の前にいるのは土下座をしている白髪に白髭のやせている御爺さん。

「すみません。その御老人」

「は、はい！」

「ここはどこでしょう？」

「こ、ここはいわゆる天国じゃ」

「ほお。ここが天の国。ん？　ということとは私は死んだことになるのでしょうか？」

「はい。おっしゃる通り」

「ふむ。エクス、ルミル」

彼がそういうとイヤリングが光り、そこに二人の女性が現れた。

「なんでしょう。マスター」

そういつて白色のイヤリングから現れたのは金色の髪に青い瞳、白を基調とした服を着ている女性。といっても身長は150後半だろう。エクス（武装神姫アーンヴァルMk.？参照）。

「呼んだか？ マスター」

そしてもう片方の黒色のイヤリングからは黒色を基調とした服を着て、オレンジの瞳、水色の髪をしたクールな女性。身長はやはりエクスと同じ。ルミル（武装神姫ストラーフMk.？参照）

「私は死んだらしい。でも、まあ世界を敵に回して生き残れるわけはないと思っていましたかね」

「マスター。ですが、今またこうして出会うことができましたのです。私は嬉しいです」

「はい。マスターは悪くありません！ 悪いのはあいつと世界です！ と、話を折って申し訳ないのですが、マスター。ここで頭を下げているご老人は誰ですか？」

「え？ 「ほう。白か」 いやあああああああ！！」

何かを言い当てた御老人にエクスは白騎士に切り替え砲撃を放ち御老人は星の彼方へ。

「落ち着いてください。エクス」

「うえええん。ひっぐ、まずだー、みられちゃいまじた・・・」

泣きながら、エクスはマスターと呼ばれる男性に抱きついた。

「あー、よしよし。大丈夫ですよ」

「えへへへ／＼／＼」

男性がエクスは泣きやみ、頬を朱に染めながら笑っていた。

「ん？ ルミルどこしましたか？」

「エクスばかりずるい」

「ルミルもおいで」

「ん」

するとルミルも撫でやすいように頭の角度をずらすと、男性も優しくルミルの頭をなでた。

「おーい。話を続けていいかのう？」

「あ、はいどうぞ。あと、私の相棒に不埒なまねは二度としないでください。じゃないと」

私もあなたを殺してしまいうそで」

そう言い終わると男性は不気味な声で「フフフツ」と笑っていた。

「わ、分かった。約束するからその笑い声をやめてくれ」

「分かりました。ところでここは？　そしてあなたは？」

すると老人は髭を整え、

「わしは神。ここは天国じゃ」

「……」

「マスター、病院へお連れした方が……」

「エクス。もう手遅れだ。マスター黒騎士になってこの方の介錯をしてあげた方が」

「本物じゃ！　なら、これを見ろ！」

そういつて神（自称）は一枚の紙をこちらに手渡した。

「自称じゃない！　本物じゃ！」

「無視して、どれどれ。ほお。私の個人データですね」

「ふむ！」

そこには彼の名前、生年月日、出身地、そして今までこなしてきた依頼の数々。

「さすがじゃの。『黄泉路<sup>よみじ</sup>の案内人』、神無月<sup>かななづき あおい</sup>葵」

「いえいえ。私はただ自分の成すべきことをしてきただけです。それで私は死んだのでしょうか？ どうしてここへ？」

「うむ。簡潔に言おう。お前さんの力を貸してくれんか？」

「どういふことでしょう？」

「うむ。その前にお前さん、アニメは知っておるか？」

「ええ。たまに見る程度で」

「ならこれは知っておるか？」

そういつて神は一つのDVDを見せた。タイトルは魔法少女リリカルなのは。

「これがどうかしたんですか？」

「うむ。その中にイレギュラーがはってしまつての」

「イレギュラー？」

「本来物語というのは作られた物。設定や登場人物もあらかじめ決められた者しか出てこない。じゃが、いくつもの世界のうちの一つのなのはの世界にイレギュラーが現れて物語が変わってしまったの」

「そのイレギュラーを排除してほしいということですか」

「そうじゃ」

「どうします？」

そういつて葬はエクストルミルの方を見ると、二人とも、

「「マスターの身心のままに」

その目には強い意志が宿っており、決意もある。彼は彼女たちに何度も助けられ支えられてきた。

「なら、決まりですね」

「ありがとう。それでじゃ。何か欲しい能力があれば3つまでならあげられるが？」

「三つ。うーん。武力は今までのままでいいし、せいぜい住む場所とお金ですかね」

「その辺はすでに手配しておる。安心して構わん」

「わー、太っ腹ですね」

「むしろそれぐらいは前準備してもらわないと困ります」

「となると、特にありませんね。後で決めてというはありますか？」

「構わんよ?。」

「ではそれで」

「分かった。では行ってらっしゃーい！」

「「へ？」」

すると、葵達がいた場所に穴が急に開き、

「イヤ――――！！！！！！？」

「なぜ――――！！？」

「後で覚えておいてくださいね？」

葵だけ何か黒い笑顔だった。

## SIDE神

「葵だけ怖かった……」

そういつて穴を見ると、ぼつちり目があつた神はガタガタと震えていた。

「そうじゃ、こっちも準備しておくかの。制服と、そうじゃった。お前さんもあいつらのもとへ送るとしよう」

そういつて神は一匹の山猫を制服と同じ段ボールに入れた。





## プロローグ（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？

更新は次はいつになるかわかりません。ですががんばって物語のほうもがんばっていききたいと思います！  
ではまた次回で会える機会があれば。

※話上おかしい部分を修正せしました。

## 第一話（前書き）

やっぱ文才いorz  
でも頑張る！　そして後悔はない！

## 第一話

### 第一話

「エクスとルミルの視線が近いと思ったら私が縮んでいるようですね」

転生後、葵の身長はおよそ9歳の平均身長より少し高いぐらいにまで縮んでいた。容姿なども子供化していたが性別を言われるまで恐らく誰もが女というほどの顔立ちに変化していた。

その直後エクスとルミルにもみくちゃんにされたのは別の話。

その後、エクスとルミルから解放された葵たちはある一軒家の前に立っていた。

「ここですか」

目の前にあるのは二階建ての一軒家。表札には神無月と書かれていた。

「ただいま。でいいのでしょうか？」

「さあ？ でもお邪魔しますではないかと思えますよ」

「そうだな。とりあえずお帰り。マスター」

「ええ。こういうのもいいですね」

中に入ると整理されているのか家具全般を始め電化製品など一通りそろえられている。だが、一つだけ問題があった。

――数分後

「それに戸籍まである。準備が良いですね」

当然ルミルとエクスにも同じ物が与えられている。内容は両親が不慮の事故により他界。今は親戚の叔父の家に居候さしてもらっているという感じだ。

さらに、銀行口座にも信じられない額のお金が入っていた。

「単位が違いすぎますよ！ マスター！？」

「億。しかも軽く兆のギリギリ前。これだけあれば普通に遊んで暮らせるな」

「とりあえず荷ほどきをしましょう」

葵の言葉と同時に荷ほどきが開始された。荷物といっても生前にあった衣類や食器や包丁、なべといった調理器具のみだ。

「ふう。ん？ マスターこれはマスターの荷物か？」

「どれ？ いえ、私の荷物ではありませんね。ですが宛名は私ですね。衣類の類ですね。開けてみましょう」

そういつてガムテープを外し段ボールを開けるとそこにあったのは新品のどこかの学校の制服と、

「猫？」

「猫ですね？」

「か、かわいい！」

「ま、マスター？」

「ヤバイ。エクス、マスターの悪い癖が発動した」

「ああ、あれですか・・・」

すると、猫はゆっくりとその眠りから目を覚ますと、

「むぎゅ!？」

その瞬間、葵が猫を抱き抱えモフモフし始めた。

「はあ、最高の毛並みですね。これはなかなか。少し肌が荒れてますね、シャンプー買ってくるべきでしょうか？（だが、何かが違う。魔力？ 使い魔の類か？）」

葵は葵で冷静さと猫の毛並みと抱きごこちを堪能していた。

すると、猫の方も急なことであわてたが、すぐに冷静さを保ちつつ、

「あ、あなた達は誰ですか!？」

と人語を話した。

「しゃ、しゃべった!？」

「化けネコか!？」

エクスはすぐに砲撃体制に入り、ルミルは両翼を構えた。

「やはり。あなたは誰かの使い魔ですか？」

「ご、御存じなのですか!？」

「ええ。まあ、そっち側の者ですから」

すると、猫は光り輝き、一人の女性が現れた。

「私の名はリニス。ある方に仕えていたのですが、突然契約を打ち切られどこかの世界においやられてしまったんです」

「猫が人にー!」

「マスター下がってください! すぐに」

「はあ。少し待ってください」

そういつて葵は調理場に行き、ある物を持って帰って来た。

「ふ、フライパンなんかを持ってどうするのですか？」

「決まっているでしょ？」

につこりと眩しい笑顔をリニスに見せながら葵は二人に近づき、  
そして、

「ふん!」

ガン！ ガン！

「「きゅ〜」」

フライパンをエクストルミルの頭にちゅうちよなく殴りつけ、二人は目を回しながら気絶した。

「・・・だ、大丈夫なんですか、あれ？」

リニスは床で大の字になっている神姫たちを指差す。

「大丈夫です。他の神姫よりも頑丈ですから。で、あなたの主人はなんでお前を追いやったんですか？」

すると、彼女は顔を俯きながら、

「分かりません。突然逃げなさいといったと思ったら、足元に転移魔法が展開されて、後は・・・」

「なるほど（これがイレギュラーか？ まあいい。情報は得られた）  
。となると住むところとかありませんね？」

「え、ええ」

「ならウチに泊りませんか？ 幸いなことに部屋も余っていますし」

「え？」

「それに私もそのイレギュラーを討つように依頼されていますから」

「信じてもらえるんですか？」

「ええ。事前に情報があつたのでおそろく」

「あ、ありがとうございます！」

そういつて彼女は深々と頭を下げた。

「自己紹介がまだでしたね。私の名前は神無月葵です。そしてあそこの金髪の子がエクス、青髪の子がルミルです」

その後学校の制服をみるとここから見てバスで数分した場所にある私立聖祥大附属小学校のものと判明。

「学力もそれなりにありますが、小学校って・・・」

「神無月様は小学生ではないのですか？」

「いえ、私はある世界から流れ着いた者、こっちではなんというか分かりませんが、私たちは『漂着者』といいます。あと神無月はその子たちもそうですから葵で。様付けも不要です」

すると、リニアは少し考え、

「分かりました、か、いえ。葵さんはおそらく時限漂流者ですね」

「漂流者という意味では変わりありませんね。意味も大体同じでしょう。時限のはざまにはじき出され漂流、その後ここに到着。こん



な意味じゃないでしょうか？」

「大体同じですね。あと、一つお尋ねしますがここと、あなたがも  
といた世界は違うのですか？」

「ええ。ここは魔法文化が無い。私がおもった世界は同じ地球でも  
魔法が確立された世界でしたから。世界人口のおよそ98%の人間  
が魔法を使えますからね」

「98%も!？」

「ええ。『生まれながらにして素質がある』というのが一般的でし  
たからね。ただ一概に魔法といってもファンタジーのような魔法も  
あれば検索魔法に特化した者、代用品がすでにある魔法とさまざま  
なので我々は魔法使いとは言わず『ウィザード』と呼んでいます  
がね」

すると、リニスはなにやらモニターを出し何かを調べ始めた。

「どこかに通報しますか？」

「ち、違います!! 命の恩人に仇を返すわけありません!! た  
だ、あなたから魔力を感じ取  
れ・・・あれ？」

「どうかしましたか？」

「リンカーコが無い・・・」

「なんですかそれ？」

リニスの説明によると、リンカーコアとは魔道師が持つ魔力の源で、大気中の魔力を体内に取り込んで蓄積することと体内の魔力を外部に放出するのに必要な機関で、魔力資質にも影響するものらしいです。

「なるほど。こちらではない者ですね。我々は体に流れる気みたいなものですかね。それを魔法に変換し放出する場合の自立型。自然から得られるエネルギーを魔力に変換し放出する自然型、そしてその二つを併せ持つ共同型の三つに分かれます」

「なるほど。では彼女たちは？」

リニスは再びエクスとリニスの方を見る。

彼女達はすでに気絶から立ち直り再び作業に取り掛かっていた。

「彼女達は、あまりこういう言い方は嫌いなのですが武器であり防具ですね」

「デヴァイスみたいなものですね」

「まあ、そうなりますね。さてっと。とりあえず片づいたので夕飯にしましょう。エクス、

ルミル何かリクエストはありますか？」

「はい！ ハンバーグ！」

「私も、それで」

嬉しそうに挙手して答えるエクスに、少し恥ずかしそうに答えるルミル。

「その前に食材の買い出しに行かなきゃ。悪いのですがリニス。エクスとルミルを見ていてもえませんか？」

「ええ、構いませんよ」

「お願いします。エクスとルミルは申し訳ありませんがこの世界の情報整理をお願いします」

「了解だ、マスター」

「はい。分かりました」

そういつて葵はMY買い物袋とお財布（3万ほど）を入れて出かける。葵は意外と儉約かで口癖は「贅沢は弾にするから贅沢なんです」だそうです。

「（なにやら今変な電波が？ まあ気にしちゃダメですね）では行ってきます」

そういつて家を後にした。そのご葵は激安スーパーでこの海鳴市全域を検索し一番近場のスーパーで買い物を済ました（キャットフードを買おうか買わないかで数分悩んだのは別の話）。

「結局買ってしまった……。でもリニスは人型にもなれるし、どうなんでしょう？」

荷物は人目がない場所で転送魔法で家に転送した。荷物は少ない

に越したことはない。また、ちよつとした買いだめをしたため子供が持てる量じゃなくなった。買い物は計画的に。神無月家に新たな教訓が加わった！

（最近疲れているのかな？ 変な電波が・・・）

そして帰り道の公園で一人の少女が泣いていた。

「どうかいたしましたか？」

「ふえ？」

これが葵となのはとの出会いだった。

## 第一話（後書き）

感想や意見をお待ちしています。

ちなみに私からの質問ですか「」の前に葬がしゃべる時は（例…葬  
「」のようにしたほうがいいのでしょうか？

## 第二話（前書き）

なんか文才もないくせに楽しんで書いてる楽一です。

こんな駄文にもかかわらずお気に入りに入りに三件と書かれました！  
マジっすか！感謝感激です！これからもがんばっていききたいと思います！

## 第二話

### 第二話

SIDEなのは

「どうかいたしましたか？」

「ふえ？」

そこにいたのはわたしとおなじぐらいの一人の少女でした。

「泣いていたようにお見受けしますが？」

「え、えっと・・・」

同じ年齢ぐらいなのに大人びて見えます。お姉ちゃんのような、でもお母さんのような。

「よければ相談に乗りますよ？」

「えっと」

わたしはその子になんで泣いていたのかを話した。

「そうですか。ですが、一つだけ言っておきます。あなたのお父さんはまだ生きていますよね？」

「うん」

「なら泣く必要はありません。まだこちらに帰ってくる希望はあるのです。希望を捨て去ることはいいけません。それになのはちゃん。あなたも注意しなければ」

え？ どうして？

「人には言葉があります。言葉にしないとわからないこともあります。あなたのお母さん、

お兄さん、お姉さんも人です。分かりますよね？」

「うん」

「今、あなたのお家はお父さんが倒れたことによってパニック状態になってます。いったん冷静になるように言ってちゃんとお話しましょう。話さないといけないことだっていっぱいあるんです。分かりあうために人には言葉があるんです」

「でも、迷惑かけちゃう」

「子供は遊んで、学んで、食べて、寝る。これ子供の仕事です。仕事というのは少し変なのかもしれません。甘える、迷惑をかけると言うのは親から見れば信頼の証です。まあ限度はありますがね。それに伝えたいことは言葉にしないとね」

「うん！ 分かった。お母さん達と話してみるの！」

そういつてわたしは葵ちゃんの手を握る。

「ありがとう葵ちゃん！」



「感謝を言われることはしてません。それにあなたは、笑顔の方が似合いますね」

「あ、ありがとう／＼／＼／」

女の子だけどもめられたらやっぱりするごくうれしいの！

「あと、忠告を一つ」

「ほえ？」

「私は男ですよ」

「へ、ほええええええええええええええええ！？！？」

S  
I  
D  
E  
  
O  
u  
t

「（まあ、そうなりますよね。）さて、ではお家までお送りしますよ」

「え？  
でも」

「時刻を確認してみましょう」

「えつと……あれ？」

そういつてなのはは公園の時計を見る。時刻は6時。空は少し薄暗くなっている。

「あ、あの！」

「はい。なんでしょう?」

「て、てを、にぎ・・・ても・・・」

後半はなかなか聞きとりづらい音量になったが、

「はい、どうぞ。お嬢様?」

「お、お嬢様!」?

「冗談です。どうぞなのはさん」

「う、うん。あと、もう一ついい?」

「どうぞ。子供の時が一番甘えてもいい時期ですから」

「こどもって。葵君も子供だと思うの?」

「そうですね。で、もう一つのお願いは?」

「お、お友達になってほしいの!」

「喜んで。さて、では参りましょうか」

「うん!」

そういつて公園を後にしながら他愛もない話をしながらなのはの  
家に向かっていった。

「へえ。じゃあ葵君も付属小学校に？」

「ええ。おっと、ここみたいですわね」

喫茶店翠屋。なのはの両親が経営している喫茶店らしい。

「ただいま」

「なのは！」

そこにいたのはなのはのお姉さんが二人と兄一人。すると、メガネをかけたお姉さんがなのはの前に来て、

「心配したのよ！」

「ごめんね、お姉ちゃん」

「ごめんなさいね。迷惑かけちゃって」

そういうとメガネをかけていない方のお姉さんが葵に向かって話しかけてきた。

「いえ。それと、なのは」

「うん。あ、あのね！」

なのはの父が倒れてみんなが頑張っているから迷惑をかけないように耐えてきたこと。でもそれでもやっぱりさみしく、悲しかったこと、辛かったこと。全てを家族に話した。



「（そんなに嫌でしたか・・・。）大丈夫ですか、なのはさん？」

「う、うん。ありがとうなの。葵君／＼／」

どこかまだ顔が赤いなのはでした。

その後、お礼としてコーヒーとチーズケーキをごちそうになり、自己紹介もすませた。

翠屋を後にした葵はその後急いで家に帰りエクスとルミルの要望通りハンバーグを作り、リニスにはキャットフードと普通のご飯どちらを食べさせるべきか聞くと。

「キャットフードや猫缶もなかなかいけますがこれは非常食にしてください」

と、なかなかの好評だった。

## 第二話（後書き）

今後もよろしくお願いします。非才のみですが皆さんが楽しんでいただけるように全力を尽くしてまいりたいと思います！

## 第三話（前書き）

自己満足の形を読んでいただいてもありがとうございます。  
では、第三話どうぞ！

## 第三話

### 第三話

葵と人型の形態をとっているルミルとエクスはとある病院の一室に来ていた。

そこに書かれてあるプレートには『高町士朗』と書かれていた。

「マスター。まさかとは思いますが本当に？」

「助ける価値のある人は助ける。殺す価値しかない者は殺す。私はそういう人間です。いえ、もう人ではありませんでしたね」

「マスター。我等はマスターのためにある。いつ、いかなる時も共に」

「ありがとうございます」

そういつて病室に入ると、酸素マスクに隣の機械が規則正しく電子音で彼が生きていることを表していた。

「・・・これは、なんというか」

葵が驚くのも仕方がない。あちこちに包帯が巻かれて、まだ血がにじむ場所がある。普通の人間なら死んでもおかしくないはずの重傷だ。だが、それでも彼は生きようとしていた。

「家族のため・・・か」



そういうと彼は士朗のベッドの上にいる『何か』に向け、視線を向けた。

「家族のために生きようとしている人にお前は似つかわない。去れ」

だが、一向に『それ』は消えようとしない。『それ』は人型を模しているが明らかに人ではない。黒紫の身体に赤い目。明らかに人間ではない者がそこにいた。

「警告はした。ルミル。シンクロ、モード黒騎士」

「了解だ。マスター」

「漆黒の闇夜への誘う者、黒騎士！」

「シンクロイン！」

そういうと彼を包むように青黒い光が広がり子供バージョンの黒騎士の姿になった葵がいた。

「警告はした。無に還ってもらおう。【不の者】よ」

そういつて両翼刀をかまえ、彼が【不の者】と呼んだものに向け斬りつけた。すると、【不の者】はそれを避け、逃げようとした。だが、

「逃がすと思うか？」

——ヒュッ ドスッ

葵はすかさず黒翼を投擲し、黒翼刀は【不の者】の腹部を貫通し【不の者】ごと壁に突き刺さった。

そして、

「お前に生きる権利もなければ存在を有する意味もない。無に還れ」

そういつて白翼刀で【不の者】の首と胴体を切り離した。

すると、【不の者】の首はゴロンと床に落ちたかと思ったら次の瞬間には粒子になり胴体も首同様になった。

「マスター。【不の者】がいると言うことは、もしかして」

「ええ。イレギュラーは奴でしょう。どこまでも腹の立つ」

そういつて彼はギリっという嫌な音を立てていた。

「・・・んっ」

するとベットの方から声が漏れたのを聞き葵はそっちへ駆け寄った。

「お目覚めですか？ 高町士朗殿」

「君は？ 死神かい？」

「いえ。黄泉路への案内人です」

「？」

「まあ、今は知らなくていいことです。それよりも、あなたは生きなければならぬ。奥さんや娘さんたち、息子を悲しませるのが一家の大黒柱の役目ですか？」

「ち、がう」

「なら、早く元気になってあげてください。なのはさんは笑顔の方が似合いますからね。私も心から笑う彼女の顔が見てみたいですから」

「なのはを、知っているのかい？」

「ええ。泣いてましたよ」

そういつて今までの経緯を士朗に話した。

「なるほど。すまないね」

「いえ。ではこれで私は失礼しますね」

SIDE 士朗

「いえ。ではこれで私は失礼しますね」

そういうと彼の足もとに青色の何かが光り次の瞬間には彼はもういなかった。

「そうだな。一家の大黒柱が家族を悲しませてはいけけないな」

そういつて彼は天井を見た。

「早く元気にならないとな！」

そして徘徊に來た看護師が士朗の姿を見て急いで医者を呼んだ。  
何でもその時に「119番！ 119番通報！！」といていたらしい。

いや、病院はここですよ？ 看護師さん。

S I D E o u t

士朗いた病院から帰宅後、葵はすぐにリニスにあることを相談した。

「何かに取りつかれたようにですか？」

「ええ。些細なことでもいいんです」

「そう言えば」

「？」

「性格がいきなり変わったように思えました」

「性格が？」

「はい」

リニスの話によるとある実験中の時に事故にあいリニスの主の娘が事故に巻き込まれ死亡。その後、まるで性格がコロコロと変わるようになったという。

「間違いないか。でも確証はない。しばらくは様子見だな」

「」「はい」「」

### 第三話（後書き）

オリジナルは以上です。

次回からは無印に入っていきたいと思います。

ただ、原作を知らない！ どうしよう・・・。

## 第四話

### 第四話

高町士朗を死の淵から呼び戻して月日が流れた。

「ということで、引っ越しに伴い転入してきました神無月葵と申します。以後よろしく願います」

そういつて葵は自己紹介をする。本来葵は20歳。それに飛び級による大卒の資格もある。

が、なぜこうなったかというと、

——回想・なのはと出会った日

リニスと同時に贈られた制服はここからバスに乗って少し行った場所にある聖祥大付属小学校と分かった。レベルはここら辺では高いらしい。

段ボールには神様から送られてきた手紙があり、そこには『いづれ必要になる』とだけ書かれていた。

「と言われても私は小学校に行く必要もないと思うんですね」

エクスとルミルの情報収集によりこの地球の学習レベルが葵から見ればかなり低いというのが分かっていた。

「中学校でまだルート計算はおろか、因数分解も入っていないとは・  
・」

「歴史もかなり古い物を使っていますね」

「これって小学生レベルじゃないのかな？」

その光景を見ていたリニスは、

（この人たちの頭脳派チートです。小学校で因数分解はしませんよ  
普通は）

「さて、どうしましょう。明日からはとにかく情報収集に――」

「葵さん。やはり小学校に行ってみてはいかがでしょう？」

「いえ、しかし」

「思うに葵さんはこちら側の情報をほとんど手にしてませんよね？」

「ええ。ほとんど言うよりかは全くですね。元いた世界は魔法にあ  
ふれていましたがこっちはゼロ。まずそこも注意しないと」

「そこですね。小学校に行って情報を収集。些細なことでも引っ  
掛かることもあると思いますよ。それに学校の帰り道にばったり。  
ということもあるのではないのでしょうか」

リニスの意見を聞いて葵は少し考え。

「そうですね。その意見には一理ありますね。リニスにはその間、



家を護ってもらうことになると思います。あと、エクストルミルは連れて行くので」

「そうなんですか？ でも大丈夫なのですか」

「ええ。彼女達はいろんな形態を取れるので問題ないかと。あとリニスの方でも情報収集をお願いします。意見をくれてありがとうございます。ざいますね。リニス（ニコ）」

そういつて葵は満面の笑みでリニスに感謝した。

「／／／！！ い、いえ！ どういたしまして！（あの笑顔は何ですか！？ 反則です！）」

「ああ、マスターまたフラグ立て・・・」

「はあ、私たちですら落とせないのにどんどんライバルが・・・」

などとエクストルミルが呟いていた。

――回想終了

ちなみにエクストルミルは不可視の魔法によって見えないようにしている。

そして現在。女子からは「きれいー！」とか「お人形さんみたい！」とか「お持ち帰りー！」とか。言われている。

（最後のは犯罪ですよ？）

男子からは「イケメンだど!？」とか「コロスコロスコロスコス」とか「討伐令」など物騒な発言が出ていた。

(なぜ女と勘違いされなかったんだ?)

と考えていたが、すぐに制服のおかげですぐに男子と分かったんだという結論に至った。

(小学校ですよねここ?)

葵がそう思うのも無理はない。明らかに子供の行動力プラス大きい子供の発想が加わり(特に男子)はあまりに物騒だ。

「あ! 葵君!」

「おや、なのは「なのはだど!?!」え?」

「聖祥の三美少女の高町さん呼び捨てだど!?!」

「許すべからず!」

「殺す! 滅殺する!?!」

「あ、あはははは・・・」

葵はただ苦笑するしかなかった。

「先生。とりあえず私の席は?」

「そうね。高町さんの隣に「殺す気ですか？」だってそっちの方が面白いじゃない♪」

「……（ここ、本当に小学校？）分かりました」

しぶしぶながらも葵はなのはの隣の席に座り、

「よろしくねなのは（ニコ）」

「う、うん／＼／＼（かわいすぎなの！　ほんとうに男の子だね！？）」

と、フラグを立てるのでした。

（ん？　またか。だんだん距離をつかめてきたぞ？）

はい？　まあいいや。そしてHRが終わり一時間目の授業に入ると、

「さて、一時間目の準備を・・・あれ？」

すると、葵の周りには人垣ができていた。

「神無月君はどこから来たの？」

「前にいた学校ってどんな感じ！？」

「神無月君、趣味は！？」

「神無月君は女の子？　男の子？」

などと質問を受けていると。

「あんた達、いい加減にしなさい！ 彼も困っているでしょうが！」

そういつてあの人が気を突破してきた金色の髪の子がいた。

それに遅れてどこかおっとりとした女の子となのはもきた。

「えっと、あなた方は？」

「わたしはアリサ・バニングよ」

「月村すずかです」

「よろしくね二人とも。あと助かったよ」

そういつて笑顔で返すと、

——ボンッ

「あれ？」

「え、な、なんでもないわよ！（な、なによ、今のかお／＼／＼）」

「な、なんでもにゃいよ！？（か、かわいかった／＼／＼）」

しかし一人だけ、

「ぶ／＼／＼／＼！！（ライバルふえちゃったよ！）」

「さて、質問に答えようか。最初の人。北海道（嘘だけど）から来たよ。次の人は前の学校との比較だったね。あまり変わらないというのが答え。趣味は家事全般。小物作りも得意かな。あと読書もね。次は女か男なら私は男だよ」

そういつって次々と質問に答えるが、途中でアリサから順番にという指示が出たので周りがそれに合わせた。

その後授業を難なく答えた。それにあまりよくしない先生が因数分解というこっち側の小学生が答えられない問題を出してきたが難なく答え、かわりにフェルマーの最終定理を出し返り討ちにしたりなど意外と茶目っ気も出した。

そして昼休み。

「さてと、お弁当に「葵君！　いっしょに食べよ！」はい？」

声がした方に目を向けるとなのはとアリサ、すずかの三人がいた。

「よろしいのですか？」

「ええ。というかその敬語やめてくれない？　あとなのはと一緒にで名前でもいいから」

「わたしもそれでいいよ」

「と申されましたも、これが素、いや、ごほん。これでいいか？　アリサ、すずか」

「「／／」」

「ど、どうした？」

「な、なんでもないわよ！（しゃべり方変えるだけでこれって／／／」

「そ、そうだね！（かわいいからかっこいいになったよ／／／」

「は、はやくいくの！（葵君かっこいいよ！／／／」

「分かった。へエクス、ルミル。この口調、何か変か？」

へへぷしゅ／／／／／

「へあれ？」

神姫二人とも撃沈。その後口調を変えた葵。だが、一人称は癖で変えなかったらしい。

その後屋上にて昼食。

「「「いただきます」」」

そういつて各自弁当箱のふたを開ける。

「葵君のお弁当おいしそうだね？」

「そうか？ これぐらい普通だと思うが？」

「ひとつもらっていい？」

「どうぞ。どれがいい？」

そういつてすずかは卵焼きをチョイスした。

「わかった。はい、あーん」

「ふえ！？」

「ん？ どうした？ あーん」

「（あーんって／＼／＼）あ、あーん・・・」

そういつて照れながら食べるが当然味など恥ずかしさのあまり分らない。

「どうだ？」

「お、おいしいです／＼／＼」

「そうか。それは良かった。自信作だから」

「え！？ これあんたが作ったの！？」

「ああ。叔父はではらっている時間が多くてな」

「そ、そうなんだ・・・」

「ご、ごめん」

「気にするな。それより食事中だ。湿っぽい空気と食事は合わない。ほれ。二人ともどれがいい？」

「え！？　じゃ、じゃあこれ」

そういつてアリサが選択したのはアスパラのベーコン巻。

「はい、あーん」

「（うっ／＼／　すずかがしているのを見て思ったけど、いざやるとなったら恥ずかしいわね。でも！）あーん」

咀嚼<sup>そしゃく</sup>し、そして、

「お、おいしい・・・／＼／」

「そうか。良かった。なのはは？」

「じゃあこれ」

指差したのはミートボールだ。

「あーん」

「あ、あーん／＼／（ふにゅ／＼／　恥ずかしさとうれしさが  
／＼／）」

そして咀嚼。



「おいしい！」

「なのは、それはいくらなんでも冷凍「それも私の手作りだ」えええー！？」

『神無月葵————！！！！！！』

「これは、クラスの男性陣。何か用か？」

「決まっている。クラスの三美少女と食事だけでなく、あまつさえ「あーん」だど！？ うらやm・・・じゃなくてけしからん行為を！」

「気にするな。好きでやっているだけだ。ならお前らもしたらどうだ？」

「な、なんだと？」

「その前に三人の許可を取るのが前提だがな」

「お前はしたのか！？」

「・・・忘れてた」

『殺す！！』

そういつて全員がこっちに向かってくるので葵は、

「よっと」

そのまま前に突き進み、一気に棒高跳びの要領で飛び、人間離れした跳躍力で一気に屋上の入り口まできた。  
「さらば！」

そういつて階段を下りて行く。

「後を追え！」

「逃がすなー！」

屋上に取り残されたクラスは葵の後を追う。そして屋上にはなのは達しかいなくなった。

「にやはははは、葵君大丈夫かな？」

「さあ？」

「し、心配だよ」

そして全員がいなくなったのを見計らって、

「全く、落ちついて昼食も食べれないな」

「「「なんで!?!」」」

「なにが?」

「あんた、あいつらに追いかけて屋上から!?!」

「ああ。屋上の扉の裏に隠れた。たまた入り口周辺誰もいなかった

からな」

そして何事もなかったように昼食を再開した。

その後授業も難なく受け、あっという間に放課後。

（確かにつまらなかった。割愛してもらった方が私としてもうれし  
いな）

「葵君！　これからひま？」

「なのは。いや、今日の御勤めも終わったし後は帰えるだけだが？」

「ならちようどいいわ。これからあんたの歓迎会するから」

「よかったらこない？」

「翠屋？　ああ、なのはの両親がやっている喫茶店！」

「うん！」

「知ってるの！？」

「まあ、成り行きでね。いいよ。じゃあ行こうか」

「」「は～い♪」「」

そういつて帰り道に翠屋に寄っていき、あっという間に翠屋。

——カランコロン♪

「いらっしゃい、ってあらなのはにすずかちゃん、ありさちゃんに、葵君だったかしら？」

「はい。御無沙汰です桃子さん」

「おや、君は」

「はじめまして。神無月葵といいます」

そういつて葵は士朗に一礼した。

「はじめまして。私はなのはの父親で高町士朗だ。ここのオーナーもやっている」

すると、士朗は葵の近くに行き、

「やはり君かい？ 私を助けたのは？」

「ええ。あの時も言いましたがなのは達を悲しませるのはいやですよ？」

小声で相手にしか聞こえないように話す。

「本当にありがとう。今日は私のおごりだ。好きなだけ食べて行くといいよ」

そういつて最後の言葉はアリサとすずかにも聞こえるように言った。

「ありがとうございます」

そういつて葵はコーヒー（ブラック）とモンブランをいただいている。

「そう言えば葵君は本当に見れば見るほど女の子に見えるわね」

そう言ったのは桃子だ。

「ええ。よく言われます」

「あら？ 怒らないの？」

「ん〜どうでしょう。この顔は生まれつきですし、それにこれはこれで結構気に入ってるんですよ」

「あら、そうなの？」

「はい。レディースデーとか、女性限定の割引とかいろいろと」

「あらあら、意外と主夫しているのね」

「ええ。最近だと外食でも結構安く買えますしね」

と、何とも言えない話をしていた。

「なら、これ着てみる？」

そういつて取り出したのは一着のメイド服。

「・・・なぜに？」

「かわいいからよ」

「はあ。まあ着てみましょうか」

「「着るの!？」」

――数分後

「ふむ。悪くない。というか女ものの服というのは動きやすいですね」

「「「~~~~~／／」」」

そこには悶絶する三人の少女と、

「あらぴったり！」

「ではこれでお手伝いをしましょうか？」

「いいの!？」

「ええ」

その後お人形さんみたいな男の娘がお手伝いしていると一気に広まり、その噂の影響で翠屋は過去類を見ない売り上げをしたとか。

## 第四話（後書き）

かつこの使い方ですが「」通常会話・《》デヴァイス・「◇」念話・○心で思ったこと

という感じで行きたいと思います！

ただエクスとルミルの「」は人型の状態、《》だとイヤリング、もしくは騎士モード中だと思ってください

※指摘があったので強引に修正をしました。

## 第五話（前書き）

戦闘描写難しい。効果音だけでは限界が・・・、  
かといって説明  
だつても・・・  
どうすりゃいいんだーーーーー!?



## 第五話

### 第五話

だいぶ学校にもなじみ始めた葵。今日も何事もなく過ごした。帰ったら情報収集を行っているがやはりイレギュラーの手掛かりは士朗の一件以来何もつかめずに終わっていた。

そんなある日の晩の夜。

「へ誰か、僕の声を、聞いて。力を貸して！ 魔法の力を！>」

「・・・わけがわからん」

翌日

学校での授業もそつなくこなし放課後。・・・え？ その間の話？ そんなもの物割愛。小学生の授業風景見て何が楽しいのやら。

「そう言えば、葵君学校に慣れた？」

「ああ。問題もいたって楽だしな」

「うう~~~~~なんであんたはいつもわたしを上回る成績を叩きだすのよ！」

「簡単だ。問題を解き終わった後に問題の間違いを先生方に問いただしているからだ」

「え？」

「それで、葵君って何点取ってるの？」

「大体百点越え」

「無理じゃない！！」

そう言っているうちにある公園の雑木林の前にたどり着いた。

「ここから行くと塾への近道なのよね」

「そ、そうなんだ」

「あ、葵君。て、つないでいいかな？」

「ん？ 構わんが」

そういつて葵はすずかの手を握る。

「あー！ すずかちゃんだけずるい！ なのはもするの！」

「すずか、あんたはー！！」

すると、また今朝と同じ声で助けを求めるSOSが聞こえた。

「（またか。一体何なんだ？）ん？ なのは、どうかしたか？」

「え？ ううん、な、なでもないよ」

しばらく歩いていると、なのはが立ち止りあたりを見渡すと、

「あれ？」

「どうしたのよ、何か見たの？」

「う、ううん、なんでもないよ？」

「そう？　ならいいのだけど」

「へたすけて！　」

（なるほど。なのはが挙動不振だったのはこれが原因か）

「ねえ、何か聞こえなかった？」

「なにかって？」

「声みたいなの。たすけてって」

「声なら聞こえたな」

「「「えっ！？」」」

「こっちだな」

おおよその見当をつけ、葵は道を奥に進みだすと、そこに一匹のフェレット(?)を発見した。

「葵君、すずかちゃん、アリサちゃん。この近くに動物病院はあったけ!？」

「ちょっと待って、この近くだと」

「家に連絡してみる!」

(このかすかな魔力。リニスと同じか?)

その後近くの動物病院にて治療などをしてもらった。

翌日休み時間。

「あの子どうしようか?」

「わたしのいえには猫がいるし・・・」

「わたしの家も犬が。あんたは?」

「悪い。私の家にも猫が<sup>リニス</sup>一匹いてな」

「猫飼ってるの! 葵君!」

すると、急に食いついてきたすずか。

「あ、ああ。叔父の猫だな。とりあえず理由はすずかと同じで無理だな。」

「そっか。とりあえず家に帰ったらみんなに相談してみるね」

その後授業も終わり自宅に帰ると、このことをリニスに伝えることにした。

食後の紅茶の時間にエクスとルミルも人型に戻りリニスを交えるのことを報告した。

「そうですか。魔力があるフェレット」

「ああ」

「ところでフェレットって何ですか？」

——ズゴオオオ——

「あら？」

「ふえ、フェレットというのはイタチ科の動物だ。まあ、だが私が知識と知っているフェレットとは違ったな」

「もしかしたら私と同じ使い魔かもしれませんね」

「とりあえず害はなさそうだな」

——ピキーン

「これは、魔力反応」

「ですがここに魔法文化はありませんでしたよね？」

「エクス反応地は？」

「はい。出ました！　あのフェレットがいた病院の近くです」

「まずいな。エクス、ルミル。行くぞ」

「はい！」

「了解だ」

そういつてエクスとルミルを人型からイヤリングに戻しすぐに場所まで飛翔（片方は白、片方の翼）で空に飛び立った。

「いたな」

「あれはなのはさんですね？」

次の瞬間ピンク色の光にあたりは包まれそこから出てきたのは学校の制服をモチーフにしたなのはがいた。

「エエ——！　なにこれ！？」

「知らんのかい！？」

知らずに突っ込みを入れていた葵。

「っとその前に、なのは！　前！？」

「え？　ッ！？」

すると、そこには魔物がなのはに体当たりをしようとしてたところ

ろだった。

《p r o t e c t i o n》

あの杖から女性の機械音声が聞こえるとなのはの周り障壁がはられ難を逃れていた。

「仕方ない。ルミル。シンクロイン」

《今回はルミルちゃんなのか》

《了解だマスター》

「漆黒の闇夜への誘う者、黒騎士！」 《シンクロイン！》

すると、葵の髪は白銀になり上下全て黒で統一されところどころ白い刺繍が入っている装備に切り替わった。

「風を纏いて宙を舞え！ 鶴翼の舞！」

白と黒の翼の形をした剣は風を纏い葵はそのまま魔物足元を狙ってその風を放った。

すると、風は竜巻状に変化し魔物を宙に上げたそのすきに葵はなのをとフェレットを抱きかかえ人が少ない場所へ避難した。

「あ、葵君！？ あれ？ でも髪の色が！？」

「そうだ、お前も知っている神無月葵だ。あまりしゃべるな。舌をかむぞ！」

ある程度人目の少ない場所に行きつき、葵はフェレットの方を見る。

「あなたはあれが何かを存知でいるようだが？」

「はい。あれは忌まわしい力によって生み出された思念体。あれを封じるにはその杖で封印して元の姿に戻さなければならぬんです！」

「なるほどな。ならなのは。そのフェレットから封印の仕方を教えてもらってくれ。こっちはお客様を出迎えねばならないようなのでな」

すると、その場には先ほどいた魔物がもう目の前にまで来ていた。

葵は再び両翼刀を構えるが、すぐに上に放り投げる。

「その翼に終わりはない」 《終わりがないことが悲しく》

すると、葵の手には再び両翼刀が現れていた。

「永遠に紡がれ、終わることを知らない」 《永遠に負の連鎖がつながる》

さらに上に投げ、さらに手に両翼が、

「神は憐れんだ」 《そしてその翼に使命を与える》

そして六枚の翼は魔物の周りを舞うようにあたりを囲んだ。



「咎人を裁く役目を」 《裁きの時は来た》

その詩が謳い終わることには白黒合わせて6本の翼が舞を舞っていた。

「翼による（ウィング・オブ）」

すると、剣の羽の部分が一枚ずつ離れ白き羽と黒き羽が咎人めがけ一氣に向かった。

——ザシュ ザシュシュ

肉に刺さる音が聞こえる。魔物の姿は白黒の羽に刺されて見るも無残な形になっていた。

「裁き（ジャッジメント）！」

そう葵が叫ぶと羽根がいきになり爆発する。

「んゝ。手ごたえなし。本当に倒したのか？」

すると、魔物がそこにはいたが、明らかにさっきの一撃が効いたのか弱っているのが目に見えた。

「相手はだいぶ弱っているようだな。これは好機。なのは！」

「うん！ リリカル、マジカル・封印すべきは忌まわしき器！ ジュエルシード封印！」

《sealing mode set up》

レイジング―ハートの先端部分が変わり、桜色の光のリボンを出し魔物を捕える。

《スタンバイ レディ》

「ジュエルシード、シリアル21封印!!」

《sealing》

さらに追い打ちをかけるようにレイジングハートからもリボンが出て魔物を貫いて行き、まばゆい光が出る。

「ま、まぶし」

光が収まるとそこにはひし形をし【XX?】と書かれた宝石が出てきた。

「これがジュエルシードです。レイジングハートで触れてみて下さい」

フェレットの言うとおりになのははレイジングハートとの先端の赤い部分で触れると吸い込まれるように宝石は消えた。

それを合図になのはの服装も私服に変わった。

「お、終わったの？」

「はい。あなた方の・・・きょうりよく・・・」

そういつてフェレットは倒れた。

「あ、あれ！？ 大丈夫なの！？」

すると、葵がすぐにより、

「息はある。気絶しただけだ。それより」

周りからはサイレンの鳴る音が聞こえた。

「ここから逃げよう。何を聞かれるかわかったもんじゃない」

「う、うん」

「というわけで」

葵はなのはを抱きかかえ（いわゆるお姫様だっこ）をして飛翔をする。

「へ、ふえええええ！」

「安全な場所までだ。少し我慢してくれ」

「う、うん・・・／＼／＼」

## 第五話（後書き）

- ・ お、終わった。ようやく・・・燃え尽きたぜ、真っ白にな・・・

## 第六話（前書き）

連続投稿。

駄文なのに書いていると楽しくなってしまう今日この頃。

## 第六話

### 第六話

S I D Eなのは

今わたしはお空を飛んでいます。しかも大好きな葵君に抱えられてです。

葵君の背中には白と黒の翼が広がっていて何とも言えないきれいな光景です。

そして近くの公園に下りて、わたしもおろします。もう少しあの状態でもよかったのにな・・・。

「さて、人語を話すフェレットとは。まあ、その辺はどうでもいい。まず君の名前を教えてくださいませんか？」

「はい。僕の名前はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だからユーノが名前です」

ユーノ君か。かわいい名前だな。

「ユーノ君か。わたしの名前は高町なのはなの。小学三年生。友達や家族はなのはっていうの！」

「私は神無月葵だ。神無月は呼びづらいと思うから葵でいい。代わりに私もユーノと呼び捨てで呼ばせてもらうが良いか？」

葵君がそういうとユーノ君も、

「はい。あの・・・それよりも・・・その巻き込んですみませんでした！」

そういつて頭を下げるユーノ君。

「別に私は構わない。好きでやっていることだ」

「で、ですが・・・」

「なのは。君はどうなんだ？」

ふえっ！？　ここでわたしにふるの！？

「当たり前だ。今回の一番の被害者は私ではなく君だ」

心が読まれた！？

「・・・よくわかんない」

「そうか。まあ、いきなりこうなったんだ。それも仕方ないだろう。それよりもユーノ」

「はい。なんでしょう？」

「その、抱かせてもらってもいいか？」

「はい？」

葵君は何言ってるんだろ？

「良いですけど？」

「そうか。では！」

そういつて葵君は目にもとまらない速さでユーノ君に抱きついた。

「んゝ。なかなかいい毛並みですね。それに、イヌとも猫とも違う毛並み、そしてこの愛くるしい目。なんとも、たまりません！」

そういつて葵君はユーノ君に頬ずりをしている。

「あ、葵君？」

「はっ！？　また悪い癖が。でもいいといったのです。許可は取りました。というわけで続行です！」

そういつて再び再会した。

――数分後

「満足しました。ありがとうございます」

そういつて葵君は礼儀正しく頭を下げお礼をした。なんかいつもと違った一面を見れて新鮮だったの。

「葵君って動物好き？」

「んゝ。というよりかはかわいい物好きですね」



「かわいい物好き？」

「成長した犬より仔犬。猫より子猫。ぬいぐるみ。そういった類のものかな」

「ああ。なるほど」

すると、葵君も私服の姿に戻ると、髪の色も銀色からいつもの黒色の髪に戻っていた。

「ねえ、葵君。なんで髪の色変わるの？」

「まあ、魔法の影響と思っていただければ幸いだな。それよりもう遅い。家の人も心配するだろう。帰るとしよう」

「うん。ユーノ君は・・・そうだ！ 私の家に来ない？ 実はお父さん達にあなたを飼っていいか聞いておいたの」

「それは助かるけど・・・いいの？」

「うん！」

「そうか、ではなのはとユーノを高町家まで送ろう」

「いいの？」

「言い訳を考えているならな」

うぐっ、そう言えば全く考えてなかった。

「はあ。とりあえず考えているから行こうか」

そういつて葵君と一緒に家にむかって歩き出した。

S I D E O u t

さて、フェレット改めユーノを連れてなのはの前に来ると、

「（人の気配か・・・）なのは。玄関で二人誰がいる」

「え!？」

「まあ心配するのも納得だ。二人で入ろう」

「うん」

そういつて門を開けると、玄関にいたのは恭也と、美由紀がいた。

「こんな時間にどこに言っていたんだ？ 葵君、君もだ」

そういつて何気に殺気を飛ばしてくる。まあこんな時間に男女二人りというのは世間的に悪いが相手は小学生だ。

「なのはがフェレットが心配だと言うので私のところの保護者と一緒に病院まで行っていたんです」

そういつて葵は恭也に事情を説明すると、

「この子がさっき言っていたフェレットね。なのは、この子が心配だから様子を見に行ったのね」

「まあ、葵君と葵君の保護者がいたのならいいものの。なのは、葵君と葵君の保護者に後でいいからちゃんとお礼を言うんだぞ」

「うん！」

「さて。では私はこの辺で失礼します」

そういつて葵は高町家を後にしようとすると、

「ちょい待ち」

「え？」

美由紀に両肩をつかまれた。

「ご飯を一緒にしない？ それにもう遅いし」

「いえ、しかし家に人を待たせてますし」

「それなら心配いらないわ」

そういつて玄関から出てきたのは桃子であった。

「はい？」

「お家の人には連絡をすでにとつてあるわよ」

「……電話番号教えましたか？」

「いいえ」

「ではなぜ知っているのでしょうか？」

「ふふふ」

「（まずい。この笑いは非常に笑い。絶対に聞いてはならない。後でリニスに聞いてみるか。）では夕飯だけ」

そうして高町家にて夕飯をごちそうになり、今後のユーノについて話し合った。その後はそのまま家に帰った。

「そうですか。あの反応はジュエルシードだったんですね」

「知っているのか？」

「ええ」

リニスの説明によるとロストログア、過去に何らかの要因で消失した世界、ないしは滅んだ古代文明で造られた遺産の総称でありジュエルシードもその一つらしい。

そしてジュエルシードとは全部で21個存在し、一つ一つが強大な魔力の結晶体で、周囲の生物が抱いた願望を叶える特性を持っている。

「はあ、何ともややこしい物を」

ルミルは溜息をしつつもつともなことをつぶやいた。

「ですが、これも所詮人が創りし物。仕方ない。発見次第、なのが行った封印は、無理だから強制的に魔力を無力化するか破壊のどちらかをしよう」

その言葉を聞いたリニスは、

「は、破壊！ あれを破壊できるんですか！？」

「不可能ではないでしょう。もともといた世界ではあれよりも危険なものなんていくらでもありましたからね」

「そんなことまで」

「ただし、危険な仕事なので私のいた世界の国家機関またはそれに許可を得た組織そみなんですけどね」

葵は昔を思い出しながら紅茶を飲み、

（もうあんな思いをさせるのはごめんだ。なのはにもさせたくはない。傷を負うのは私だけでいい）

そう新たに誓いを立てるのであった。

## 第六話（後書き）

駄文ですが楽しんでいただければ幸いです。  
感想、アドバイスお待ちしております。

## 第七話（前書き）

楽しいが一番、楽が一番がもつとうの楽一です！  
スピードを取ったら何も残らないこの小説を読んでいただいて感謝  
です！

## 第七話

### 第七話

翌日 学校

「おはよ〜」

「おはよう。相変わらず寝むそうだな」

「うみゅ〜」

「まあ、昨日あんなことがあったばかりだったから仕方ないか」  
クラスに入ると、アリサとすすかがこっちに来て、

「なのは、昨夜のこと聞いた？」

「ほえ？ 昨夜って？」

「昨日言った病院で、車の事故があったらしくて・・・壁が壊れちゃったんだって」

「あのフェレットが無事かどうか心配で」

「うん・・・」

「あの・・・えっとねえ〜・・・そのけんは・・・」



「はあ」

葵は軽くため息をついて、なのはに話を合わせるように言って、  
適当にごまかした。

「そっか。無事でなのはの家にいるんだ」

「でもすごい偶然だったね。たまたま逃げだしたあのこと道でばったり会うなんて」

「「ね」」

適当に嘘ついたことを信用してくれ何とか難を逃れた葵となのは  
であった。

「ねえ、葵君。本当に良かったのかな・・・な、なんというか、その」

「嘘はついていない。多少、ちょっと脚色を加えただけだ」

「あ、あははは・・・そ、それでね。なんかあのこ飼いフェレットじゃないみたいで当分家で預かることになったよ」

「そうなんだ」

「名前つけてあげなきゃ。もう決めてる？」

「うん。ユーノ君って名前」

「ユーノ君？」

「うん。ユーノ君」

「へえ」

ユーノがいない場所でユーノについて授業開始まで話し合う三人。

その時葵はこんな些細なことでも話し合えるというのはやっぱり女子がお話し好きなのだからだろうかと考えていた。

（そう言えばリニスやルミル、エクスも些細なことで三時間ぐらい話してたっけ？）

授業中葵が黒板に集中していると、

「へ葵君、聞こえる？」

（ん？　なのはの声が？　どこから？）

「へ念話っていうだって。ユーノ君から教わったんだ！」

「（念話？　テレパシーみたいなものか。なら）へこうか？　ユーノ、なのは。聞こえるか？」

「へうん。聞こえるよ葵」

「へそうか。で、どうかしたのか？　急ぎの用か？」

「へううん。でも、二人には知っておいてほしいことかな」

そういつてなぜ、ユーノがこう言ったことが起こってしまったのか。そして、なぜジュエルシードが海鳴市に散らばったのか。という経緯を話してきた。ジュエルシードのことについては、葵はリニスから情報を得ていたので分かっていたが知らないのはは驚いていた。

なのははユーノの話を聞いて自分自身もジュエルシードを集めるのを手伝うといってきた。

「へだけど、昨日みたいに危ないことだってあるんだよ！」

「へユーノ。それは言い訳にしかない」

「へえ？」

「へ話を聞いた限り君は発見しただけだ。そこまで君が責任を持つ必要はない。まじめなのもいいが君の場合は度が過ぎている」

「へうん。でも、やっぱり僕が」

「へ話は最後まで聞け。それになのはや私も、もう無関係ではない。なら、手伝えることだけでも手伝おう。力になれることは力を貸そう。それが友というものではないのか？」

「へいいの？」

「へ私は構わないが。なのはは？」

「へうん！ わたしもいいよ！>」

「へだそうだ。協力関係は結ばれたのだ。これ以上君が責任を負う必要はない。分かった？>」

「へありがとう。葵>」

「へそうそう。それにユーノ君。いざとなったら葵君が護ってくれるよ>」

「へああ。全力で守らせてもらうよ>」

そういつて念話を切ろうとしたら、

「へそうだ葵！ 君の使っていた魔法は何なんだい。あの翼のような形の剣も六本出したし、あのジャッジメントという魔法も見たことがない。さらに言うならあの背中の翼は？>」

「へそ、そうだよ！ あの時は言えなかったけどなんなの！？>」

「へふむ。そうだな。説明には時間をとる。帰りを共にするならその時に話そう。ユーノ。学校までは来れるか？>」

「へうん。なのはの魔力を辿れば何とか>」

「へではその時に話そう。それよりなのは。授業に集中しておけ>」

「へはいい♪>」

そして昼休み

「葵君。そのリュックの中身って何？」

「ん？　すずか。君が知らなくてもいいものだ。当然アリサとなのはもな」

「どういうこと？」

「いい加減毎日あの時間過ごすのも飽きた。というわけで制裁を加える道具を持ってきた」

「制裁？」

「見たければ見ていい。途中で嫌になったらこれをつけるといい」

そういつて葵は三人に『完全光り遮断アイマスク』と商品名がデカデカと書かれた物を渡した。

「そうだ。葵君、来週の週末は暇？」

「ん？　ああ。そうだな、別にやることもない。どうしたんだ？」

すると、アリサが、

「来週の週末にすずかの家でお茶会をするつもりなんだけどアンタも来ない？」

「お茶会？」

「そ、お茶会。アンタ、すずかの家に行ったことないでしょう？  
こういう機会でもないとアンタ行きそうにないし、どうかと思って  
ね」

「そう言えばすずかは猫を飼っているのだったな」

「え？ うん」

「そうか。では参加させてもらおう！ 手土産にケーキでも持って  
いこう」

そういつて目をキラキラさせながら遠足を明日に控えた子供のよ  
うに気分が浮かれていた葵だった。だが、次の瞬間には、

「ふむ。とりあえず今日もか」

溜息を少しはきながら屋上の入り口を見た。

「？ あんた、何一人で納得したような顔してるのよ？」

「アリサか。なに。飽きずにまた男子達が来たなと思ってな」

「ふえ？」

「「「「神無月葵————！！！！」」」」

そこにいたのはいつも通りクラスの男子。

「またか。飽きないな、君達も」

「ほざけ！ このハーレム野郎！！」

「オレたちの青春を返せ！」

などと、葵にとってはわけのわからないことをほざいている。

「はあ。いい加減ゆっくり昼食をしたいから、今日はお前らに、いや、貴様らに痛い目を見てもらおうか。フツ、フフフフフツフツ」

ーゾクツ

葵の不気味な笑いによって楽しい昼食は一気に崩壊。嬉しいO☆H A☆N A☆S Iの時間がやって来たようだ。

「なぐに、一瞬にして最大のトラウマを植え付けるだけだ。私にとって憩いの時間を毎日毎日変にとられるのもいい加減あきた」

そういつて葵は弁当が入っていたリュックから二つのフライパンを取り出した。

「これは特注品のフライパンでフライパンの上にダイナマイト20本置き同時爆破しても壊れないという素晴らしいフライパンだ。これで今から貴様らとO☆H A☆N A☆S Iする！！」

それを聞くやいなや男子達は一気に屋上から逃げるが、

「逃がすと思うか？ 生け贄共」

その言葉と同時に葵が屋上から消え、数分後。

「ふう。やはりすごいな。この会社のフライパン。全員を昇天（無論生きてます）させた後にもかかわらず一切のへこみ、キズが無い。後でトマホークの爆撃にも耐えられるフライパンでも買うか」

「あ、あの、あ、葵君？」

「ん？ 何だ？」

「だ、男子達は？」

「なに気にすることは無い。そう、気にすることは無いよ」

その後、頭にマンガのようなタンコブ数段を創った男子達が発見された。なにやらフライパンだの葵怖いだの三途の川が見えたのだの言っていた。ただ、その後フライパンという言葉を聞くとガタガタとまるでヘビに睨まれた蛙のように震えていたとのこと。

余談だがこの日以降男子達は昼食に屋上に現れなくなったとか。

そして放課後、ユーノと合流したが、さすがにアリサ達と一緒になのでリュックの中（後でなぜフライパンが入っていたのか聞かれたがスルー）に入れ、アリサとすずかと別れ、リュックからユーノを取り出すと、ユーノは授業中にした質問をしてきた。

「へそれで、葵。君の魔法は何なんだい？」

「へああ。その前に私はこの世界の住人じゃないんだ」



「へうにゃ? どういうこと」

「へ簡単に言うと平行世界の住人。可能性の世界から来たということだ」

なのはの方を見ると頭の上にまだ? マークが浮かんでいた。

「へ簡単に言うところの世界にはいくつものに多様な世界がある。その世界には例えばなのはが魔法と出会わなかった世界。また、なのはと私が出会わなかった世界。はたまた海鳴市という存在そのものがない世界という物があるんだよ」

「エエ————!!」

「声が大きなのは」

そういつて葵は急いでなのはの口をふさぐ。

「へでも、それと君が魔法を使えるという意味にはつながらないと思うけど」

「へユーノ。さっきも言ったが私は可能性の一つの世界から来た。私のいた世界は、魔法が一般化された世界。つまり日常いたところに魔法があるという世界からこっちに来た。とすれば私が魔法を使えるのも納得するのでは」

「へなるほど。そう考えれば納得できる。それなら僕がいた世界とは全く異なる魔法というのもうなずける」

「へご納得いただけたかな?」

「へうん!」

「う、うにゃ~~~~」

なのはは納得できていないどころかのうない処理が追い付かず頭から煙をふかしていた。

「へユーノ。なのははに後でかみ砕いて説明してやってくれ」

「へわ、わかった」

すると、何か時が止まった感じを察知し、

「へユーノ君これって!?!」

「へ新しいジュエルシールドが発動している!」

「へ方角は・・・神社の方だ。急ごう!」

「へうん!」

神社の階段を駆け上り、そこで見たのは、

「犬? いや、地獄の番犬といった方が合うな。今回はエクス。白騎士!」

《はい! いきます!》

「光の道を指し示す者、白騎士！」《シンクロイン！》

すると、葵の姿は白い光に包まれそこから現れたのは白銀の髪をし、白い全身鎧に包まれ、右手には白を基調としたアドミック・ジヤベリンと呼ばれる砲が、左手には魔力によって形成されるビームソード内蔵のシールドに、さらにアルヴォPD11と言われる白を基調としたハンドトガンを内蔵している。

「飼い主を安全な場所に避難させる。エクス、アルヴォに魔力弾セツト」

《魔力弾セツト、いつでもどうぞ！》

「ファイヤ！」

—ダンッ　ダンッ　ダンッ

すると、白色の魔力弾が犬めがけ数発発射され、多少の時間を稼いでいる間に葵は、加速魔法を使い一瞬にして飼い主の場所まで行き、比較的安全な場所においてきた。

「なのは！　時間は私が稼ぐ！　その間にジュエルシールドを封印してくれ！」

そういつてアドミック・ジヤベリンをしまいもう一つアルヴォを取り出し、連射して足止めする。

（くっ、思った以上に固い！　それに速度もなかなか・・・）

そういつて少しすきを見せたのがいけなかった。犬（？）はその

一瞬のすきをついてなのはの方に向かった。

「しまった！？　なのは、逃げろ！！」

「こっちに来る！　なのは！　レイジングハートとの軌道を！」

「え！？　・・起動ってなんだっけ？」

「【我は使命を】から始まる起動パスワードだよ！」

「ええ〜！？　あんな長いのおぼえてないよ〜」

「も、もう一度言うからそれを繰り返して！」

「う、うん！」

起動パスワードを言おうとするのはだったが、敵がそれを待つわけもなく、なのはに向かって跳躍する。犬に向かって威嚇射撃をしようとした時、レイジングハートが光り出した。

「レ、レイジングハート！？」

《standby, ready set up》

光が収まると杖は持っていたが、なのはは制服のままであった。

「（まずい！）シールド展開！　アルヴォ収納。ジャベリン起動後魔法エネルギー8%で収束砲セット」

《イエス　マスター》

急いでなのはの前にいき、楯を前に出し、魔力でエネルギーフィールドを展開した。

「私が全力でなのはを護る！ その間に防護服を着ろ！」

「う、うん！」

「ユーノ！ やり方を教えてやれ！」

「わ、分かった！」

葵が時間を稼いでいる間にユーノが説明をしていると、レイジングハーとが、

《b a r r i e r   j a c k e t》

バリアジャケットが展開された。

（オートモードでもあるのか？）

《マスター！ チャージ終了！ いつでもどうぞ！》

「分かった！」

そう言って照準を犬の脳天めがけ、

「その一筋の光は道」 《闇夜を切り裂く一途》

すると、砲口の前に魔法陣が展開された。

「光りの道は何を示す」 《人の歩むべき正しき道を》

白銀に輝く球体状の光が集まりだす。

「されどその道に外れるものも在り」 《神はそれを見て嘆いた》

球体はさらに大きくなり、光はさらに輝きを増す。

「神はその者に罰を下す」 《人はそれ恐れ慄いた<sup>おの</sup>》

球体はある程度の大きさになると、収束は終わった。しかしそれは裁きの時だった。

「ギュリーノス・ブレイカー！」

そして裁きは下された。

ーキイイイイイイイイイイイイン

甲高い音と共に、魔物はその砲撃をゼロ距離から暗い数メートル飛ばされた。

「・・・・・・・・・・」

「エクス。冷却モードへ移行。その後アルヴオを頼む」

《りょくかい♪》

久々の活躍なのかエクスはかなり上機嫌であった。

「なのは、封印を頼む」

「・・・・・・」

「なのは？」

「え、な、なに！？」

「封印を頼む」

「わ、わかったの！ レイジングハート」

《イ、 yes My Master sealing mode  
set up》

あのレイジングハートがどもった！？

（少し黙ろうか？）

サーイエッサー！

さ、さて・・・・魔物に向けたレイジングハートから桜色のリボンが放たれ、魔物を包み込む。

《standby ready》

「リリカル、マジカル！ ジュエルシードシリアル？？封印！」

《sealing》

封印されたジュエルシールドは吸い込まれるようにレイジングハートの中に入っていた。

《R e c e i p t    N o .   X V I》

「これでいいのかな？」

「うん。これ以上ないくらいに……」

ユーノがそう言うとなのははほほを染め少し照れくさそうにしていた。

（なのはは魔法の才能がある。だが、出来れば私と同じ道を歩んではほしくない。そのためにも……いや、余計な御世話だな）

そういつて葵はなのはのそばにより。

「お疲れ様」

「ううん。葵君もサポートありがとうね。でも、あれはやりすぎじゃないの？」

「大丈夫。出力は抑えてあるし殺さないようにしてある」

「非殺傷設定のこと？」

「ああ。ユーノの世界にもあるのか」

「うん。でも葵はなんで攻防に徹していたの？」



「私の魔法は封印ではなく対人専用の兵器だ。封印や相手の封ずるのを目的ではなく殺すのを目的として設計されている。だが今までの攻撃はあくまでも訓練用にプログラムされたものだからダメーじだけで済んでいる」

「「葵（君）は何者なの!？」」

「秘密だ」

そう言って葵達は帰路についた。

## 第七話（後書き）

いやあ、自己満足ですけどが楽しんでいただいたら幸！  
これからもよろしくお願いします！

## 第八話（前書き）

お気に入り件数が16件もあった。  
こんな、こんな多分にお付き合いしてもらっている方々本当にあり  
がとうございます。

## 第八話

### 第八話

あの神社での一件後なのはも徐々に力をつけてきて、ジュエルシールドも五個目を確保した。

ちなみに葵は……。

「くっ……」

（あの子は一体。なのはと同様の魔法使いか？）

目の前で繰り広げられている戦いに目をやっていた。

片方は金色の髪に鎌を持った少女。おそらくなのはと同じ歳だろう。

片や、カラス。

「カラスにしては大きい。ジュエルシールドであんなったのか。何ともややこしいものだな」

そう言いつつも観戦を決め込んでいたが明らかに速度で負けているのか金髪の子が押されている。

「止むえないか。ルミル。黒騎士」

《了解だ。マスター》

「漆黒の闇夜への誘う者、黒騎士」《シンクロイン!》

そして黒塗りの弓と、鋼鉄製の矢を構え、

「走れ、光よりも早く駆けよ」

魔力で形成された魔力の矢。強度はむろん軽さも自分が想像した形になるためある意味でチートである。そして、魔法陣が射線上に三つ重なるように現れ、そして矢は放たれた。

「疾風!」

—キュイイイイ—————ン

そして、その矢は見事にカラスの眼に刺さった。

SIDE????

「おかしい。ジュエルシールドが無い」

ジュエルシールドの反応があったので反応があった場所に着てみた。でも、そこにはもうジュエルシールドは無かった。

「もう誰かが? でも、探してみる価値は・・・!?!」

わずかな可能性を信じ近くを探してみると急に魔力反応があった。そして、振り返るとそこにいたのは、

「原生物……もう発動している」

私の何倍も大きい鳥。おそらくジュエルシードによる影響だろう。

すると、いきなりその鳥は襲いかかって来た。

「くっ、バルディッシュ！」

《p r o t e c t i o n》

間一髪でバルディッシュのプロテクションが間に合う。そして鳥は少し取り乱した。

「（この隙に）やあああああああ！」

バルディッシュで攻撃するが、それを飛ぶことによって鳥は回避された。まずい、下手をすればこっちより早い。

でも、それでも母さんのために。

「負けられないんだあああああ！」

しかし、これもよけられた。それだけでなく、相手はこっちに突っ込んでくる。

「まずい！ プロテ……ぐっ」

そのまま体当たりを食らい、その衝撃でバルディッシュを手放し

てしまった。

「くっ、な、なんで、こ、こんな・・・ところで・・・」

相手は再び攻撃に入ろうとしている。ああ、ごめん、アルフ、母さん。

――ザシュ

ギアアアアアアアア

「え・・・？」

すると、カラスはいきなり暴れ出した。良く見ると左目に矢が刺さっていた。

「ふう。ここの魔法使いは無茶をするのが当たり前なのか？」

そういつて私の目の前に下りてくるのは私と同じクロノバリアジヤケットを着た白銀の髪の子。

「しばらく休んでろ。数分、いや、一分以内で終わらせる」

「でも！」

「大丈夫だから」

そういつて振り返って笑顔を見せてくれる。でも、嫌じゃない。何だろう。心が落ち着く。彼女の背中を見るとどんなことでも乗り越えて行きそうだった。

「両翼刀」

すると、彼女の手に白い翼の形の剣と黒い翼の形の剣が現れた。

アアアアアア

鳥はそのまま彼に突っ込んでくる。

「許せ」

そういつて彼女はカラスの真上に飛び込み、双剣を構える。そして、

「炎を纏いし剣よ。その刃を持って彼者<sup>かのもの</sup>を焼き尽くさん！」

そう言うとき双剣は真つ赤に燃え始め、

「鳳墜閃！」

剣を振り落とす。ただ振り落とすだけじゃない。鳥が気付いた時にはもう遅かった。すでに振り落とされた後だったのだから。

鳥はそのまま地面に墜落。気を失っているのだろうか、ピクリともしない。

「す、すごい……」

あり得ないほどの魔力に、あり得ないほどの力。どれだけの経験を積みあげてここまで行けるのだろうか。



「ふう。意外と楽だったな。それよりも君はこれが封印できるのか？」

そういつてジュエルシードを指差す。

「は、はい！ バルディッシュ。ジュエルシード封印！」

そのまま私はジュエルシードを封印し、回収した。

S I D E O u t

「ふむ」

「え、な、なに？」

「いやなに。ひどい怪我をしているなと思ってな。そこに座ってくれ」

葵は近くにあったベンチを指差す。

「でもこれぐらいなら・・・」

「怪我をした女性を放っておくほど腐ってはいない。例えば君が拒んでもだ」

そういつて葵は無理やりベンチに座らせる。

「癒しの風よ。汝の力を持ってこの者の怪我を癒したまえ。ヒーリ

「ングフル」

そう言うと、優しい風と共に、優しい光が彼女の怪我の部分を包む。そして光が晴れた瞬間には。

「す、スゴイ。怪我が治ってる」

「それは良かった。それではこれで失礼する」

「あ、あの！」

「ん？」

「えっと、そ、その・・・」

彼女はもじもじしながら何かを葵に伝えようとしていたが、何を言おうとしているのかが分からない。

「深呼吸してみようか。吸って」

「すー」

「吸って」

「すー」

「まだまだ」

「すー・・・」

「おまけにもう五回ほど」

「すー……え！　これ以上したら死んじゃいます！」

驚きながらも彼女の緊張感ほぐれたようだ。

「ふむ。落ちついたみたいだな♪」

そういつて葵は彼女に微笑みかけると、

「！は、はい／＼／」

だが、次の瞬間には顔が赤くなった。（フラグメーカー発動！）

「（……またか）それで、何を言おうとしたんだ？」

「あ！　その、助けてくれたことと、怪我を治してくれて、その、ありがとうございます……」

「気にすることはない。私の名前は神無月葵だ」

「私はフェイト・テストロッサ！」

「ふむ。あと、言っておくことが一つだけある」

「なに？」

「私は男だ」

「え……エエエエエええ——————！」

その後、フェイトが落ち着くまで彼はフェイトの頭をなでていた。  
なぜかって？

（かわいいですね。でもこれは一步間違えれば犯罪。人間のか  
わいさというのはなかなか難しい）

との理由。

それから数分後

「それでは失礼する」

「あ……」

手をのけると少しさみしそうにするフェイト、

「（何とも護ってあげたい感じだな。）また会えるさ。その時まで  
の我慢だ」

「う、うん！ 絶対また会えるよね！ 葵！」

「ああ」

そういつて笑顔で手を振りながらフェイトと別れた。

今後フェイトがどう葵と絡んでくるのか。これはまだ誰にもわ  
からない。

## 第八話（後書き）

フェイトさん登場！

感想、ご意見、アドバイスお待ちしております！

第九話（前書き）

一日一回投稿。

・  
・  
・  
・  
死ねる  
・  
・  
・

## 第九話

### 第九話

現在、葵は近くの川原にあるサッカーコートに立っていた。

高町士朗がコーチ兼オーナーを務める翠屋JFCの試合の日らしい。だが、葵は全くの無関係にもかかわらず翠屋JFCのユニフォームを着つつ、コートに立っていた。

なぜか、それは・・・

### 回想

「サッカーですか？」

「うん。悪いんだが、補欠で入ってくれないか？　その、一人おたふくかぜで寝込んでしまっただけ」

「はあ、構いませんが。家の人も呼んでもいいですか？」

「ん？　それぐらいはかまわんよ」

「では、参加させてもらいますね。あとっておきますがど素人なのであまり考えず、ね」

「そこまで気負いすることはないよ。こっちも無理を言って頼んでいるのだから」

そして当日

「あ！ 葵く・・・ってその子たちは？」

「だれ？」

「あんたの彼女？」

葵の後ろにはエクスとルミル、そしてリニスがいた。

「違う。私がお世話になっている叔父の娘さんと家政h「メイドです」は？」

「ですからメイドです」

「いえ、でも家政「メイドです」・・・k「メ・イ・ド」・・・。メイドのリニスです」

「はい♪」

「「あ、あははは・・・」」

「へなのは、ユーノ。聞こえるか？」

「へえ、うん」



「へ聞こえるよ」

「へエクスとルミルについて簡単に説明する。彼女達は私のデヴァイスみたいな存在だ」

「へえ!？」

「へそ、それ本当なの!？」

「へああ。彼女たちの能力で人型、待機モードでイヤリングにもできる。だからといって物扱いはできればやめてほしい。彼女達は私にとってかけがえのない大切なものなんだ」

「へうん! 分かった」

「へもちろんだ!」

「へありがとうございます。いつか、何か御馳走しよう」

「へほんとう!」

「へああ」

そう念話でなのはとユーノと話していると、

「葵君! すまないがレギュラーで出てくれるか?」

「分かりました。では、行ってくる」

「がんばってね! 葵君!」

「まあ、がんばんなさい」

「がんばってね」

「がんばってください、マスター」

「ファイトです！ マスター！」

「「ますたー!？」」

「「あ・・・」」

後ろで何か言っているが無視して駆け足で進む葵。

そして試合開始のホイッスルが鳴った。

「素人だがよろしく頼む」

「ああ。頑張ろうな」

「ああ。それより一つ確認したい」

「なんだ？」

「一人で突っ込んでもいいか？」

「・・・」

「どうした？」

「い、行けるのか？」

「ああ。これぐらいなら」

「じゃ、じゃあ、お手並み拝見としよう」

そして、ボールを持っていた味方が葵にパスをした瞬間、

「フッ」

ドリブルで一氣に中央を駆け抜ける。

「速い！」

「な、なんだあれ！？」

敵側のスライディングはおろか、突っ込ますきも与えない。と  
りあえず速度でほんろう。そして、

「ほっ」

そのままシュートしゴール。

「」「」「.....」「」

観客のなのは、アリサ、すずか、リニスは啞然。

「さすがマスターです！」

「当然だ。マスターなら」

エクスとルミルはさすがといったように称賛している。

「ご、ゴール！」

開始数秒でゴール。このことに観客はおろか味方、敵とも啞然と  
していたがいち早く回復した審判によってみんなが元に戻る。

『おおおおおおおおお!!!!』

「あ、葵君。君は一体どこまですごいんだい……」

「お前やるな！」

「勝てるぞ！ あれだけの速度なら！」

と見方からは称賛され、

「あ、ありえねえだろ……」

「お、追いつける奴いるか？」

「無理だろ!?!」

と、敵は意気消沈。

「葵君すごい!!」

「へえ。やるじゃない」

「かっこいいよ！ 葵君！」

その後、葵の速度の翻弄により敵は一点取れずに22―0で翠屋JFCの圧勝に終わった。

帰り際になぜか「陸上部の試合に来ないか？」や、「いやいや、バスケだろ！」とスカウトの嵐が来たが、丁重にお断りした。

その後、翠屋にて祝勝会が行われた。だが、そこでキーパーの子がジュエルシードを持っているのを見た。

「へエクス、ルミル。タイムストップを使う。なのはとユーノにそれらしいことを伝えといてくれ」

「〈分かりました〉」

「〈了解だ〉」

「〈時を統べる神の身業。タイムストップ！〉」

すると、周りの光景がピタッと止まる。誰一人として動かない。葵の魔法の一つ。タイムストップはその名の通り時を停める。魔法を使用した本人以外いかなるもの、いかなる存在の時をも止める魔法だ。

「さて、ジュエルシードは確保。後これをごまかすために」

そういつて魔法でジュエルシードと同様の形、色の宝石を創り、キーパーの子のポケットに戻す。

「これでよしと。解除」

そういうと、泊っていた時間が動き出すように周りの日々とも再び動き出す。

その後、なのはにジュエルシードを渡し封印してもらった。

なのはも、「これからもっと頑張って一生懸命手伝う!」といって張り切っていた。

## 第九話（後書き）

こんな駄文で申し訳ない。  
感想や意見も待っています

## 第十話

### 第十話

こんにちは。葵です。えっといきなりで申し訳ありません。なにかいきなり私が今回から天の声も務めるようになりました。なぜかというところな置手紙を預かりました。

拝啓

益々私がいる場所は寒くなり、手がかじかんで動かなくこの頃。皆さまはどうお過ごしでしょうか。

さて、私は今日から冬眠に入ります！ 天の声は葵に任せたので安心してください

b y 楽一

とのこと。安心してください。ウイング・オブ・ジャッジメントとギュリーノス・ブレイカーで塵にしときましたんで。あとつでにステルス性能つきのフライパンで後ろから……。いい加減な人間は嫌いなものですから、フフフフツ。

こほん。さて、今私はどこにいるかというところですが家の前にいます。というか豪邸ですね。大きいです。さすがお金持ち。え？ 嫌みにしか聞こえない？ そんなわけないでしょう。私の貯金通帳はあの迷惑極まりないクソ神のおかげで日本の借金をプラスにしたぐらいありますよ。

「さて、なのは。なのははいるとわかるんですが、恭也さんは何かすずかにご用でもあるんですか？」



そう。この場にいるのは私となのはと恭也さん。なのははずかの友達として理解できる。だが恭也さんはなぜ？

「うん。すぐにわか 葵！ 貴様なのは呼び捨てにしているのか！？」  
「るよって、え！？」

私が恭也さんの方を見ると、すごい殺気を飛ばしていた。

「え、ええ。なのはがそう呼んでくれといったので。友達なら当然なのでは？」

「うっ・・・そ、そうだな。友達なんだな！」

「そうですが。（他に何があるんだ？）」

（うう）。葵君は鈍感なの～～！！）

（あ、あはははっ。はあ）

なのはリスみたいにはほを膨らませ、ユーノは溜息をついてた。  
ユーノ。溜息をつく和幸福が逃げるぞ？

「へ君のせいだよ！」

あれ？ 口に出てました？ もしかして心読まれた？ そんなバカなこと無いですよね。

「「へマスター。もう少し乙女心を理解してほしい（な）・・・」」  
「」」

ん？ 今度はエクスとルミルが。最近疲れているのか？ 前世では万対一の戦場を何回経験しても疲れなかったのに。ちなみに一が当然私です。

そう思っているとなのはがチャイムを鳴らし中からメイドが出てきた。何とも落ち着きのある人だ。

「恭也様、なのは様、それと・・・神無月葵様。いらっしやいませ」

「ああ。お招きに預かったよ」

「こんにちは」

「なのは？ こちらの方は？」

「あ、そうか。葵君初めて会うんだっけ？」

「失礼いたしました。私の名前はノエル。この月村家でメイド長を務めさせてもらっています。神無月様のことはずずかお嬢様からきいています」

「ああ、なるほど。私のことは葵でいいです。神無月は呼びづらいでしょうから。あとこれ、お土産です」

そういつて私は私が作って来たケーキを手渡す。

「ありがとうございます。おやつの時間にも出させてもらいます」

「そうしてください」

そういつて微笑みかけた。

「どうぞこちらです」

そういつてノエルに案内された場所にいたのはすすかと、アリサ。それと見知らぬすずかに似た女性が一人いた。

「あ。なのはちゃん、葵君、恭也さんいらっしゃい」

「すすかちゃん」

「いらっしゃい。なのはちゃん、恭也さん。それと、神無月葵様」

「葵で結構ですよ。神無月は呼びづいらいでしょうから」

「では葵様」

「来たのね。葵」

「お招きに預かったのだ。こないと無礼だろう」

「まあ、当然ね。私たちが誘ったのだから」

「アリサちゃんったら」

そして葵は億で紅茶を飲む女性とその隣にいる女性を見る。

「（微量だが魔力か？ 人とは違う何かを感じるな。）そちらの方々ははじめましてかな？ 神無月葵だ」

すると女性は立ち上がり、私の近くまで来て視線を私のところまで下げて、

「はじめまして。私の名前は月村忍よ。すずかの姉」

「ファリンと申します。すずかお嬢様の専属メイドを務めさせもらっています」

「恭也いらっしゃい。あと、すずか。葵君を借りて行っていいかしら？」

「え？ う、うん」

「それでは三人の御茶はそちらにお持ちしましょう。何がよろしいですか？」

「任せるよ」

「なのはお嬢様と葵様は」

「わたしも、お任せで」

「私もそれで」

「かしこまりました」

そして私は忍と恭也について行き、ある一室に案内された。

そしてそれぞれが席に座る。忍さんが口にした質問に私は少し驚いた。

「下手な探り合いはしないわ。あなたは何者？」

それはそうだ。いきなりなに者と聞かれても、ねえ？

「神無月葵。それ以上でもそれ以下でもない」

すると恭也さんが、

「君からは人の気と異なるものを感じた。だが「忍さんとも違う。ですか？」ッ!？」

すると、恭也さんが立ち上がり、私の胸ぐらをつかんだ。それでも私は言葉を続ける。

「おそらくですが、忍さん、いえ。月村家そのものが夜の一族。吸血鬼と呼ばれる存在。違いますか？」

時が止まった感じがした。だが、忍さんが、

「ええ、そうよ。私たちは夜の一族。吸血鬼の類に入るわ」

「忍……」

「いいわ。それと恭也、彼女を放したら？」

「ああそうだな。ああ、後忍」

そういつて恭也さんは胸ぐらから手を離れた。

「ん？ なにかしら」

「彼、葵は男だ」

「ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ!!」

しばらくたち忍さんが落ち着いたのを確認し、話を再開。いやあ、久しぶりでしたね、あの感覚。

「大丈夫なのですか？  
日光や血などに関しては？」

「日光においては問題ないわ。それに血においても人から吸ったとしても少し貧血になる程度よ。間違ってもホラー映画みたいに血を吸った人が全員吸血鬼になったりはしないわよ」

なるほど。知識で知っているものとは違う。まあ所詮知識は知識だ。あてになるものではない。そもそも、こちらとあちらでは世界観そのモノが違う。

「さて、私たちの秘密は話したわ。次はあなたの番よ」

「知らない。では通してもらえないようですね」

「ええ」  
「そりやそうだ」

はあ、めんどくさいんだよね。平行世界理論って。

「まず。私の存在の前に私はこの世界の住人ではありません」

「どうして？」

「私は平行世界の住人なんです」

「平行世界？」

恭也さんが何言っているんだという顔をしている。

「簡単に言うと【if】の世界です。たとえば恭也さんと忍さんが知りあっていない世界、私があなた方と知り合わなかった世界、恭也さんと忍さんに妹がいなかった世界。こう言った【もし】の世界から来たというわけです」

「はあ、何ともには信じられないな」

「まあ、そうでしょうね。ですが私がいた世界とこの世界の最大の違いは魔法が一般化されているか否かということなんです」

「魔法!？」

「こういうのですね」

そういつて私は手のひらを出し、

「ファイヤーボール」

ーボッ

そう言うと、私の手の上に炎の球体が現れた。

「移行。アクアボール」

「コポッ

そう言うと炎は水に、

「こう言ったものです。ご納得いただけましたか？」

「……………」

沈黙する二人。沈黙は肯定として受け取ろう。

「はあ、何ともでたらめな。だが、それと最初の質問は違う。それはあくまでも気みたいなもの。だが、君という存在は」

「ええ、一応世界観を納得していただこうと思ひまして。で、最初の質問にかえます。私たちの魔法概念は自然との共有。つまり自然、精霊という存在から魔力を借り受け形と成す。これが私たちの魔法の概念です」

「ということは君は精霊か！？」

「半分正解で半分外れ。半妖とはご存知ですか？」

「ええ。半分人間、半分妖怪。いわゆる人間と妖怪のハーフでしょ」

「はい。私は半分人間、半分精霊の人工<sup>はん</sup>半精<sup>せい</sup>なんです」

「人工？」

「人間は何事においてもわからないモノは実験し証明、利用したが



る。私がいた場所も様々な実験を受けました。その結果投薬、魔法による改変などによって人工的に精霊と融合させられたというわけです。まあ、これはあくまでも一部に過ぎませんがね」

そういつて私は冷めきった紅茶を口に含む。すると、恭也が、机をたたき、

「巫山戯ている！ 君はなぜそんなに平気でいるんだ！ 国は、警察は！？」

「無駄ですよ。このバックについていたのは日本政府、魔法省、環境省、文部科学省、国際ウィザード連合といった国際がらみなんですから」

「魔法省とその何とか連合、って何？ あと環境省がなんで？」

「魔法省はいわゆる魔法に関することを専門に取り扱っている日本の行政機関。国際ウィザード連合、通称IWUは国連にとって代わった国際機関のことです。で、環境省がなぜ出てきたかという魔法発動に必要なのは自然環境の整備。つまり私たちの世界では森林などを破壊する国交省より環境保護や整備を行う環境省が力を持つたんです」

「国がらみでそんなことを・・・巫山戯ている」

「恭也さん。所詮人は己が欲望に忠実に生きています。例えば一人が違うといっても強大な権力の前では無駄なんです」

「すずかやなのはちゃん、アリサちゃんはこのことは？」

「知りません。むしろ一生知らないでおいてほしいですね」

「どうしてだ？」

「彼女たちには重すぎる。彼女達は純粹でいてほしいんです。私がいる場所はあまりにも汚れすぎている。出来れば彼女たちにはあのまま笑顔でいてほしいんです。そのためなら私はどんな罪でも汚れでも背負っていきます。私が再び幸せをつかめたのも彼女たちのおかげなのですからね」

「.....」

S I D E 忍

「彼女たちには重すぎる。彼女達は純粹でいてほしいんです。私がいる場所はあまりにも汚れすぎ

ている。出来れば彼女たちにはあのまま笑顔でいてほしいんです。そのためなら私はどんな罪でも汚れでも背負っていきます。私が再び幸せをつかめたのも彼女たちのおかげなのですからね」

「.....」

そういつて葵君はすずかたちがいる場所を見降ろしていた。

その目はどこまでも悲しく、どこまでも透き通っていた。なんでこの子が、なんでそんなひどいことができるんだ！ 彼が何をしたっていうんだ！？

『所詮人は己が欲望に忠実に生きています。例えば一人が違うと  
いても強大な権力の前では無駄なんです』

たった9歳の子供が言えるセリフじゃない。でも彼は言った。どれだけ重いものを背負い、どれだけ辛い思いを、悲しい思いをしてきたのだろう。

「私は守りたいだけなのかもしれないな。幸せという物をくれた彼女たちを」

彼がそうつぶやいたのがこの静寂の中ではよく響く。

「あら。その中にはすずかも入っているのかしら？」

そう、彼に聞いてしまった。これ以上彼に重い罪を背負わせたくないのに聞かずに居られなかった。

だが彼は、

「無論、すずかもなのはもアリサも最優先で護ってみせますよ。我が体を楯にしても」

彼の眼はまるで鋭い刃物のように光っていた。だが、その光がどこか安心させてくれる。

でも次の瞬間には穏やかな笑顔になって、

「さて、紅茶も冷めてしまっていますが、ケーキでも食べましょう。自信作なのですが感想を聞かせてもらえれば幸いです」

「そうね」

そういつて私たちはケーキ（ティラミス）を口に運ぶ。口の中には甘いクリーム味と風味が一気に・・・って！

「これ、君が作ったの！？」

「ええそうですが？」

「・・・パティシエ並み・・・いえ、三ツ星並み・・・」

S I D E   O u t

そのころなのはたちは、

「このケーキ美味しい！」

「見た目も、形もいいしこれ、なによりおいしいし！ 三ツ星レストランに出されてもおかしくないわよ？」

「ファリン、これどこのケーキ？」

「えっと、さっきお姉さまに聞いたら、その・・・」

「どうしたんですか？ ファリンさん」

「これ、葵君が作ったみたいです」

「「「・・・え？」」」

彼女達は葵が作ったという情報を聞いて頭を悩ませていた。その

理由はというと、

「「女としてなんか・・・・・・・・負けた気が・・・・・・・・」」

## 第十話（後書き）

ということで葵の一部過去を暴露！

早いような今更のようなでたらめな話のような・・・。

まあ、あくまでも自己満足小説なのでそこは突っ込まないで

## 第一話

### 第一話

忍さん達に私の秘密（一部）を暴露し終わった数分後なのはから念話が入った。どうやらジュエルシードが発動したらしい。

「へ分かった。急いでいく」

そういつて適当に恭也さんと忍さんに理由を言って部屋を退室した。

それから少し経った場所に結界がはられた。おそらくユーノかなのはだろう。

「とりあえず。エクス。白騎士」

《りょくかい》

「光の道を指し示す者、白騎士」 《シンクロイン！》

白い光に包まれ、白木の甲冑を纏う。急いでなのはたちと合流しなきや。

「飛翔」





「あ、葵なの!？」

ん? この声は

「フェイトか？」

「う、うん！」

「ふえ!？ あ、葵君知ってるの!？」

「ああ。それよりも、あれか」

私は猫を見る。これが捨て猫ならまだ手荒なまねも許されるだろうが、あいにくあの猫はすずかの家の猫だ。さらにまだ子供。となると、

「ユーノ。ジュエルシールドは魔力を帯びているだよな？」

「え、うん。そうだよ。でもなんで？」

「確認までだ」

なら後は簡単だな。

「アルヴォ、ジャベリン収納。ディゴソードシールド展開」

そう言うとシールドの先端から水色の魔力を帯びた刃が現れた。

「照準固定。目標巨大猫の額」

《照準固定。目標巨大猫の額。ロック終了。発射スタンバイオールグリーン♪》

この刃は特殊で触れる者の魔力を完全に無効化するちよつとしたチート能力を有する。あ、ちなみに訓練用の刃なので無論非殺傷設定である。

「無に帰する刃、ルーンヴォルヴァファイアー！」

すると、ものすごいスピードで猫めがけ水色の刃が向かっていき、

《目標まで3、2、1・・・ヒット！》

猫に水色の刃が刺さり、その水色の刃は猫に吸収されていた。

《無力化魔法注入完了。ジュエルシードの魔力吸収中。放出まで5、4、3、2、1。ジュエルシード放出！》

エクスがそう言うのと、猫の身体はみるみる元の姿に戻り、そしてジュエル意思―度も排出された。

と、それよりも♪

SIDEフェイト

葵の姿は最初であつた時と違い今度は白色の鎧をまもっていた。

それだけじゃない。魔力も全く違った。黒だったものが白色に変化していた。

「なに者なんだろう、本当に……」

でもすごかった。水色の刃を猫に射出する時の正確な狙い、点を点に向けて発射しそれを見事に命中させる正確さ。私には無理かも……。

そのあと、葵はなぜか少し鼻歌を歌いながら、猫の元へ向かった。

「いやー、かわいい！ なんですかこの毛並みの良さ！ ここが良いんですか？」

そういつて頬ずりしながら、こっちに向かってきていた。猫もいやそうじゃない。むしろ好意的だ。

（う、うらやましいな／＼／＼）

すると、あの白い魔法使いの子が私の前までやって来た。

「あの、わたし高町なのは。あなたの名前は？」

「フェイト。フェイト・テストロッサ」

なのはっていうんだ。明るいい子だな。私とは逆の子。

「あ、そうだ。これどうしましょう？」

そういつて葵が取り出したのはジュエルシード。

「「あ！ ふ、封印！」」

ほぼ同時にあの、白い子と封印をしたが、若干私が早かったのかな？ バルディッシュに吸い込まれていった。

「御苦労さま」

「うん、って葵！ 御苦労さまじゃないよ！ どうして彼女に封印させたの！？ あれは危険なものだって・・・」

なのはだっけ？ その子のそばにいるフェレットがしゃべった。

「ユーノ。彼女はそんなよこしまな思いをしていない」

「なんでそんなことがいけるの！？」

「簡単だ。私みたいに汚れた目をしていない。純粹でまっすぐな目をしている。それだけで十分信用に値する理由になると思うが」

「え？」

どういう意味だろう？ 葵の眼も十分きれいだと・・・おもうけどな／／／

「どういう意味？」

フェレットもおんなじことを思っていたみたい。

「いずれわかるよ」

そういつて葵は私の頭に手を置いて撫でてくる。なんか落ちつく

な。猫があんなに気持ちよさそうな顔をするのも納得できる。

すると、私が葵を見ているのに気付いたのか葵がこっちに向けて笑いかけてきた。

「ん？（ニコ）」

——ドキッ！！

え！？　な、なに！？

顔が熱いし、心臓のドキドキが早いし、頭が真っ白になるし、な、なにこれ！？！？

「大丈夫かフェイト？　顔が赤いぞ。風邪か？」

「わ、わかんない！　そ、そうかもしれないから私帰るね！！」

「そうか。無理はするなよ」

「う、うん！　じゃあまたね！」

「あ！　ちよつとまって！　お話を聞かせて！」

「なんでジュエルシードを集めているのか聞かせて！」

後ろで女のことフェレットが何か言っているが聞こえない。私はそれだけ気が動転してそれどころじゃない！

「まだドキドキしてる・・・どうしちゃったんだろ私／＼」

S  
I  
D  
E  
  
O  
u  
t

## 第二一話（後書き）

短いかな。ただ長文になると自分でもわけがわからなくなっちまう！

## 第二話

### 第一二話

「・・・・・・・・」

「ぐぬぬぬぬ」

恭也さん、あなたがシスコンだと今初めて分かりました。士朗さん。無言はやめてください。逆に怖いです。ときどき出すその殺気も控えてください。

さて、現在私たちは高町家からのお誘いを受け、海鳴温泉に向かっています。

なぜこうなったかという、数日前、高町家から電話がありました。

「温泉旅行ですか？」

『ああ。連休中は翠屋を店の人に頼んで家族全員と月村家、アリサちゃんと海鳴温泉に言っているのが恒例でね。君もどうかなくと思っ  
てね』

「でも、いいんですか？ 久しぶりの家族だんらんの時に私なんか  
が加わって？」

『君には命を救ってくれたことと家族のきずなを深めてくれた恩が



あるからね。それのお礼だと思ってくれ』

と、なると断るのも無粋だな。

「分かりました。ではお邪魔させてもらいます」

『ああ、家族の人と家政「メイドです!!」・・・メイドさんも誘うといいよ』

ああ、電話越しにも聞こえたんだ。リニスの声。

「分かりました。三人にも伝えておきます」

そういつて電話を切った。

「というわけなんだがエクスとルミルは防水加工しているから大丈夫だし、リニスはどうする？」

「はい。フェイトがいた。ということはアルフもいます。彼女たちをもしかしたら説得できるかもしれません」

「分かったなら連れて行こう」

「ありがとうございます!」

そして現在。私の隣にはすずかとアリサ。ここまでは納得できる。だが一番納得できないのが、

「なのは、なぜ私の膝の上に？」

「ぶっ！ わたしだって葵君といっしょが良いの！」

との理由で私の膝の上に座っています。前からエクスとルミルがうらやましそうにこっちを見えています。

それから数分後。目的地に着き、早速温泉へ。

「ユーノ君、いっしょに入ろうね」

「へえ！ な、なのは！ 僕は！」

「へなのは、ユーノを借りていいか？」

「へえ？ どうして？」

「へジュエルシードの封印魔法を覚えようと思ってな。ユーノから知識だけでも学ぼうというわけ。ということで借りれるか？」

「へそっか。うん！ いいよ」

そういつてユーノを解放。そのまま女性陣は女湯の方に入っていた。私たちも男湯の方へ入っていくと、ユーノが涙を流しながら、

「へた、助かったよ、葵」

「へ君も嫌だろう淫獣の称号がつくの」

「へうん！ 本当にありがとう！」

そういつて泣いていた。

その後、一応封印魔法の仕組みを学んだが、基礎があまりにも違いすぎ無理ということが判明。これは封印はなのはかフェイトに任すしかないな。

S I D Eなのは

「うわゝすごゝい！」

「ホントですねゝ広いですゝ」

広いんです！本当に。目の前には大きなお風呂があるし、エクスちゃんの気持ちもわかるの！

「なのはちゃん、エクスちゃん。走ったら危ないよ！」

「はぁ、何やっているんだあのバカは。エクス！風呂に入る前に体を洗え！」

「ええゝ、でも目の前にあんな大きなお風呂があるんだよ？」

「マスターに嫌われるぞ？」

「うっ」

そ、それは嫌なの。体をきれいしてからお風呂に入ろう。

ルミルちゃんの一言が効いたのかエクスちゃんも渋々ながらシャワーの前に言った。

「それにしても、エクスちゃんもルミルちゃんも肌きれい」

「そうか？」

「最近はりニスさんと一緒に入ることが多いからその時にきれいに洗ってもらえるからかな？」

「そうですか？ では今日も一緒に洗いっこしましょうか？」

「はい」

「では頼む」

そういつてりニスさんの後を追ってエクスちゃんとルミルちゃんはシャワーの前に行った。

「ジー——」

「ん？ なに、エクスちゃん？」

「忍さん。おっきいですね。胸」

「えっと、急にどうしたの？」

「どうしたらそんなに大きくなるんですか！？ マスターに喜んでいただくにはどうしたらいいですか！？」

「お、落ちつけエクス!？」

「でも、ルミルもマスターに喜んでいただきたいですよね!？」

「そ、そうだが、そうだがアップで話すな!」

確かに。葵君ってやっぱり大きい方がいいのかな？

「ううつ、私たちって・・・」

「大丈夫よなのはちゃん!」

「え?」

「そうよ。わたしたちはまだ子供! まだ成長するわ!」

そ、そうだよね! 　いつか忍さんみたいになって葵君をわたしの  
彼氏にするの!

S I D E   O u t

「はぁ、いい湯だ」

「あ、葵・・・・。君はなぜそんなに余裕なんだい?」

「気にするな。気にしたら色々やバイ。というか彼女達は本当に  
9歳か? 発想がいきすぎなような気もするが」

「う、うん。僕もそう思う」

「それよりも私は今ここに士朗さんと恭也さんがいないことが不幸中の幸いだと思う」

「やっぱり思った？ 僕も」

「「はあー」」

まあ、私にはそういう免疫は一応備わっているからな。前世ではた迷惑な精霊皇によって鍛えられた。

そう言えば最近聖歌を歌ってなかったな。まあ、契約聖霊もいないし大丈夫か。

その後、ユーノの体と自身の身体を洗い温泉から出ると、目の前になのはとアリサ、すずかがいた。あと知らない女性が一人。

「どうした？ 何かあったか？」

「え？ あ、葵君／＼／＼！？」

すると、なのはは顔を赤くなっていた。

よく見るとアリサとすずかもだ。

「のぼせたか？ それよりもこの現状はどうした。目の前の女性にでもぶつかったか？」

「う、ううん（男の子なのになんでこんなに湯上りで色気が出るのよ）」

「そうか？ あ、連れたちが何かしましたか？」

「え？ あ、ううん。違うよ。知っている子によく似てたからついね。ただ違ったようだよ」

すると、女性はなのはに近づき、

「へ今のところは挨拶だけね」

急になのはの顔色が変わった。

（念話か）

「へ忠告しとくね。子供は良い子にお家で遊んでなさいね」

子供ね。

「へなら、フェイトに伝えておけ。フェイトもお家に帰るように。な」

「へ！？」

「へ安心しろ。この念話はお前にしか聞こえないようにしている。それとお前にも警告しておく。もしなのは達を傷つけてみる。その時は、お前を殺す」

「へなっ！？」（こ、この子本当にフェイトと同じ年かい！？ こ、

こんな殺気、あり得ないだろ!?) フェイトも殺すきかい?」

「へ過去の私なら迷わずしていただろうな。だが、今はその気はない。フェイトにも伝えておけ。君とは敵対する気はないがなのは達を傷つけるようなら迷わず君を殺すとな」

「へわかった」

そういつて女性はなのは達の下から離れる。

「あ、葵君……」

「ん? どうした?」

「え? う、ううん! なんでもない!」

「そうか」

S I D Eなのは

葵君の目、とても冷たかった。まるで刃物のような冷たさ。でも、なぜかその目を見ると、とても悲しかったの。

なんか、葵君がとても遠くに行ってしまうようで。

S I D E O u t

そして、割り当てられた部屋に戻ると、一匹の赤色犬? がいた。



「……さっきの女性か？」

「へえ。良く分かったね」

「魔力がよく似ていた。で、何か用か？」

「まずは、お礼を言いたくてね」

「お礼？ 感謝をされるようなことはしていないが？」

フェイトと出会って何かしたか？ いや、思い当たる節は何もないが。

「そう。あたしはフェイトの使い魔のアルフ」

「使い魔ね。それで、その使い魔さんが私にお礼をしにきた——と」

「そ」

そういつてアルフは人型に戻った。

「ジュエルシードにフェイトが襲われた時あんたが助けてくれたんだって？ その時のお礼」

「なるほど」

「後確認だ。さっき言ったことは・・・」

「本当だ。ただし、彼女が本気でなのはを殺しに来ない限りはこち

「私も殺す気はない。それにあの子自身がジュエルシードを使うために集めているというわけではなさそうだしな」

「分かるのかい!？」

「分かるも何も、ジュエルシードを集めて使うためならなりふり構わず集めるだろう。だが、彼女はそれをしない。理由があると考えるのが筋だろう」

「そ、そうなんだよ! 聞いておくれ!」

「ま、待て。それよりお前はフェイト・テストロッサの使い魔で間違いないんだな」

「ん? そうだってさっき言ったろ」

「そうか。なら」

そういつて葵はリニスに連絡をとり始めた。

「へリニス。聞こえるか?」

「へはい。どうかなさいましたか?」

「へ今この近辺にフェイトがいるらしい。話をしたいからついてきてくれないか?」

「へフェイトが!? わ、分かりました」

数分後、リニスが私の部屋に来たと同時に防音魔法を使った。

「り、リニス！？ あんた生きてたのかい！？」

「はい。この方に助けられました」

「話したいこともあるだろうが、とりあえずアルフ。フェイトに会えないか？」

「あ、ああ。分かった。案内するよ」



## 第二三話

### 第一三話

「でさ、最近フェイトがあんたのことばかり話すんだよ」

「そうなのか？」

「ああ。口を開ければあんたの名前ばかりだよ」

「そうか。それは助けた甲斐があるというものだ」

「・・・リニス。この子もしかして・・・」

「ええ。かなりの鈍感です」

ん？　どうかしたか二人とも？　なんかかわいそうな子を見るような眼でこちらを見ているんですが。

「なんでもないよ。っとフェイトー！」

SIDEフェイト

なんか急にアルフが私に合わせたい人がいるといって待ち合わせ場所を決めて待っています。

「フェイトー！」

「アルフ、合わせたい人って……あ、葵!？」

「うむ。私だ」

「え?　なんで?」

「高町家から旅行のお誘いがあったので来た。フェイトは……ジエルシード集めか?」

「うん」

葵に隠し事をしてもなんか無駄っぽかったので素直に話した。

「そうか。で、君に合わせたい人がもう一人いる」

「え?」

「リニス」

「はい。お久しぶりです。フェイト」

「え……り、リニス?」

「はい」

「え、あ、う、うわあああああああああ」

私はリニスに抱きつき、思いつきり泣いた。

「ひっぐり、にす、よ、よかった、よかったよ。いきで、いたんだ！」

「はい。葵様に助けてもらいました。今では葵様の家でお世話になっています」

え！？ そうなの！？

「リニス。もしかしてと思ったが彼女の関連のある人物が君の主か？」

「ええ。彼女の母親。プレシア・テストロッサが私の主です」

「なるほど……。ふむ。ピースはすべてそろったな。だが、ただ確証がない。さて、どうしたものか」

葵は何かを考えるように空を見上げていた。

「あ、あの。葵、どうかした？」

「ん？ いや、なんでもない」

その時の笑顔を見た時、以前に葵が話した言葉を思い出した。

——私みたいに汚れた目をしていない。純粹でまっすぐな目をしている。それだけで十分信用に値する理由になる。

なら、教えてもいいかな。

「ねえ、葵」

「なんだ？」

「聞いてほしいことがあるの？」

「それは大切なことか？」

「うん。私がジュエルシードを集める理由だから」

「ふえ、フェイト！？」

「いいのか？ 無理に話す必要はないぞ？」

「ううん。あなただから教えたいの」

「そうか。なら聞かせてもらおう」

そういつて葵は微笑む。やっぱり彼は優しい。その笑顔だけで心の疲れがとれるような気がした。

そして話した。私がジュエルシードを集める理由を。母さんがジュエルシードを集めるために私は戦っていることを。

「そうか。よく話してくれたな」

「うん。私が頑張れば前のようにまた母さんが笑ってくれるような気がしたから」

「前？ ということは性格の変化があったというのは事実なのか・・・」



「どうということ?」

「リニスからきいた。アリシアだったか? 君の母のもう一人の娘が亡くなって性格がよく変わるようになったと聞いたから」

「うん。そうだね。以前は優しかった」

「・・・まさか。いや、だがやつは死んだはずだ。でも、もし・・・」

葵がぶつぶつ言っているけどどうしたんだろう?

「葵?」

「いや、なんでもない。そうか、なら頑張れよ」

「え?」

「どうした?」

「いいの? 私、葵の邪魔しちゃうんだよ?」

「構わんよ。なのはも最初は巻き込まれただけだったが今は自分の意思でジュエルシードを集めている。互いに譲れない意思と意思があるなのであれば、私はただ傍観するだけだ」

「そっか・・・」

「ただし!」

そういつて葵は私の目線を合わせてきた。

「怪我だけはしないでくれ。君もなのは達同様私にとって大切な存在なのだから」

「え・・・ええええええ／＼／＼!?」

「どうした？」

「大切って!？」

「言葉を交わし、名を交換する。友として十分な理由だと思うが？」

「そ、そうなんだ。そうだよね」

「って、私なにがっかりしてるの!？」

「それに君は私にとって大切な存在だ。なら大切な者を護るためなら我が体を楯にしても君を護るよ。フェイト・テストアロッサ」

そういつて彼はまた優しく微笑んでくれた。

ああ、そうか。私は彼が

——好きなんだ

S  
I  
D  
E  
  
O  
u  
t

## 第二三話（後書き）

皆様の期待にこたえるよう頑張っていきます！

## 第一四話

### 第一四話

さて、フェイトと別れ再び旅館に戻ってくると目の前からのがやって来た。

「おやなのは。どうしたんだ？」

「あ！ 葵君！」

なにやら、私を探していたようだな。

「心配させたか？」

「そうだよ！ みんなと遊ぼうと思ったら葵君が突然いなくなっちゃうんだもん！」

するとなのはがリスみたいにほほを膨らませる。

その膨らんだほほをつついてみると、

「ふひゅーっ」

と空気が抜ける音がした。

「なにさせるの!？」

「いや、なんかしなければならぬような感じがしてな」

そういつてアリサ達がいる場所へと向かおうとした。その前に、

「なのは。君は何のために戦う？」

「え？」

SIDEなのは

「なのは。君は何のために戦う？」

「え？」

突然葵君からこんな質問が来た。

何のために？

「えっと、ユーノ君のジュエルシードを集めるのを手伝うためにだけど？」

「そうか。そのジュエルシードを集めるためにフェイトとぶつかり合うことになっても君は戦うか？」

「うん。でも本当は嫌だよ！ 戦わなくいいなら戦いたくないもん！」

「でも君は戦う。それは本当にジュエルシードを集めることを手伝

うためだけかい？」

「……………」

「よく考えてみて」

わたしは何のために戦っているのか。ユーノ君のため？ 何のため？ 誰のため？ そんなのわからないよ。葵君は何のために戦っているの！？

そう言えば、葵君は何のために戦っているんだろう。

「……………りたい」

「ん？」

「護りたい。みんなを！」

「そうか。それが君が戦う理由なんだな」

「うん！」

「でもなんで？」

「お父さんが病院に運ばれた時、わたしに力があればって思ったことがあるの。もうあんな思いするのは嫌！ だから、わたしが今度みんなを護るの！」

「そうか。なら私は君を護ろう」

「え？ エエエエエ／／／」

あ、葵君が、わ、わたしを／／／！！？

「フェイトにも言ったが」

「え？」

フェイトちゃんにも言ったんだ。そっか。そうだよね。

「お、おい。なのは、聞いているか？」

「え？ う、うん」

「続けるぞ。フェイトにも言ったが君達は私にとって大切なものだ。なのは達は特に私にもう一度幸せをつかませてくれた。ならその恩に報いるためにこの身体を楯にしても君をもうう」

「う、うん／／／ありがとう」

これが、葵君の戦う理由なんだ。

「なに。私も君には感謝しているんだ。さて、みんなの元へ行こう」

そういつて葵君は微笑んでみんなの元へ行った。

そっか、わたし高町なのはは神無月葵君のことが好きなんだ。

こう思うと心臓がドキドキします。でも、嫌じゃありません。むしろ、嬉しいです！



END

なのはが戦う理由を聞いた後、私たちはアリサ達と卓球をした。卓球は白熱したが、三勝〇敗で私が圧勝した。

「あんた、嫌がらせのつもり!？」

と、アリサが言ったが、なぜかピン球を返す場所が全て端っこだったり、変な回転がかかってピン球がはねずに停止したりと色々あった。

その後、夕飯を食べた。味付けも実にあっさりしていた。

その後も何も無くそのまま子供達（私とエクス、ルミルも含む）は就寝した。

え？ リニスはどうなったかって？ それは・・・

「さあさあ、リニスさんも一杯どうぞ」

「え？ わ、私は・・・」

「遠慮せずにはい!」

「さあ、グイっといちゃって、グイっ!」

「へふええーん。助けてください! 葵様く!」

と、念話でSOSを送られたが、実際行きたくない。

女性陣は酒によって乱れ、士朗さんは部屋の隅に避難し、ちびちびと一人で飲んでいた。

恭也さんは最初の生け贄に捧げられた。

その後、時刻は進み深夜。ジュエルシードの反応で私とエクスとルミルは目を覚ました。

エクスとルミルをイヤリングにして、まず大人達のところに向かった。リニスに連絡を取ろうとしたが、なぜか念話が通じない。が、着いてみたら納得した。

「う、わ、私なんか、どうせ……」（リニス。君の犠牲は忘れない）

「な、なのはー。メイド服も似会うぞー」（恭也さん。妹に何してるんですか）

「うふふ、なのは、あと一〇着しちゃくしましょうね」（桃子さん。いつものことですよ）

「あら、すずか、そこは、ぬいじゃダメよ？」（あなたもシスコンだったんですね）

「なのは、ついに君も、その子と結婚か！ パパは、パパは――」

（幸せな夢です「そいつを殺すから、パパと結婚しなさい！」前言

撤回・・・)

と、心の中で突っ込んでいる暇はなかった。これだったら放置してても大丈夫だな。

すぐに魔法で毛布を形成し、それぞれにかぶせた。

さて、なのはでも探しますか。

そういつてその部屋を後にすると、すぐなのは出合った。

「あ、葵君！ ジュエルシードが！」

「分かっている。行こうなのは」

「うん！」

そういつてジュエルシードが反応した場所に向かった。

「ジュエルシード。この先にフェイトちゃんも」

「ああ、いるだろうな。だが、これは避けられないことだ」

「・・・うん」

やはり戦うことが嫌なのだろうか、少し落ち込んでいるな。

「フェイトにはフェイトの戦う理由がある。なのはにはなのはの。互いに理解し合えとは言わない。でも、己が信念だけは曲げるな、なのは」

「うん！」

ふつきれればいいんだが、まあこの歳の子にそんな難しいことを言っても無理だろう。

しばらく歩いていると、フェイトとアルフがいた。あちらもこちらに気付いたのか振り返ってきた。

「レイジングハート、セットアップ」

《set up》

バリアジャケットを纏い、対峙するなのは。

「はーい、おチビちゃん。また会ったね」

アルフがなのはに声をかける。

「それより！ それを・・ジュエルシールドをどうするつもりだ！ それは危険なものなんだ！」

「さあね、答える理由が見当たらないよ」

ユーノの問いを軽く流し、アルフの姿が女性の姿から、力強い狼の姿に変わる。

「や、やっぱり。あいつ、あの子の使い魔だ」

「使い魔？」

「そうさ、あたしはこの子に作ってもらった魔法生命体。製作者の魔力で生きる代わりに、命と力の全てを掛けて守ってあげるんだ」

その咆哮はまさに自然界の戦士を思わせる咆哮だった。まあ、それはさておき、あの狼姿のアルフ、仔犬バージョンとかできないのかな？ 絶対かわいいと思う。今でも十分、あの毛並み。もふもふしたい……。

「ん？ 葵、どうしたんだい？」

アルフが私に何か言っている。これはもしかしてチャンス！？

「あ、アルフ。戦闘を始める前にお願いが一つあります」

「え？ 何？ というか口調が変わってる！？」

「これが素です。それより、あなたを抱かせてもらえませんか？」

「え？ それぐらいならいいけど？」

「本当ですか！？ ではさっそく！」

そういつてふんふふ♪ あの毛並みはどんなさわり心地なんだろう。絶対よさそう♪

そういつてアルフを抱きかかえ、毛並みに顔をうずめる。

「うーん。やっぱりいいですね。ですが、イヌとも猫とも違う。でもこれはこれで……。新しいモフモフ感！ 最高ですね♪」

「ちょ、葵、そ、そこはダメ！　というか、なんでそんなになでるのがうまいんだ！？　あ、そこ、ダメ〜」

「確かに、葵のなでるのはうまかったな。あれはある意味病み付きになる」

なのはの隣でユーノが今のアルフの現状を見て納得しているが気にしな〜い。

あ〜。幸せです。こっちに來てからかわいい動物とめぐり合う機会が多いです。これは何ともあのクソ神に感謝しなくては。

「動物の毛並みというのはいいいモノです。また、その愛くるしい顔は人々の心の癒しになります。ユーノもなかなかでしたが、アルフもこれはこれでアリです！」

「あ、相変わらずだね葵君」

「相変わらずって葵っていつもこうなの？」

「う〜ん。というかかわいいものを見るとこうなっちゃうかな」

「なら私も・・・／／／」

「ちなみに人はしませんよ？」

「「ええっ!？」」

なぜに二人とも驚く？

「犯罪ですよ。それやれば。まあ了承、許可、許しがあれば別ですが」

なにせ肉体年齢は9歳でも精神年齢は20歳ですよ、私。

「「やってもいいよ!!!」」

マジですか二人とも？ 了承は得ましたよ？ 許可もいただきましたました。これは犯罪じゃないですよ？ 多分……。

「ではなのはから」

そういつてなのはに抱きつく。そつと、手に頭をやり、ゆつくりと頭をなでる。

「ふにゃあ／＼／＼／」

何かかわいらしい声を上げるなこの子は。というか女の子の髪ってこんなにサラサラアしてるもんなんだ。

それから一分後。

「では次にフェイト」

「う、うん／＼／」

なのとは同様、抱きついて頭をなでる。

「ん……／＼／」

なのはと違い、どこか緊張してるのかな？ でも顔は紅潮してる。大丈夫か？

そして、これまた一分後に終了。

「ふう〜。今日は最高の日です！」

「うん。確かに・・・／＼／」

「わ、私も満足・・・／＼／」

「それより忘れていましたが、ジュエルシードどうしましょう？」

「「「あっ・・・そうだった!？」」「」」

忘れていたんだな。あなた方も。

「さて、ではこんなのはどうか？」

口調が変わったって？ 気にしない気にしない。意外と丁寧な口調もこっちになれると疲れるのが分かったから基本はこっちで。

それに物事を頼む時は丁寧に頼まないね。

「どんなのだい？」

「なのはとフェイトの一騎打ち。当然アルフとユーノは手出し無用」

「あ、葵!？」



「葵君!？」

なのは・ユーノペア動揺、

「いいよ、それで」

「フェイトが負けるはず無いしな」

フェイト・アルフペアは余裕。

「（この差はやはり大きいか）さて、 「葵! 君は一体何を考えているんだ!？」 ユーノ少し聞け」

そういつて私はユーノと念話で話し始めた。

「へこれはなのはのためだ」

「へえ？」

「へなのはに足りない物は戦闘経験だ。だがなのはに比べフェイトはかなりの実力者だ。これは誰が見てもわかることだ」

「へうん」

「へ今後ジュエルシードを集めるとなると彼女との戦闘は避けられないだろう。それに両方のジュエルシードを集める理由を知っている私としては手伝うことはできても戦闘への介入はできれば避けい  
く」

「へ知っているのかい、君は！ あの子がなぜ集めているのかを！  
？」

「へああ。でも話さないと約束した。あの子もそれを信じているかな」

「へそっか。それで、話の続きだけど」

「へああ。おそらくなのはが実力をつけるまであちら側は待つてはくれない。なら実戦本番で経験を積むしかない。百回見たり聞くよりは実際その場にたって経験する方が自分の実力にもつながる。それになるのは魔法の才能がある。これは君にもわかるはずだ」

「へ・・・分かった。でも君もかなりの無茶をさせるね」

「へ百も承知だ。本当なら二人とも普通に笑って生活を送ってくれた方が私もうれしいよ。でも、もう戻れないんだ。なら私がすることとただ一つ。全力で二人を災いから守ることだ」

「へ分かった」僕も葵の提案を押すよ

「ユーノ君！？」

「大丈夫なのは」

「ユーノ君がそう言うなら」

そういつて二人とも空に舞い上がる。

「ユーノ人よけの結界を展開できるか？」

「え、うん。出来るよ」

「人に知られてまずいなら展開した方がいい。私の方でもある程度は展開しているが念には念で頼む」

「分かった」

結界の展開が終了するとそれを合図に黄色と桃色の魔法の色がぶつかり合う。

「二人ともすごいな。天才か。本当にいるんだな」

「あんたも十分すごいと思うけど？」

隣でアルフが私に向かって言う。ちがうよアルフ。私の力はただ才能でもなければ自ら進んで努力して手に入れた力でもない。

私の力は力を手にしなければ明日をつかめないから嫌でも手にしなければいけなかった負の力なんだ。そう。人を【殺すために】手に入れた力。

「しかし、なのはを砲と例えるならフェイトは剣。どっちが不利かというと明らかになのはですね」

なのはは不利と悟り、距離をとり、

「あんたがあそこに加わるとどっちから叩く？」

《Divine buster》

ピンク色の砲撃を撃つ。

《Thunder smasher》

それに対抗するようにフェイトも黄色い砲撃を撃つが、

「お願い！ レイジングハート」

《All right》

なのはがそう言うとなのはのディバインバスターがさらに威力を増す。だが、葵はアルフの質問に、

「無論フェイトでしょう。速度と攻撃を兼ね備えられたら怖いですからな。それに戦闘経験はフェイトの方が上。しかしなのはも成長しています。あと数日実戦を交えれば分らなくなる」

そういつていてると、私の予想で通りフェイトがなのはのディバインバスターを回避してバルディッシュの鎌をなのはの首に当てる。

「勝負あり。勝者フェイト」

「・・・まけ・・・た？」

「・・・勝った」

すると、レイジングハートからジュエルシードが一個放出され、バルディッシュに吸収された。

「うゝ負けちゃったよゝ」

「残念だったね」

その光景を下から見ていた葵は。

「あの子たちはもっと成長する。でも、戦場には出てほしくないな」  
彼女たちの成長に嬉しさもあるが、同時に彼女たちの力を戦争に使われると思うと悲しくなる。

「でも、あの子たちにとってはいいライバルになるんじゃないのかい?。」

「僕もそう思うよ」

「お忘れかもしれんが、二人とも敵同士だろ?。」

「うゝん。そうなんだけど何っていうかさ」

「怨めないんだよね」

「君たちにとっても好敵手といったところか。さて、なのはとフェイトのところに向かうか」

そういつてなのは達の元へ行くと、なのはが、

「お疲れ、二人とも」

そういつて服の中から取り出したアク〇リ〇スをとりだし、二人

に渡す。いつ買ったかって？ 気にしない、気にしない。

「うゝ、負けちゃったよ、葵君！」

「負けることも経験。その悔しさをばねに強くなればいい。でも、限界以上はしないこと。怪我の元だからな」

なのはの頭をなでながらアドバイスとっていいのだろうか。ありきたりの言葉を言う。

「フェイトもお疲れ。最後の回避には驚かされたよ」

「ありがとう」

そういつてなのはと同様にフェイトの頭をなでる。

「やったね！ フェイト！」

「ありがとう。アルフ」

「ごめんねユーノ君」

「仕方ないよ。でも葵の言うとおり何がいけなかったのか反省して次に備えよう」

「うん！」

本当にうらやましいな。彼女たちは互いに目標とする存在を見つけた。私は、ただただ目の前に来る人（邪魔者）を殺すだけだったからな。

「さて、時刻も遅いから帰るとしよう。フェイトもしっかり休むんだぞ」

「うん。ありがとう」

「ん？ 感謝をされることはしていないが？ まあ、礼は受け取っておこう」

「ふふっ。葵らしいね。じゃあ、またね」

「ああ。またな」

そういつてフェイトとアルフは去っていった。

「仲いいんだね、葵君とフェイトちゃん」

ん？ 何かすごい禍々しいオーラがなのはから出ているんですが？ それよりもなのはさん。なぜレイジングハートをこちらに向けているんですか？

「な、なのは！？ それを葵に向けて何するつもり？」

「もちろん。O☆H A☆N A☆S Iだよ？」

——ゾクッ

「え、エクス！ 白k……」

「ディバインバスター！」

「ぎゃああああああ！」

白騎士のシンクロが間に合わずともに食らってしまいました。  
というか何であんなに不機嫌だったんですか、なのはさん？

（（間違はなく君（（マスター））が鈍感だから（だ）（です））

ユーノとエクス、ルミルの心の声が聞こえたような気がした。



## 第一四話（後書き）

感想やご意見をお待ちしています！

## 第一五話（前書き）

最近P Vとユニークについて語りました。1万越えすごいんだろ  
うがその前にP Vってなに？

## 第一五話

### 第一五話

温泉地での戦闘でなのは何かをふっきたのか「今度はフェイトちゃんに勝つの！」と気合を入れていた。（そのための犠牲。葵初めての魔王によるO☆H A☆N A☆S I）

余計なことは言わなくていいですよ？（りよ、了解です!!）

さて、そんなこともありなのはの特訓を私とユーノが見て、その御希望に応えるようにしていた。

え？ アリサ達とのすれ違い？ なんですかそれ？ 原作知らないの？ ええ。あのクソ神にDVD渡されてこの世界行っ来いと言われてそのまま直行。そう言えば原作知らないな。（え!?!? いまさら!?!?）

作者よ。かいているのは貴様だぞ？（そうでした）

なので、そんなことお構いなしに日常を楽しんでいます。

そんなある日。

「さて、そろそろ黒幕に会いに行きますか」

「? 誰のことです?」

「プレシア・テストロッサ」

「!？」

そう、私が今考えているのはプレシア・テストロッサに会いに行くということだ。

「なぜ、今？」

「ピースはすべてそろった。組み立てる部分もほぼ終了。後は確認のみ」

「??」

「ほぼ何が原因なのかは分かっているんだが後はそれが本当に正しいのかを確認するだけだ」

「確認が終わったら？」

「今回は様子見だ。出会って即戦闘。なんてことになったら準備もなしに行くんだ。負けるにきまっている」

すると、リニスが少し考え、

「なら、私はいかない方がいいですね」

「ああ。夕飯の準備だけ頼む」

「はい」

そういつてリニスから時の庭園の座標を覚えてもらい、

「我、次元の扉を開く者。我が望む場所への橋をかけ、我が望む道となれ」

すると、足元には水色の魔法陣が広がり、次の瞬間には私はその場にいなかった。

## SIDEリニス

「毎回見て思いますが、葵様の魔法は不可思議ですね」

葵様の魔法は戦闘用にこそエクス様とルミル様をお使いになさいますが、基本はあのお二方を使わなくても十分強いと思います。

内緒で簡易魔法測定器を使って魔法を調べてみると、測定器の方が壊れてしまいました。

ですが、あの方なら、

「プレシアを、フェイトとアルフを助けてくれるかもしれませんね」

そう思ってしまうのです

## SIDE Out

### ―時の庭園

「はあ、立派な中身だな。まるでお城だな……」

そういつて奥へ奥へと歩を進める。

すると、なにやら鞭のような音がしてそこにいくと、

「アルフ？」

「あ、葵!？」

すると、アルフがいきなりこっちに来て、目に涙をためながら、

「お願いだ！ フェイトを！ フェイトを助けてくれ！」

「え？」

すると、鞭の音がする部屋からフェイトの悲鳴が聞こえた。これは、

「……ルミル。黒騎士」

《イエス。マイマスター》

「漆黒の闇夜への誘う者、黒騎士」 《シンクロイン!》

そして、そのままその扉を両翼刀で切り開く。

「あ、あおい？」

そういつてフェイトの近くまで行き、フェイトの手首に巻きついていた鎖を斬る。

「フェイト!？」

アルフが私の後に続いて入って来た。

「君達は地球に戻れ。私はこの者と話し合う必要性があるようだ」

そういつて時の庭園に来たのと同じ魔法をかけ、フェイトとアルフを地球に飛ばした。

「あなたは？」

「あなたがプレシア・テストロッサか？」

「そうだと言ったら？」

「娘を、人を、命をなんだと思っているのですか？」

ヤバい。怒りが収まらないな。おそらく彼女の意味で無いにしろ、これでは下手をすれば殺してしまいそうだ。

SIDEプレシア

「娘を、人を、命をなんだと思っているのですか？」

いきなり、殺気が・・・いえ、殺気だけじゃない。魔力も上がっている。なに、この子はいったい何者なの!？

「申し遅れました。私神無月葵と申します。昔の異名でよろしけれ

「ばお教えしますよ？」

この子は本気で怒っている。

「へえ。私はプレシア・テストロッサ。ちなみに聞いておきましょうか、その異名とやらを？」

「【黄泉路への案内人】あの世、地獄まで案内するものという意味らしいですね。知っているんだろ？【不の者】」

「グツ、な、なに、を・・・」

急に、あ、あたまが・・・

「あの子は作り者よ？」

違う！ あの子は、たとえそうであっても！ 私の、大切な

「問おう、プレシア・テストロッサ！ 汝は本当にそう思っているのか！？」

「そ、そうだ。私の、（違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う）」

邪魔をするな！  
私はあの子に、普通に育ってほしい。あの子を助けて！

# Side Out



「そ、そうだ。私の、」

彼女がそう言葉を続けようとしたが、彼女の声があまりにも女性とは思えない低い声で確信をした。

彼女は【不の者】に浸食されつつある。

「邪魔をするな！ 【不の者】よ！ 今はこの者に直接聞いているのだ！ 貴様が出しゃばるな！？」

「ダ、マレ。ダイエイユウ（サツジンキ）。キサマハ、ダレモスクエナイ」

すると、いきなり念話が入って来た。

「へあの子を、フェイトを助けてあげて！」

この声は……プレシア！？

「へまだ意識はありますか！？」

「へええ、でも保っているのがやっとよ」

「へあなたは、フェイトを」

「へ彼女はアリシアの、私の一人の子供のクローン。でも勘違いしないで！ あの子がクローンだろうと関係ない！ 私の、私の大切な娘よ！」

「へそうですか。今の私ではあなたを犯している者の浸食スピードを遅めるのがやっとです。ですが必ず助けます。あなたも、フェイトも、そしてあなたのもう一人の子も」

「へでも、あの子は！？」

「へ大丈夫です。ですから、少しの間ですが、あの子に、幸せを与えてやって下さい」

そういつて私は弓を取り出した。そして、飛翔を行い、自分の背中から翼を出し、白い翼から一枚羽根をちぎる。

「聖なる羽根よ。その形を矢と成し、彼者を犯すものを抑えよ！」

詠唱を終えると、羽根は矢となりそして、プレシアめがけ放つ。

——グサッ

「ぐっ！？」

見事に胸に命中し、矢は霧散する。すると、

「はあ、はあ」

「プレシアさんですね？」

「え、ええ」

「さっき私が言ったこと約束してください。あと、意志を強く持つ

ていください。じゃないと、あれに飲み込まれますので」

「ええ、分かったわ。それよりこれはどの程度持つのかしら？」

「もって3日。その間にフェイトに言いたいことがあったら言っ  
てあげてください」

「分かったわ」

「では」

そういつて私は時の庭園を去った。

そして自宅に着き、リニスをまじえて今日の話を話す。

「なるほど。それで、確証は持てたのですね」

「ああ。だが厄介なことに人に浸食するタイプだ。今の私ではどう  
てい彼女を助けて尚且つ【不の者】を倒すのは無理に近い。むしろ  
両方犠牲にするな」

「ならどうやって!？」

「うーん。考えても仕方ないか。とりあえずあそこに行きましょ  
うか」

「ああ、あそこですか」

「確かに資料もたくさんありますしね」

「あそこって、どこですか？」

そういつて私とエクス、ルミルはどこへ行くかは分かったがリニス  
が分かっていないようだ。

「私の心の世界だ」

「え？」

## 第一六話

### 第一六話

さて、私たちが今どこにいたって？ 場所は私の心の中ですよ。

簡単に言ってしまうえば某子供先生のあの別荘だと思ってください。

By 作者

「（今変な声が・・・まあいいか）心の鍵よ、我が心の門を開け」

そういつて地面に鍵を落とすと吸い込まれるように鍵が沈み波紋が広がった。それと同時に目の前に大きな扉が出てくる。

「では、参ろうか」

「はーい」

「久しぶりだな」

「・・・・・・」

リニスは啞然としていたが、とりあえず意識がすぐに戻り後をついてきた。

そして、

「すごい、きれいです」

そう。そこにあったのは一面桜。そして、その奥にある平安時代の公家屋敷のような作りの屋敷が一つあった。

「これが、葵様の心の世界……」

「ここでの一日は外では一時間と時間。変更も軽くでるから、調べ物をするときは便利なんだ」

「へ、へえ（もはや何でもありですね）」

今リニスからなんか変な声が聞こえましたが、まあ気にしない。

「他にはどんな場所があるんですか？」

「んー。イメージすれば大体は可能かな。後はそれを固定、安定化すれば出来上がりだ。まあ、代表例であれば戦闘訓練地の火山、海、豪雪地帯、山岳、平原などだ」

「そ、そうなんですか。でもあの屋敷に調べ物をする図書室でもあるんですか？」

「ああ。あそこは寝泊まりする場所専用だ。見えるか？ あそこの塔が本を調べる場所だ」

「あ、あそこですか!？」

そう。塔とは雲も突き抜けるほど天高くそびえたつ塔。通称図書天国とまあ、精霊皇が命名した。

「では、移動魔法でいきますのでつかまってください」

そういつてみんながつかまったのを確認すると、移動し、あつという間に塔へ。

その後は徹底的に本を調べたが、該当するものはなく、

「どうするかな」

すると、ルミルが一冊の本を持ってきた。

「マスターこれなら」

「これは？」

「十二年前、ある学者が書いた神姫の可能背のレポートです」

「確かに。これならいけるかもしれない。これにかけてみますか」

「「はい！」」

その後、ありとあらゆるケースを想定しエクスとルミルを使いそのレポートの内容通りで行ったり、多少改良したりして魔法を行使した。

すると、以外にもこのレポートに書かれていることが正しいことが判明しプレシアを助ける手段を見つけた。

「あとは、安定化させるだけですな」

「ああ」

その後、心の扉をしまうときっちりこっち側では一時間しかたっていない。

「・・・本当にチートですね」

「まあ、マスターはそれだけ苦労しているんですよ」

それからまあ後は練習に次ぐ練習で何とか安定させるために必死だった。はあ、疲れた・・・



## 第一七話

### 第一七話

プレシアとフェイト、そしてアリシアを助ける策を見つけた数日後、町中でジュエルシードの発動を感じたので急いで駆け付けると、すでにフェイトとなのはが封印した後だった。

「で、なんで今のはとフェイトは戦闘をしているんだ？」

上空を見ると、黄色い光と桃色の光がぶつかり合っている。

「いやゝ、それがさあ」

「・・・ジュエルシードを封印したら」

―回想

「リリカルマジカル」

「ジュエルシードシリアルX?!」

「「封印!!」」

なのはとフェイトは何とも珍しくジュエルシードを二人で封印したそうだ。

「お疲れさま、フェイトちゃん」

「ううん。なのはもありがとう」

すると、フェイトがきよろきよろとあたりを見渡したのでなのはが、

「どうしたの、フェイトちゃん？」

「え！？ えっと、その、葵がいないなって」

「葵君ならもうすぐ来るんじゃないかな？ でもどうして？」

「え！？ あの、助けてくれたお礼が言いたいなって」

「助けてくれたって？」

するとアルフが、

「あの婆にいじめられたところに葵がさっそうと現れて助けてくれたんだよ」

「あ、アルフ！？」

「ぶー！（いいな。ピンチなところに現れる王子様みたいなの）いいもん。わたしだって葵君にお姫様だっこされたことあるもん！」

「そ、そうなの！（わたしだってされたこと無いのに）」

「「うーっ」」

そういつて互いににらみ合って、

「バルディッシュ！」

「レイジングハート！」

そういつて互いのデヴァイスを再び構えた。

「あれ？　なんか、地雷踏んだ？」

「うん。ばっちり・・・」（苦笑）

「葵君をかけて」

「勝負！」

――終了

「・・・何をしているんだあの二人は」

私はあきれてものも言えない。ジュエルシードを封印してその後もこれだけ派手に暴れる体力。ある意味でうらやましいが、内容が私？

「私よりいい男はいると思うのだが」

「あんた、自分を過小評価しすぎだよ？」

「はぁ、葵。君は自分を卑下しすぎだよ。君は十分男の僕から見ても魅力的だと思うけど?」

過去を知らないから言えるだけだ。過去を知れば彼女たちも遠ざかる。まあ、彼女たち次第だけど。

上空ではいまだにまばゆいばかりの光がぶつかり合っている。

だが、それが時として剣舞ではないが、たがいに魔法で舞うように踊っているようで美しかった。

「それより、ジュエルシールドはどこに?」

「え?」

「そう言えば……あ、あそこに!」

「ウソ……」

「なのは、フェイト! 今すぐ戦闘をやめろ!!」

「「え?」」

しかし、遅かった。再び互いのデヴァイスがぶつかり合った瞬間ジュエルシールドからまばゆい光が空に向かって延びた。

「「え!?!」」

「どうして!?!」

「封印したはずなのに」

おそらく、なのはとフェイトがジュエルシードの近くで魔法バトルを繰り広げたからそれに反応したのか？

魔力波によってフェイトとなのはが飛ばされた。

「大丈夫かなのは？」

「うん、ありがとう葵君」

なのははたまたまこちらに飛ばされてきたので、こちらで押させた。

レイジングハートを見るとあちこちにひびが入っており、封印できる様子ではなかった。これを見るとバルディッシュもおそらくそうだろう。

「ユーノ！　こういう時の対処法は！？」

「わ、分からない・・・僕もこういう現象は初めてだ」

「くっ。どうすれ「なにやってんだい！フェイト！？」え・・・」

アルフの叫びが聞こえ、フェイトの方を見るとフェイトがジュエルシードを両手でつかんで封印しようとしていた。

「あのバカ！！！」

あのバカは何をしようとしているんだ!?

「エクス。白騎士展開!」

《イエスマスター》

すかさずエクスを起動して、フェイトの近くに来てみると、フェイトの両手の手袋は破れていてそこから血がにじみ出していた。

「ッ!? このバカ野郎が!!」

「え!?!」

急いで、フェイトからジュエルシールドを手放させ、ジュエルシールドに向け、私はデイゴソードシールドを展開。無に帰する刃をジュエルシールドに向かって発射したが、

——カーン

「は!?!」

「ふえ!?!」

「え・・・」

三者三様の驚きだった。なにせ魔力を無効化する刃をはじき返したのだ。驚くなという方が無理だ。

そしてその刃はユーノの近くに、

ーザグッ

「ひいいいいいい!？」

あ、ちなみにユーノには刺さりませんでしたよ。近くの地面に刺さりました。ただ、ユーノとの距離4センチ。数字的にも不吉でした。

「ユーノ、すまん。それより! え、エクス!？ どうなってんだ!？」

《え、えっとですね、周りの魔力波があまりにも強すぎて、出力を最小でも122%で放出しないとまずいです!》

「・・・クソっ。エクス、シンクロパージ。ルミル、シンクロイン!」

《申し訳ありませんマスター》

「お前のせいじゃない。ジュエルシードのせいだ」

《マスター、まさかとは思うが、あれを使うつもりか?》

さすがルミル。あまり使いたくない手段だが、あれは無に帰する刃よりも無効化力が強く条件下も一切無視したものを使うしかないか。

ルミルをシンクロさせ、私は弓矢をセットした。共に黒塗りの。

「フン！」

迷わず私は矢を自分の太ももに刺し、血を吸わせる。

「あ、葵君!？」

「葵、何やってるの!？」

「黙って見てろ！」

そういつて矢を引き抜き、照準をジュエルシードに合わせる。

「我が血は精霊の血。いかなる邪も退ける聖なる血。その血を吸った矢は聖なる矢。セイントアロー！」

すると、矢はまばゆい光を放ちながらジュエルシードに向かい、ジュエルシードと激突。その光に飲み込まれたジュエルシードはまるでなすすべもないように光りを失った。

「きよ、強制封印、というか、強制無効化成功・・・」

「あ、葵、大丈夫？」

顔を真っ青にしながらフェイトが訪ねてくる。が、その前に、

「フェイト」

「・・・なに？」

そのままフェイトの頭にチョップ。



「このおバカ娘が！」

「ひう！？」

「お前は私が以前に怪我をするなど注意しただろうが！ その約束をもう忘れたのか！？」

「ご、ごめん・・・」

「はあ、良いから手を出せ」

「うん」

「癒しの風よ。汝の力を持ってこの者の怪我を癒したまえ。ヒーリングフル」

あの時と同じ魔法をかけ、フェイトの怪我を直し終えると、

「もう、心配をかけさせないでくれ。大切なものを失うのはもうごめんなんだ」

「うん。ありがとう。心配してくれて」

恥ずかしそうにしながらもお礼を言うフェイト。

「なのは、ごめんね。決着をつけられなくて」

「ううん。気にしないで。それより葵君、足大丈夫？」

「もう大丈夫だ」

そういつて無事なのを確認させるために怪我の部分を目指す。

「本当だ。傷跡もないの！」

「すごい」

そういつて二人とも矢を突き刺した場所の足を触りまわる。

（足細いの。それに色肌もきれい・・・なんか）

（色白。肌もすべすべ・・・なんか）

（（女として負けてはいけない部分が負けた））

触るのを終了すると、二人ともorzと落ち込んでいた。

数分後、復活するとフェイトとアルフは私となのはに今回のことを感謝して飛び去っていった。

「ねえ、葵君」

帰り道、なのはが話しかけてきた。

「わたしがもし興味フェイトちゃんと同じことをしたらどうする？」

「出来ればしてほしくないんだが、まあやったら怒るだろうな」

「今日みたいに？」

「当たり前だろう。フェイトも、なのはもわたしにとっては大切な人間なんだ。傷つくのを見るのはごめんだ」

「うん・・・／＼　ありがとうなの」

## 第一八話

### 第一八話

もはや、ジュエルシードの反応がほぼ数日おきとなり、現在もその場所に向かって移動中。

「はあ、のんびり過ごしたい」

そう思ってしまうのも仕方がないと思いませんか？

「終わってるし。やっぱり」

ついてみるとジュエルシードの封印は終わっており、たがいに談笑し合っていた。

「お疲れ。差し入れだ」

そういつて途中で買ってきたドーナツを二人と二匹に渡した。

「おっ！ いいのかい！？」

「ああ。全員の分を買ってきた。参加できなかった分のわびとして取っておいてくれ」

そういつて私は勝ってきた缶コーヒー（ブラック）を飲む。

「フェイト」

「うん？ なに？」

「何かいいことでもあったか？」

「うん！ えっと聞いて葵！」「ストップだ！ 此処での戦闘は危険過ぎる！！ 僕は時空管理局執務官、クロノ・ハラウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか？」え！？」

「構うなフェイト。あいつはバカかあほだ。私たちは戦闘をしていない。つまり無関係だ。で、話というのは？」

ただ談笑しているだけであり、ここにいる全員武器も何も持っていない。まあ、バリアジャケットぐらいしか着ていないようだが。

「なっ！？」

「・・・あ、葵。時空管理局の執務官にそれは無いと思うよ？」

「私はその組織を知らない。無関係だ。それに間違いは「武器を下げ」と言うのが聞こえないのか！？」・・・」

そのこのハラウンだっけ？ それに今はなのはとフェイトが再びデヴァイスを構えてくるが、これはお前がこちらに向けてデヴァイスを向けたせいでこちらの二人も向けたんだが？ お前が下せばこちらもおろすだろうに。

「これは正当防衛だろ。それ以前にお前の言うことを聞く必要性はないと思うが？」

「なに!？」

「執務官とはなんだ？ そんな役職聞いたこともない。ましてや時空管理局だ？ そのような組織この日本には存在しない。よって我々日本に住む住人としては聞く必要性がないというわけだ。分かったか少年」

「黙れ！ これ以上命令無視をしようのであれば公務執行妨害で逮捕するぞ！」

——プチッ

隣でなのはが何か言っているが聞こえない。今は奴をどのように葬り去るかが重要だ。

「人の話を聞かないどころか、自分の意見のみを言う愚か者……ましてや、こっちはフェイトが何か吉報を持ってきてそれを話そうとしてそれを邪魔する……切れていいよな。ああ切れよう。そうだ切れよう。よし、殺す」

SIDEなのは

「あ、葵君？」

「人の話を聞かないどころか、自分の意見のみを言う愚か者……ましてや、こっちはフェイトが何か吉報を持ってきてそれを話そうとしてそれを邪魔する……切れていいよな。ああ切れよう。そうだ切れよう。よし、殺す」

「あ、葵!？」

ユーノ君もびっくりしているそりゃそうだろう。最後の言葉が・

・

「お、落ちついて葵、ね？」

「安心しろフェイト、あいつを海の藻屑にしたあとちゃんと話を聞くから。後これ。なのはもこれ」

そういつてフェイトちゃんと私に渡して来たのはあの【完全光り遮断! アイマスク!】

・・・あの子、大丈夫かな？

「さあ、楽しい楽しい裁きの時間だ。フッフッフッフッフッフッフ・・・」

すると、葵君は一瞬にしてその場から消えた。あ、まずい早く着けないと。そう思い急いでアイマスクをつける。

「なに!？ どこだ!？」

あの子も驚くよね。わたしも最初驚いたもん。で、多分後ろから、

「さあ、海の藻屑となれ!!」

「ふ、フライパン!？」

フェイトちゃんも驚いているけど葵君が持っているのはフライパン。以前いつていたけどあのフライパンの硬さはすごいと思うの。ダイナマイトにも耐えられるぐらい強いから。フェイトちゃんは間に合わなかったのかなあアイマスクつけるの。・・・だったらあの光景みているかもなの

ーゴンッ

「・・・うわあ」

アルフさんも思わず声を漏らすけど、すごくいい音がしたの。でも終わった「まだまだ！」え・・・  
終わったと思いいアイマスクを外してしまった。

「オラッ！」

「・・・がはっ」

「燃えろ！ 5000度の熱にも耐えるフライパンによる技！ 煉獄炎」

すると、フライパンが急に燃え始め、それであの子の身体を叩きつけるように・・・

ーガンッ ドゴッガキッ ベシッ ゴチュ

「・・・」

そのまま、あの子は海へとまっさかさまに落ちていったの。大丈夫かな？



「安心しろ。運が良ければ生きている」

葵君。すごくいい笑顔なの。というか、そのところどころについている赤いものは・・・まさかね・・・

## S I D E O u t

「安心しろ。運が良ければ生きている」

そう、運が良ければな。

それにしてもすごいなこのフライパン。普通1000度ぐらいしか耐えられないのにその五倍も耐えた！

「ところでフェイト、何があったんだ？」

「え！？ う、うん・・・じ、じつは・・・」

先ほどとは違い若干顔が青が・・・というか、全員顔が青いぞ？  
どうした？

『いや、葵（君・あんた）のせいだから！』

「そうなのか？ まあいい。どうせ生きてるだろ・・・たぶん」

その後フェイトの話に聞くと珍しくプレシアから褒められたそう  
だ。『さすが私の娘ね』と、昔のように優しく笑ってくれたらしい。

あの矢が効いたのだろう。その時の内容がよっぽどうれしかったのかフェイトは終始笑顔だった。

「それは良かったな」

そういつてフェイトの頭をなでる。

「うん。君にはやはり笑顔が似合う」

「ふえ／＼／＼！？」

そういつてフェイトと話し合いが終わり、フェイトは時空管理局から増援がくるかもしれないということで早めに退散した。

「さて、なのは」

「なに？ 葵君」

「私たち戻るとしよう。君の「ちょ、ちょっと待ってくれないかしら？」なんだ次は？」

そういつて声がした方を見ると、何やらモニターがあり、そこには一人の女性映っていた。

SIDEリンディ

まさか、あのクロノをふ、フライパンであそこまで……それにフライパンで戦った拳句に勝つなんて。

「か、艦長、フライパンってあんなにすごいものでしたっけ？」

局員がそう思うのも仕方がない。私だって驚きを隠せないのだから。

「私たちも戻るとしよう」

まずい！ 今この時を逃すと！

「君の「ちょ、ちょっと待ってくれないかしら？」なんだ次は？」

会話に割り込む形になったけど何とか間に合った。

「だれだ？ あの手首の仲間か？」

く、屑って。さすがに実の息子を屑呼ばわりされるときついわね。

「く、屑って…葵君」

となりの女の子も若干引いている。まあ、ああも堂々と人を屑呼ばわりする人はまずいないわよね。

「私は時空管理局提督、戦艦アースラの艦長リンディ・ハラオウンです。そこにいるクロノ・ハラオウンの上司であり母親でもあります。い、一応あの子は私の息子なの」

「左様で。で、ご用件は？」

「とりあえず、事情聴取をしたいのだけど。こちらにk「断る」え

？ どうして？」

「あ、葵君、どうして！？」

「時空管理局と今名乗りましたね。つまりあの屑と同じ組織。つまりいきなり攻撃される可能性がある」

「そ、それはあなた方が！」

「それにこちらは正当防衛だ。ここにいた連中の様子を見ていたか？ ただ飲食をしていただけだ。デヴァイスを持ったのはあの屑がいきなり現れ、デヴァイスをこちらに突き付けたたことによる自己防衛手段だ。いきなり現れたら何をされるか分かったもんじゃない。それだけで武器を下せと言われても納得がいくか」

「・・・そうね。ではどうしたら話し合いの席に座ってくれるかしら」

「明日は日曜だ。明日の13時ここに来ること。人数は貴様とあの屑、あと一人の計三人だ。こちらは私とこの子、そしてそこに要るフェレットの以上だ」

そういつて彼はあたりを見渡すと、

「後もう一つ言っておこう。この機械もすべて撤収させること」

そういうと、彼は指を鳴らす。すると、

「か、艦長！ サーチャーの一つが撃墜！ 原因は不明です！」

ど、ということ！？ まさか！

「お分かりいただけただろうか。もし、後を追跡するようならこの機械同様君達もチリと化す覚悟あると見る」

でも、こちらの座標を「ちなみにだ」え？

ーシュンツ

そこにあったのは、

「【バファオン】？」

「こちらの世界の薬だ。これで分かったと思うが君達の場所はずでに特定しているのでね。下手な行動をするとどうなるかは・・・分かるな？」

「・・・」

この子は本当に子供なの？ 魔力は不明。さらにどんな魔法を使っているかも不明。まずいわね。

「では、私たちは失礼する」

そういつて画面上から彼は消えた。

「どうします！？ 艦長！？」

「二人の追跡はやめましょう。本当に彼なら私たちを塵にするかもしれないしね」

彼は絶対に敵に回してはいけない。本能的な何かが警鐘を鳴らし続けている。なんとしてもこちら側に引き込めないかしら。

## 第十九話

### 第十九話

翌日。私となのは、ユーノは同じ場所に来ていた。

「あ、葵君。そのリュックの中みて……」

「無論。フライパンだ」

「にやははは……やっぱり」

当たり前だ。あの屑がいるんだ。後エクスとルミルは魔力を感知させないようにさせてある。

近くのベンチに座っていると、あちらも来たようだ。

昨日の屑に、艦長さん、あと一人分らないが女性が一人。

「改めて自己紹介ね。時空管理局提督、戦艦アースラの艦長リンデイ・ハラオウンです。で、こちらが」

「同じく時空管理局執務官クロノ・ハラウオンだ」

「時空管理局執務補佐兼アースラ通信就主任エイミィ・リミッタです。よろしくね」

最後の人は好感が持てそうだ。元気な人だね。

「高町なのはです」

「ユーノ・スクライアです」

「神無月葵だ」

そういつて局組も向かいのベンチに座った。

「それよりも君も元の姿に戻っていいと思うが」

「そうですね。じゃあ「待て、ユーノ」え、なに？」

いや、少し考えろユーノ。

「まさかとは思うがここで変身を解くつもりじゃないだろうな？」

「そうだよ？」「周りを見ろ」周り・・・あ・・・」

はあ、全く。

「ふえええええええええ！ ユーノ君人だったの！！！！！！！！」

「なのはうるさい。周りの視線が痛い」

「うっ。ごめんなさいなの。でも、葵君はなんで驚いていないの！？」

「少し考えればわかる。人語を話す動物はいない。となれば理由は誰かが変身しているか機械。後者は無いから人の可能性となったと



いうわけ」

さて、それよりも認識阻害の魔法をかけ、変身させますか。

「これでよしと、変身といっても大丈夫だぞ」

「うん」

そういうと光化にユーノが包まれ、それが晴れると人になったユーノがいた。

その後は、また驚いたなのはを黙らせるのに必死だった。

ちなみに、

「ねえねえ。葵君。そのリュックの中みて」

「ええ。フライパンですよ？」

クロノの肩を見ると顔が真っ青になってガタガタブルブルと小刻みに震えていた。トラウマのすりこみには成功したみたいだな。

「そ、そんなの持っても大丈夫なのか？」

屑改めクロノがそう尋ねてきた。

「ああ。大丈夫だ。なぜn「ちよつとそこの君」はい？」

私の後ろには一人の警官。

「そのフライパンどうしたんだい？」

「お母さんに買ってきて言われたから御遣いしてきたの！」

かの有名な某少年探偵もびつくりの性格、声全てを変えた。

「そうか。お使いだったのかい。えらいね。こちらの人たちは？」

「友達がたまたまいたからちょっと遊んでたの！」

「そうか。最近物騒なので気をつけてあげてくださいね」

「え、ええ。ご丁寧にどうも」

リンディさんもびつくりのようだった。警官がその場を去ると。

「き、君の演技はすごいな」

「学べばどうにでもなるさ。これも生きて行く上の知識だ」

さて、話はもどり、ユーノがジェルシードがなぜこの海鳴市に落ちたかの経緯を話す。以前に説明したと思うのでここは割愛！

「そう。立派ね」

「だが、無謀だ。あれほどの物を一人で回収しようなど」

「はい。僕もそう思いました。でも、今の僕にはなのはや葵がいます。友達として、仲間としても信頼できます」

「ユーノ君」

ふむ。嬉しいね。ユーノからからそう頼られると。

「……そうですか。ではこちらも」

そして、次にリンディ提督から時空管理局というものとロストロギアおと鑄物の説明をされた。

ロストロギアとは、過去に何らかの要因で消失した世界、ないしは滅んだ古代文明で造られた遺産の総称。多くは現存技術では到達出来ない超高度な技術で造られた物で、使い方次第では世界はおろか全次元を崩壊させかねない程危険な物もあり、これらを確保・管理する事が時空管理局の任務の一つであると言うことだ。

（ふむ。何か怪しいな。エクス、ルミル。時空管理局のデータを集めてくれ。アースラをハッキングしてもかまわん）

《《イエス、マスター》》

そしてジュエルシードの説明もあったが、これはリニスから教えてもらった知識以外もあった。

なんでもジュエルシードは【次元干渉型のエネルギー結晶体】で、複数発動させることで次元空間に影響を及ぼす【次元震】と呼ばれるものを引き起し、最悪の場合、幾つもの並行世界を壊滅させるほどの災害【次元断層】の切欠になる、と。

何とも物騒なものを人は作るものだ。

なのはやユーノを見ると暗い顔をしていた。

《マスター管理局についてのデータ集めてきました》

（ふむ。どれ）

そういつて脳内に直接電波を送り、管理局についてのデータを見る。司法、警察、軍隊を一手に担う巨大組織。

（バカか。これでは独裁体制国家と変わらない。まさかこの子たちも……。あり得るな。クロノも見たところまだ15以下だ。何を言うか分からないな）

そういつて私は表目状は出していないが、リンディの言葉を一つ聞き逃さないようにしていた。

「ところで、神無月君、高町さん。なぜあなた方はジュエルシード集めをしているのかしら」

リンディさんの質問を受け大雑把にだが説明をした。

クロノとなのはが出会い、なのはが危険な目に合わないためにジュエルシード集めに協力し始めたこと。

ジュエルシードを集めている途中で出会ったフェイトという子。

だが、たがいに理解を含め良い好敵手になっていったこと。

そして互いに協力し合って封印した昨日のことを。

「クロノ君。そりゃあ葵君も怒るよ。それにその、フェイトちゃん

だっけ？ その子何かうれしいことがあって葵君達に教えてあげようとしたのに邪魔しちゃねえ」

「うっ・・・申し訳ないことをした」

そういつてクロノは私に向かって頭を下げた。だが、

「クロノ。それは私に謝っても意味がない。一番の被害者は私ではなくフェイトだ。それを忘れるな。さもなければ」

そういつてフライパンを手にする。

「わ、わかった！ 分かったからそのフライパンに手を伸ばすな！」

昨日のあれがやはり聞いたか。トラウマにしておいて恐怖を植え付ける。じゃないと連鎖は繰り返されるからな。

「こほん。そろそろいいかしら？」

「どうぞ」

そういつて私はコーヒーを飲む。リンディさんも近くにあった極甘珈琲を口にして、

「これよりロストロギア・ジュエルシードの回収については時空管理局が全権をもちます」

「「え・・・」」

「ほお。大口をたたくな。ということは私たちは元の生活に戻って

いいということか。クロノ？」

「ああ。君達は今回のことは忘れて、それぞれもこの世界に戻り普通の生活を送るといい」

「でも・・・そんな・・・」

「次元干渉にかかわることなんだ。民間人に介入してもらうレベルの話じゃない」

「でも！」

（まあ、そうだな。これだけ危険なことだ。さて、フェイトとの約束もある。どうするか）

そう私が今後のことを考えていると、

「まあ、急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて、三人で話し合ってそれで改めてお話ししましょう」

・・・はっ？　　さて、今この人は何と言った。エクス、ルミル。認識阻害の魔法をここだけにかける。後防音も。

《《い、イエス！　　ま、マスター！！》》

「おい、貴様」

「ひっ・・・」

なのはを怖がらせてしまったか。だが今はいい。それよりも。

「貴様、よくもそうぬけぬけと戯言が言えるな？」

SIDEリンディ

「おい、貴様」

え？ な・・・ひっ

葵君から低い声がしたのでそちらに振りむいてみると、鋭い目でこちらを見ている葵君がいる。それだけじゃない。殺気も子供、いえ常人が出せるレベルじゃない。そのせいか、クロノ達も震えている。

「貴様。よくもそうぬけぬけと戯言が言えるな」

「ど、どういう意味かしら」

「おい、クロノ」

「は、はい！」

「お前はさっき今回の事件が民間人が介入するレベルじゃないといったな。それは今回の事件はお前らにとって最優先項目で対処しなければならぬということだ間違いないか？」

「あ、ああ」

「そうか。なら、リンディ・ハラウオン。お前は何を考えている。なぜ、私たち民間人が介入するべきものじゃないにもかかわらず、気持ちの整理や、もう一度話し合う必要性がある？」

「え、どういうこと？」

「なのは。管理局というのは簡単に言うとその世界で言うところの軍、警察みたいなものだ。そんな組織が最も危険だと言っている事柄に民間人は手を出すなどいつているんだ。ここまではわかるか？」

「え、うん」

「なら次だ。手を出すなどいつているのになぜ気持ちの整理をして、もう一度こいつらと話し合う必要性がある」

「・・・あ！」

「たしかに。これはどういうことですか！」

「違うわ！ 私たちは・・・」

でも、葵君は次の一言で私にチェックメイトをかけた。

「違うも何もないだろ。お前らは私たちを使い捨ての駒としたいんじゃないのか？」

「な！ 適当なことを言うな！」

クロノが神無月君に飛びかかろうとするが、



「なら、クロノ。なぜお前が昨日あんなにボコボコニされたのに、増援がこなかった？ 最優先項目以上に大切なことがあるのか？」

「そ、それは……」

「昨日君の元へ増援がこなかったのが証拠だ。さらにいうなら」

そういつて彼はその鋭い目のままこちらを睨みつけてきて、

「お前は危険感をあおり、なのは達から協力させてくれというように仕組んだんじゃないのか？」

すると、彼と私以外がはっと顔を上げる。

「なのはならこう思う。自分で切ることがないか必死に探す。そして自分には魔法がある。なら、それを生かせれば！ とね」

「う、うん。ユーノ君やみんなのためにジュエルシードを集めるって決めたから」

さらに、彼はとどめの一言を言い放った。

「さらに管理局は慢性な人手不足だそうだな。そこに現れた高レベル魔法保持者。あなた方から見ればよっぽどのことから手が出るほど欲しいんじゃないのか。さらに今回の事件を乗り越えられるほどなら適性もあるでしょうね」

「そうなんですか艦長！？」

「ち、違いますよね！？」

・・・

「沈黙は肯定」

「そ、そんな」

「ウソ・・・だろ」

彼は、神無月君はおそらくクロノやエイミーより年下だろう。にもかかわらず子の洞察力、情報量の多さ、殺気。全てにおいて彼らだけでなく私以上なのかもしれない。

「さて、私たちはこれで失礼でしょうか。あなた方の目的も分かりましたからね。なのはいくz「待ってください！」まだなにか？」

彼の視線はさらに鋭くなっていた。それこそ比喻でも何でも無い。視線で人を殺せるぐらいに。

「白状します・・・。立场上こちらから協力要請するようなことは言えないんです。だからああいふ風に誘導するようなことをしました。こんな卑怯な手段をとってごめんなさい」

もう、頭を下げるしかない。立場も関係ない。

「母さんどうして!？」

「彼が言った通りよ。管理局は慢性な人手不足。それだけにたまたま見つけた魔法保持者二人。それもかなりレベルが高い。正直今の戦力だけじゃ不安なのよ」

すると、彼は考えるように。

「正直でよろしい。ここで嘘をつかれるようであれば迷うことなくあなた達と敵対していたでしょうね」

そういつて彼は笑顔を向け、もう一度席に座った。

「一つだけ忠告しておきます。あなた方の組織を信用したわけではない。少なくともあなた方という人間を信用したんです。そこをはき間違えないようにお願いします」

「はい」

「後も一点。だまそうとしたことは変わらないのですからこちらの要求をのんでもらいます。難しいことではないので」

「出来うる限り善処します」

「一つ。私となのは、ユーノの独立行動権を認めること。二つ。協力体制は今回のみ。三つ。なのは並びになのはの周りの人へ手を出さないこと。四つ、私の魔法に関しての情報提供並びに撮影は一切禁止すること。以上の四点を守っていただければ結構です」

「分かりました」

「では、今後ともよろしくお願いします」

そういつて彼は手を差し伸べてきたので、私はそれを握り返す。

彼の手はどこか、とても懐かしいぐらい暖かった。

S I D E O u t

「なのは、勝手に進めて悪かったが良かったか？」

「うん！ 大丈夫だよ」

なのはもどうやらこの内容で満足してくれたみたいだ。

「ところで、一つ聞かせてくれないか？」

すると、クロノが何か話しかけてきた。

「ん？ なんだ？」

「も、もしもだ。もしもさっき言ったうち一つでも破ったらどうなる？」

「一つ目はまあ、状況によるが、後半三つは絶対厳守だから破った瞬間管理局をつぶす。あと、君達はしらないと思うが上層部がやってもつぶすから」

そういうと彼らは顔を真っ青にしていた。

ちなみにこの後私が男だと言ったらやはりアースラメンバーが全員が驚いた。

ただ、リンディ提督だけ、

「じゃあこれ着てみる？」

そういつて取り出したのは黒色のゴスロリ服。着てみたけどヤツパ動きやすかった。



## 第二十話

### 第二十話

その後、アースラに移り、しばらくの間こちらで生活することになった。その後、神姫を見せると、

「ゆ、ユニゾンデヴァイス!？」

といていた。似たようなものなのかは分かんが、とりあえずそんなものだといっておいた。変に研究されたらたまったもんじゃない。

まあ他にもクロノと何度か模擬戦を繰り返していた。

まあ、結果は言わんでも分かってくれ。というか、コイツぐらいの相手なら魔法を使うまでもなかった。

「はぁ・・・はぁ。君は一体どれほどの力を持っているんだ!？」

「クロノ。なのはもフェイトもそうだが君達は明らかに魔法に頼り切っている。それが勝敗を分けると言うことがなんでわからんのだ?」

「ど、という・・・ことだ」

「とりあえず座れ。後これ」

そういつて近くの自販機で買ったポ〇リがなぜかあったので買っ

てそれをクロノに渡した。

「済まない」

「遠慮するな。で、続きだが魔法の前にお前の場合は体ができていない」

「だからどういう意味だ？」

「君はもし【魔法が使えなかったら】ということ想定して訓練したことがあるか？」

「そういえば、無いな」

「その時点でアウトだ。魔法は万能ではない。もし使えなかったら、武器がなかったら、最終的に頼りになるのは己が身体だ。そのためには最低その場から逃げれるほどの足、護身術程度の武術を習得しておく必要がある。君の場合はそれをスルーして魔法の基礎、応用に走っている。それでは負けるのは当たり前だ」

「君はそれもこなしているのか？」

「当たり前だ。基礎体力をつけることは戦闘においては必須だ。両手腕立て、片手腕立て、腹筋、背筋、スクワット。それぞれ最低でも二千はする」

「に、二千!？」

「そうだ。君も私もそうだが才能がない。なのはみたいな恵まれた才能がな」



「そうなのか？　僕から見れば君は才能に満ち溢れている気がするが」

「ああこれは努力の賜物だ。愚直なまでに地道にな。それでもまだ君は私より才能はある方だ。だが、その才能も開花させねば意味がない。なら地道に努力し続けるしかないと思うぞ」

「ああ、そうだな（だが、これだけの戦闘力、どれほどの年月をかければ。それに彼はあの子と同じ年だろ！？）」

才能か。私には縁遠いものだな。

「あとクロノ。君の悪い癖はもう一つある」

「なんだ？」

「勝ったと思い油断をしている。勝って兜の緒を締めろと言う諺がある。勝っても気を抜けばそのすきにやられる可能性がある。勝っても気を緩めることなくありとあらゆる可能性を考え行動しなければならぬ。君の悪い癖は必殺技を撃った後に油断が生まれそこから隙ができている。それを注意しろ」

「・・・ああ、わかった」

すると、突如緊急事態を告げるアラートが鳴り響く。

「何事だ！？」

クロノの顔が局員の顔に戻る。

「分かんがとりあえずブリッジに向かおう」

ブリッジに着くとそこには荒れた海と、嵐のように荒れ狂う空が映し出されていた。

「……天気予報だと台風はこないはずだが？」

「ズガアア」

「どうした？」

私がそんなことを言うともみんながこけた。足腰弱いな。

「あ、葵君。じゅ、ジュエルシードが反応したんだよ？」

「神無月君。もう少し緊張感を持ってね」

「そうか、場を和ませようとしたんだが」

それよりも、あの荒れ狂う場にフェイトがいた。

「あのバカ……」

はあ、あれほど怪我をさせるな、人に心配させるなといったのに早速これか。

「すまないが現状の説明を頼めるか？」

「ええ。残り六つのジュエルシードが海にある可能性が高かったの。彼女達は魔力を繰りそれを半ば強制的に発動。そして今に至ると言うわけ」

リンディ提督もどうやらあきれた様子だ。確かにあれは一人で抑えられるものではない。私でもあと一人、いや二人支援系の魔法使いがほしいぐらいだ。

するとなのはが、

「あの！ わたし、急いで現場に！」

「その必要はないよ」

クロノがそうなのはに言い放った。

「放っておけば彼女は自滅する。仮に自滅しなかったとしてもそこで彼女を叩けばいい」

なるほど。

「そうだろうな。君達組織は常に最善の方法をとる———というわけか」

「ええ。そうね」

「葵君!？」

「だが、私は組織の人間ではない。というわけで私は私のとるべき道を進ませてもらおうよ」

エクスに起動命令を出して白騎士の格好をする。

「なにを言っているだ、君は！？」

クロノがそう言い放つが、

「クロノ。最初の契約時に言ったはずだ。私となのはは独立した行動権を持たせるように言ったはずだぞ？ それを今行使するだけだ」

「うっ」

「それに、彼女は私にとって大切な者だ。それを護って何が悪い？ 友を、仲間を護って何が悪い？ 友や仲間を助けるのに理由がないのか？ それを悪というのか？ ジュエルシードなど後回しだ。今は彼女の安全確保を、人の命を護る方が優先すべきことではないのか？」

「・・・」

「ああ、あとっておくことがある。私を止めたければ止めるという。だが、その時はこの艦がどうなるかは分かっているな」

私の身体からは魔力だけでなく、殺気、覇気と呼ばれるモノを一気に放出する。

「クロノ。そう言えば君とはエクスとルミルのどちらかを使って戦ったことはなかったな。今からでもどうだ？ ちょうどエクスを使っている。間違っただの世に案内することになるかも知れんがその時は許せ」

そういつてジャベリンの銃口をクロノに向ける。

「……はあ。止めておくよ。まだ僕も死にたくない」

「そうか」

すると、リンディ提督がこちらを向いて、

「あなたは どうしてそこまでするの？ 彼女は――」

「さっきも言ったはずだ。彼女は大切な者だ。なのはやユーノと同様にな。それにリンディ提督。あなたはなぜ管理局に入ったのですか？ 人を助けるためじゃないんですか？」

「！」

その顔を察するにあたったようだ。

「……そう、だったわね。歳は取りたくないものね」

「おや？ 私から見ると十分若いと思いますが？」

「そう？ 嬉しい言葉ね。それより、神無月君。お願いしていいかしら。彼女の救出と保護を」

「無論そのつもりだ。なのは、君はどうする？」

「いくよ！ わたしも、フェイトちゃんを助けたい！」

「そうか。では、行くでしょうか」

待っているフェイト。お前が望む未来を必ず作ってやる。誰もが幸せな世界は無理かもしれない。だが、せめてお前達が、私にとって大切な者たちが幸せな世界を創るために。

## 第二十話（後書き）

リンディ提督ってなんで管理局は言ったんだろ？  
あくまでも都合主義なのでちょっと間違っていたらすいません。

## 第二話

### 第二一話

モニターで見たときより悪化してませんかこれ？

「とりあえず。エクス、ジャベリンセット。出力12%に設定。なのは！ 発射と同時にアルフとフェイトの救出を頼む。ユーノ。あの竜巻をどうにかするのを手伝ってくれ」

「うん！」

「分かった！」

さて、一時的処置だが竜巻とあの雷をどうにかしなければ。

《マスターセット終了！》

「じゃあ行きますか。ギュリーノス・ブレイカー！」

ーズガアアアアアアアアアアアアアアア

まばゆいばかりの光の光線があたり一面を包み、竜巻は一瞬にして静まった。

「急げ！ これは一時的な処置にすぎない！ また竜巻が発生する前に安全な距離を保て！」

そう言っているうちに再び竜巻発生。これはいつペんに六個を同



時に封印する必要性があるな。

「あんたのあの一撃であれだなんて。どうすれば……」

「まあ100%の出力で撃ってもいいんだが……」

「え！？ あれで100%じゃないの！？」

私のどうやらあの一言に驚いているらしい。

「いや、100%で撃ったらモーゼの十戒みたいに海が真っ二つに割れて津波で近隣に被害が出てもいいならやるぞ？」

「「「……」」」

沈黙が痛いな。だから最大でも地球圏内だと数十%ぐらいまでしか出せないんだよな。

「というわけでなのは、フェイト。お前らの魔法とこっちで同時に抑える。一人二つの割合なら封印できるな？」

「うん！」

「任せて」

「良い返事だ。ユーノ、アルフ。全力で二人をサポートしてやってくれ」

「言われなくてもするさ！」

「うん。支援なら任せて！」

「では始めようか！」

「」「」「おー！！」「」

なんだろう。めちゃくちゃ今ピンチだと思う場面なのに、まるでみんなでこれから遠足に行くぞー。みたいな空気は。

《シリアスよりよろしいのではないのか？》

《楽しければいいんですよ！》

「（そういうものか？）まあいい。とりあえず封印作業に入ろう——か！？」

周りを見ると、なのはとフェイトがいきなり最大級魔法を放とうとしていた

「これは私いらなくないか？」

《とりあえず一人二つなので》

《マスター冷却終了。いつでも充填OKです！》

《張り切っているな？》

《もちろんです！》

「まあいいか。照準セット。出力15%で行く。ターゲットロック」

《出力15% 目標ロック確認。いつでもどうぞ!》

「ギュリーノス・ブレイカー!」

SIDEフェイト

なのはと葵の協力で一人二つまで減った。でも、相変わらず葵の砲撃はすごい。もしあれを食らったら・・・やめよ。

「あ、葵君の砲撃すごい・・・。でも、きれい」

「・・・うん」

以前詠唱で聞いたけど光りの道というのはあの砲撃を見たらうなずける。

本当にきれいなのだ。

本当に、誰もが光りの道を歩めるような気がする。

SIDE Out

SIDEアースラ

「あ、あれで12%だと・・・」

クロノがモニターを見て哑然とする。

その気持ちもわかる。なにせ竜巻を撃つというより切り裂くような砲撃なのだ。

「もし100%ならどうなるのかしら・・・」

想像したくはないが知りたいと思ってしまるのが人間の感情なのだろうか。

すると、葵がもし100%うったらということ想定して話をしていた。それを聞いて、

「う、海が割れる!？」

「え、エイミィ。先ほどの12%でどれ位の魔力ランクなの？」

「え、えっとですね・・・先ほど測って見たみたんですが、12%でA A A +です」

「・・・彼って生きるロストログアじゃないんですか？」

「・・・はははっ、もう、笑うしかないわね」

その後15%でS+になりさらに驚いたアースラクルーたちであった。

## S I D E O u t

その後ジェルシードも封印し終え、少し談笑していた。

「あ、葵。ありがとう。また助けてくれて・・・／＼／＼」

ほほを染めながらこっちに来るフェイト。だが、

「あのな、フェイトよ。もう心配させるなといっただろ。だからこれは罰だ」

そういつて軽くでこピンをする。

「いたい・・・」

「なのはもそうだが、こちらの世界の魔法使いは無理をするのが当然なのか？　なら、一から鍛え直してやろうか」

もう溜息しか出てこないな。全くユーノもアルフも心配させて早死にさせられるぞ。

「え！？　わたしもなの！？」

「当たり前だ。最初よりかはあまり無茶しなくなったが、みているハラハラするときは何度もある。お前らを見ると心配で胃に穴が開く。この歳で胃潰瘍とかやめてくれ」

「「ごめんなさい」」

そういつて二人ともシュンとするが、

「まあ、無事だからよしとしよう。あとフェイト、一個は君に」

そういつてフェイトにジュエルシードを一個渡し、もう一個は、

「もう一個はなのはに」

「え、でも・・・」

フェイトはやはりもらうのに後ろめたさがあるんだろう。

「私が持っていてても何も意味がない。ちょうど二つあるんだ。分け与えた方がいいだろう。」

そしてそれぞれ封印すると、

「さて、ではそろそろ」

そのままアースラに戻ろうしたら、

（魔力反応！？）

空を見上げると、紫色の雷がフェイトめがけていた。

「なに！？ フェイト、なのは！ 逃げろ！！」

「え・・・！？」

「うそ・・・レイジングハート！」

フェイトは私の声を聞き驚いたが、すぐに自分の置かれている状況に気付く。

なのはもレイジングハートでガードしようとするがおそらく間に合わない。

「間にあええええええええええ！  
ディゴソードシールド全面展開！」

—ブオン

という音共に水色の魔力シールドが展開された。間一髪でフェイトとなのはをガードする。

「ぐつ・・・」

「葵君！」

「葵！」

私がこの場で逃げればこの二人に雷が当たる。それは何があっても避けなければ。そのためならこんなものなんて耐えきってみせる！

—ゴキツ  
ブチつ  
ビシヤツ

シールドを備えている甲冑部分が壊れ、その血管が破裂し、血が出る。白騎士の装甲を壊すか。

【不の者】が力を与えているのか？

[illegible]

ろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろオオオオオオオオ!!!!」

痛くない怖くない。こんなものなんて、こんなものなんてエエエエエええええ!!

「はあああああああ!!!!!!」

雷をはねのけ、二人の安全を確認すると二人は無事のようなのだ。

「エクス、損傷確認」

《い、イエスマスター。破損部分甲冑右腕部、右胸部、ヘッド部分ですが修復は可能のレベルです。それよりもマスターの方が!》

焦ったようにエクスがいうが、こんなときに冷静に分析してくれるのが、ルミルだ。

《マスターすぐに自己治癒を開始してください。マスターほどなら数分もあれば完了するはずです》

「分かった。エクス、ルミル。ありがとう」

そういつて私服に戻り、治癒魔法を右腕に集中する。

「ごめん葵。お母さんが・・・」

「なに、なのはと私がいたのだ。敵だと思ってフェイトを護ろうとしたのじゃないのか?」

「そう、なのかな?」



「こればかりは君の母親じゃないとわかないがな」

違うな。これは明らかにフェイトを狙っていた。だが、プレシアの魔法ではあったものの行使したのはおそらく。

「フェイト。一つだけ頼みを聞いてくれないか」

「な、なに？」

「どんな時でも心を強くもて。たとえ自分の親が君のことを嫌いと言われようとも、どんな残酷なされても」

「え・・・ということ？」

「そのうちわかる。今はこれしか言えない」

「うん。わかった」

「良い子だ」

そういつて私は傷ついていない左手でフェイトの頭をなでる。

なのはがほほを膨らましていたので、フェイトが終わるとなのはの頭も撫でた。

「ジュエルシードの捕獲はできなかったがとりあえず任務は終了のようだな」

「そうだね」

「では、戻るとしよう。またなフェイト」

「うん。またね。なのは、ユーノ、葵」

「毎回すまないね。助かったよ」

「大切なものを護るのに謝る必要はない。それに助け合うのは当然  
だろ？」

「う、うん。そ、そうだね／＼／」

犬型のアルフがなにやら顔を俯いている。

「「ライバルが増えた――!?」」

「ち、ちがうよフェイト!?!」

「ライバル?」

《《マスター。フラグ製造機の称号を手に入れたー》》

何を言っているだ神姫Sは?

その後、アースラに戻るのに数十分遅れた。

## 第二話

### 第二二話

「戻りました」

そういつて無事アースラに戻り報告をしていると、クロノが、

「きみを敵に回さなくてほんつつつとによかったよ」

そういつて私の両肩に手をのせて半ばあきれ顔で言っていた。

「そうだな。敵に回して暴走でもしてみろ。太陽系が無くなるぞ」

「……は？」

「冗談だ」

「君の場合冗談に聞こえないんだが!？」

「やろうと思えばできる!」

「しなくていい!」

「まあまあ。神無月君もそんなことはしないわよね？」

「ええ。それよりもあの雷は何だったんですか?」

「ああ。そのことについてたが」

そうクロノが言うと一つのモニターが現れ、そこにはプレシアの写真があった。

「彼女の名前はプレシア・テストロッサ。僕達と同じミッドチルダ出身の魔導師だ。専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な魔導師ながら違法研究の失敗によって放逐された人物です。登録データと先ほどの魔力波も一致しています」

「クロノ君、プレシア・テストロッサの追加データ持ってきたよ！」  
扉から出てきたのはエイミィだった。

「彼女は二六年前まで管理局の中央技術開発局の第三技局長でしたが、当時彼女が独自に開発していた、次元航行駆動路【ヒュードラ】使用の際違法な材料を使用し失敗。結果、中規模次元震を引き起こし、中央を追われ地方へ異動となりました。随分もめたいみたいですよ？ 事故は結果に過ぎず実験材料には違法性はなかったと。辺境に異動後も数年間は研究に携わっていたみたいです。しばらくして行方不明になったと・・・」

「他の情報は無いのか？ 家族構成、その研究内容とか」

「抹消されているみたいです」  
「抹消？」

「おかしくないか？」

「え？」

「どういうことだ？」

周りの人間が一気に私の方へと注目する。

「エイミィ、その研究内容に使われた材料も抹消されたのか？」

「え？ うん、そうみたい」

「それはおかしくないか？ 普通なら失敗は成功の母というように、失敗データは二度と事故をおこなさないためにも保存しておくだろう。ましてや、違法な材料ならなおさらだ」

「確かに」

「それに実験内容だけならまだ分かるが、なぜ家族構成まで消す必要性がある。おかしいだろ明らかに」

「確かにそうね」

これは徹底的に調べてみる必要性があるな。

「クロノ。確か君は執務官だったな」

「ああ」

「悪いがプレシア・テストロッサのその違法実験の内容や実験材料について調べてもらえないか？ あと、リンディ提督も彼に権限を使わせて調べれるところまで調べてもらえませんか？」

「そうね。確かに謎が多すぎるわ」

「それに、事の発端はもしかして……あり得るな」

あいつが関わっているとすれば……。それにあいつならやりかねん。

「あれが、フェイトちゃんのお母さん」

なのはがプレシアの画像を見ながら、そうつぶやいた。

「何か気になることでもあるのか？」

「葵君。さっきの雷、フェイトちゃんを狙ってたよね」

鋭いな。気付いていたのか。

「ああ。間違いなく。だが、それが果たしてプレシアの意思なのか、他の者による介入かは定かではないな」

「？ 神無月君。ということですか？」

「確証を持ってないからいまだに保留。ということでお願ひします」

出来れば、そうであってほしくないな。でも、そうなるとあの雷はプレシアの意思だったということになる。

どちらに転んでも結果は最悪だな。

SIDEアルフ

あの女がフェイトに用があるといったから呼ばれたとおりに来てやった。だけど、

―パシンッ!!!

「なにをやっているの。フェイト。私はジュエルシードを集めるよと言ったはずよ」

容赦なくフェイトに鞭を振るう。

「ごめ・・・んな・・・さい」

「それに、あれだけの好機を持って、ただボーっとしているだけなんて。それにあそこにいた二人は敵なのよ！ 何のんきにしていたの!?!」

「ご、めんな・・・さ・・・い」

フェイトの声が小さくなるが、それでも容赦なく鞭の音が場を包む。

「なにが違うの！ あの娘とあの少年、神無月葵は敵なのよ。それとも、私を裏切るつもり?」

「ち、ちがいます・・・私は!」

もういいよフェイト！ なんでそんなにも、あの女を！

「黙りなさい！」

—パシンッ

「うぐっ……」

「プレシアーーーーー！」

もう我慢できない！　よくも、よくもフェイトを！！

「きちや、だめ……アルフ……」

それを最後に、フェイトは気を失った。

「ふん……」

そのままあの女は地下へと降りて行った。

「フェイト！　フェイト！！」

あの女は絶対に許せない！　この怒りを数十倍、いや数百倍にして返してやる！

そのままあたしはプレシアの後を追った。

「プレシア、あんたよくもフェイトを！」

そういつてあの女に向かって殴りかかる。だが、障壁が展開され拳が届かない。でもかまわず、拳を振るい続け障壁を破る。



「あんたは母親で！ あの子はあんたの娘だろ！ あんなに頑張ってる子に・・・あんなに一生懸命な子に・・・なんであんなひどいことができるんだよ！？・・・え？」

そのときあたしは目を疑った、うつすらだがあの女の眼に涙があった。

でも、次の瞬間。

―バシユウウ

腹部に魔法を叩きこまれ、あたしは壁に激突する。

「・・・いつも、いつも、フェイトを心配して、ときには怒っていやったり、時には笑ってあげたり、時には心配してやったり、よっぽど、よっぽど葵の方があんたより家族だよ！ それなのにあんたは！！！」

あの女の眼を見ると、もうその目には涙は無かった。見間違いだったのか。

「あの子は使い魔の作り方が下手ね。余分な感情が多すぎる」

「フェイトは、あの子は、あんたに笑ってほしくて、以前の笑いあえる家族に戻ってほしくて、一生懸命巖ばてるんだろがあああああああ！」

一撃、一撃でいい。あいつに入れられるなら！

「邪魔よ・・・きえn・・・ぐっ」



## SIDEプレシア

「はぁ、はぁ」

いまだに頭の中で何かがうなっている。

―ナゼ、タスケタ

―モウ、ホロブシカナイノニ

―オマエモ、モウ、シヌ

―アノ、ムスメモ

―キボウナンテナイ

子供、女、男、老人さまざまな人間が恨みや憎しみを私に言い放ってくる。

「黙りなさい！」

あの子だけ、せめて、あの子だけでも！

「カハッ!？」

吐血。あの事故のせいで体を病がむしばみ、さらに研究を続けた結果がこれだ。さらに、この化け物のせいで浸食速度が上がっている。

でも、ここで意識を手放せば、あの子……が……

そう言って目の前が真っ暗になった。

S I D E O u t

S I D E フェイト

「フェイト、起きなさい・・・フェイト」

「はい、母さん」

どれぐらい時間がたったんだろう。母さんが呼ぶ声が聞こえ、起きる。そこには私が母さんのために集めたジュエルシードと母さんがいた。

「あなたが手に入れてきたジュエルシード9つ。でも、これじゃまだ足りないの。最低でもあと5つ、出来ればそれ以上欲しいの。急いで手に入れてきて母さんのために」

「はい」

そういつて私は起きて、すぐにでも母さんのためにジュエルシードを集めようとした。でも、母さんから予想外の言葉が来た。

「それより、あなたのそばにいた少年のことを聞かせて。フェイト」

「え?」

葵のこと？ でも、なんで？

「あなたが以前、あなたを助けたのを思い出してね。お礼がしたいの。それにその子はとてもいい子なんでしょ？」

「はい。葵はとても優しくて、強い男の子です。でも、彼は今管理局に」

そう、葵は今管理局にいる。管理局がそれを見逃すわけがない。私が言ったら葵に迷惑がかかるし、下手をすれば母さんが捕まってしまう。

「大丈夫よフェイト。それに彼はかなりの魔力を保持しているみたいね。きっと管理局から無理難題を押し付けられているわ。そのまま放置しておくと彼が死んじゃうかも。それを助けてあげるの。あなたが」

あ、葵が死んじゃう！？ そんなの嫌だ！ 絶対に助けないと！

「わ、分かりました。葵を、葵を説得してみせます」

葵。絶対にあなたを助けてあげるから。

## S I D E O u t

「さて、リニスと久々の再会だな。後いろいろ相談しないと」

あの後、リンディ提督から相手方が動かないからと新しい情報が

入るまでゆつくりしていいと言われた。その後帰宅許可をもらい一度家に戻ることにした。

《でも、なのはちゃん、家族に会えるんだ。嬉しいだろうな》

「そうだな。久しぶりの再会だしな」

《はい、家族というのはいいいものです》

帰宅時にリンディ提督が高町家に説明するという提案があった。まあ、あの高町家の全員を納得させるのは私でも疲れる。特にシスコンと士朗さん。

帰宅後、リニスと今までであったことを話し、今後アースラと協力するのでリニスにも協力してほしいとお願いをしてリニス自身も自分の身内のことなので協力することになった。

翌日、私は普通に学校に行くと、

「おはよー」

「あ！ 葵君！」

「あんた、ここ数日何してたのよ」

「んー。秘密。というか叔父の用事を手伝っていただけだ」

「おじさんって、お世話になってる？」

「ああ」

「へえ。何やってるの？」

・・・そこまで考えていなかった。

「まあ、人には言えないこと？」

「なんで疑問形！？　　というかそんなやばいことしてるのあんたの叔父！？」

「すずかちゃん！　アリサちゃん！　久しぶり！」

なのは。ナイスタイミング！

「あんたも何やってたのよ！」

「え？　えっと・・・その・・・秘密」

「はあ、あんたも？」

「ふふふふっ」

この三人の光景を見るのも久しぶりだな。やはり三人は大切な友人同士なのだろう。誰かが欠けてもいけない。かけがえのない者たちなんだ。

昼休み。久しぶりの四人での昼食にアリサが、

「ねえ、今日うちに遊びに来ない？」

と、アリサの家へご招待されました。

「へ葵君、どうすればいいの？」

「へ別にかまわんだろう。いざとなれば私だけでも行けるし、あらにはクロノもいる。問題はないだろうしな。それになのは自身も久しぶりに遊びたいんじゃないのか？」

「へえへへ。分かったやつた？　じゃあお言葉に甘えてうん、行く！」

「よかった。すずか、あんたもちろん来るでしょ？」

「うん。もちろん」

「そういえば、葵。あんたまだ家に来たこと無かったわよね？」

「そう言えばそうだな」

「じゃあ決定ね」

「なにが？」

「来ること」

「どこに？」

「うちに」

「・・・初めから主語つけようなアリサ。今ので四行無駄にしたぞ



「？」

「？ 何のこと？ それより来るでしょ」

「ああ。お邪魔しよう。それよりデザートというほどのものではないが。久しぶりに作ったこれなどどうだ？」

そういつて取り出したのは動物の形をしたクッキーだ。

「「いただきます！」」

さすが女の子。甘いもの好きだ。

食べた瞬間。

「おいしく！（葵君の料理もおいしかったし、甘いものもおいしい）」

「うっ、まあまあね（おいしい。そこらへんのものよりもおいしい！）」

「おいしい」（そう言えばお家に呼んだ時のケーキ、葵君が作ったんだっけ？）

その後も昼食も終わりお茶を飲んでいると、アリサが。

「あ、そう言えば昨日の夜に家がしてる犬を拾ったの」

「犬？」

「うん。すごい大型で、なんか毛並みがオレンジ色で、おでこに、  
こう、赤い宝石がついてるの」

その話を聞いてアルフを思い出した。

「〈葵君。それって・・・〉」

「〈間違いないな。アルフだ〉アリサ。その犬の写真とかないのか  
?」

「写真? あるわよ」

そういつて携帯の写真を見せてくれた。

「わぁゝ。本当にオレンジ色なんだ」

「〈間違いない。アルフだ〉」

「〈うん〉」

「どうしたの?」

「いや、どこかで見たことのある犬だと思ってな。どこだったかな  
?」

「心当たりあるの!?!」

「ああ。アリサの家に行くまでには思い出しておく」

そして放課後、アリサの家に着き早速アルフがいる檻の前についた。

「へあ、葵・・・」

「へ休んでいていい。無理をするな」

「どう？ 知っている犬だった？」

「ああ。知り合いの犬だ。間違いない。休み時間にそいとも連絡を取った。叔父の家を知っているのでこちらで引き渡したいが良いか？」

「ええ。良いわよ」

「ありがとう。それと、もう少しこの子を安心させたいから檻から出してもらっていいか？ あと三人には悪いが下がってもらえないか？」

「え？でも・・・」

「アリサちゃん。行こ」

「すずかちゃんの言うとおりでよ。葵君。すぐに来てね」

「ああ分かっている」

檻からアルフを出した後三人が行ったのを確認して。

「リニス。出てきてくれ」

茂みから一匹の猫が出てきて、アルフの前に座る。

「へアルフ！？ 大丈夫ですか！？」

「へり、リニスかい？ ああ、このぐらい・・・ぐっ」

「へ無茶をするな。今、治癒魔法をかける」

そういつて詠唱を始めるとアルフの下に魔法陣が展開され傷口が収まっていく。

「へすごい・・・痛みどころか魔力も回復してる・・・」

「へそれより何があったんだ？」

「へ葵、フェイトを、フェイトを助けてやってくれ！ お願いだ！  
」

アルフは泣きながらも、しっかりと自分の目の前で起きたことを放した。

フェイトがプレシアからの虐待を受けていたこと。そして我慢の限界が来てプレシアを殴ろうとしたら彼女の後ろから黒い魔物が出てきたこと。

「へそうか。つらかったろ。もういい。我慢しなくていいんだ。泣いてもいいんだ。アルフはよく頑張った」

そういつて子供をあやすように優しくアルフを抱きしめてやる。

「へう、うわあああああああああああ！>」

ダムが決壊したかのようにある府は泣き始めた。

間違いない。奴だ。あいつが！ また誰かの幸せを踏みにじったんだ！ 覚悟しておけ、貴様だけは絶対生きてはいけないんだ！  
心に怒りの焰がついた瞬間だった。

## 第二三話（前書き）

今更だけど一日一話・・・きつい!!

まあ、好きでやってるから何とも言えないこのモヤモヤ・・・

## 第二三話

### 第二三話

SIDE ずずか

「葵君」

わたしは葵君を探していると、たまたま一人になっていたのを見つけた。

「ずずかか。どうした？」

「えっとね。お姉ちゃんからきいたんでしょ？ わたしの本性」

「……そうか、忍さんは君に言っていなかったのか」

そういつて彼は指を鳴らす。すると、結界っていうのかな？ あたり一面の景色が一気に変わった。

「さて、今張ったのは結界というものだ。今ここには私と君しかないし誰も入ってこれない」

彼はわたしを見つめる。でも、何か違う。

「怖くないの？」

「なにが？」

「わたしは夜の一族。吸血鬼なんだよ！？」

「ああ聞いた。忍さんからね」

「やっぱり。でもお姉ちゃんはなんで葵君にそのことを……」

「私が人外だということに気付いて話しかけてきたらしい」

「じんがい？」

「人以外の生き物ということだ」

それって、わたしみたいな存在ということだね。でも、なんで彼が？

「私は人であって人で無いんだ」

彼は微笑むがいつものように明るい笑顔じゃない。どこか悲しそうだった。

「私の半分は人。半分精霊の血が入っているんだ」

「精霊？ あの御伽噺の？」

「ああ。信じられないか？」

「ううん。でもまだそれなら「吸血鬼よりまし。か？」うん」



彼は、そつと目を伏せて、次の一言にわたしは驚いた。

「それが人体実験で生まれた存在でもか？」

「え……」

「私は人と人の間に生まれつきた人だった。でも、大人の勝手な都合の実験で精霊と融合させられた半精なんだ」

え、それって……

「実験って……」

「そのままの意味だ。すずか。これを知っても私が人だと思うか？  
化け物のように見えるか？」

「そんなこと無い！ 葵君は葵君だよ！ たとえそれがどんなものであっても、それに違いなんて無いよ！」

すると、彼は少し驚いたように目を見開くが、すぐに笑い出した。

「え？ あ、葵君、い、いくらなんでも失礼だよ！？」

「いや、なに。すずか。私は君とおんなじことを君に言おう。私もすずかはすずかだと思う。たとえそれがどんなものであってもな。私が忍から君たちの素性を知って、君が吸血鬼だと知って態度を変えたか？」

「ううん」

「それが答えだ。君は君だ。何者でもない」

彼のその一言で全てが変わった。ああ、こうもわたしが吸血鬼だと知ってもいつも通りに接してくれる人がいるんだ。理解してくれる人がいるんだ。そう思うと心が落ち着いた。

「あ、あれ？　なんで・・・」

なぜか目から涙が出てきた。すると、彼はそっと私を抱いてくれた。

「なにがあったかは知らん。でも、泣きたいときは泣くといい。幸い結界も維持されているしな」

「う、うわあああああああ」

思いつきり泣いた。でもこれは悲しい涙じゃない。嬉しい涙だ。

それから数分後、葵君が抱きしめているということと、葵君の前で泣いたということで嬉しさと恥ずかしさがいっぱい顔が真っ赤になった。

でも、ありがとう。それだけは伝えた。

（葵君。わたし、月村すずかはあなたが大好きです）

そう、心の中にそっとつぶやいた。

S I D E   O u t

すずかのことがあり、その後アリサとなのはにこつてりと絞られ、ゲームをしたり、とまあ色々あったが日が暮れたのを合図に今回のお遊び会はお開きとなった。

あの後なのはとアリサ、すずかと別れアルフとリニス連れ、公園に来た。

「リンディ提督、ユーノ。聞こえるか？」

「ええ、聞こえています」

「アルフの情報を踏まえ今回の黒幕が分かりました」

「え！？」

「なんだって！？」

二人の驚きはごもつともだ。なにせ、プレシアが犯人ではないのだから。

私は公園一帯に不可視と人よけの結界を張り、そこにリンディ提督とクロノを招き入れた。

「本来ならフェイトやなのはがいるのがベスト何だが贅沢は言っていられないか」

「それより黒幕がプレシアじゃないってどういことなんだ！？」

「そうだな。今回の黒幕の説明をする前にこのことを知っておいてほしい。じゃないとわけがわからなくなる」

「? わかったわ」

リンディ提督が納得したのを合図に

「まず一つ言っておく。私は君達の言うところの時限漂流者という者らしい」

「「「え!?!」」」

リニスは知っていたが、やはり知らない人間にはきついかな。

「それでは、神無月君は別の世界の?」

「いや、私は確率の世界の住人だ」

「確率・・・じゃあ! 君は平行世界の住人ということか!?!」

「ああ」

「でもどこの・・・」

「ここ地球のね。そして根本の違いは魔法が一般化されているかどうかだ」

そういつて自分がいた世界のことを話した。元いた世界では世界に魔法使いが全人口の98%もいて魔法も違えば全てが管理局のとは違うことを説明した。

「なるほどね。あ！　これは録音していないから安心して」

「そうですか。で、アルフ。この写真のうち君が見たという化け物はどれだ？」

手に出したモニターに四種類の化け物の姿を出した。

一つはレベル1と言われるこの世界に来て士朗さんの病室で士朗さんに取りついてた物。

レベル2の大きさは成人男性ぐらいだが、顔はイヌ科の動物を思わせる顔で瞳は赤く染まり、手、足も人とは程遠い。手は爪が鎌のように発達し、足は犬の足をさらに大きくしたようなものだ。

もう一つの大きさはレベル2と同じぐらい。そして、頭は動物から人に近いものにはなっているが角が二本、さらに目が4つある。まるで悪魔を連想させる化け物。レベル3と言われるモノ。

そして最後は、

「これは明らかに人じゃないか!？」

そう、レベル4と呼ばれるモノ。これは完全に人だ。違いと言えば肌が明らかに死人だろと言わんばかりに白く、目が人間でいう白い部分が黒く、瞳の部分が赤いということぐらいだ。

「これだ、この獣のやつ!」

そういつて指を指したレベル2か。

「葵、これは一体・・・」

「【不の者】と言われる者だ。私の世界の狂王や狂乱者と言われた科学者、零始<sup>れいし</sup>が生み出した兵器だ」

「兵器？　ただ壊せばいいじゃないのか？」

ああ、ただの兵器ならアルフの言うとおりで。

「アルフ、これはただの兵器じゃない。これは人間の感情を餌にして成長し続ける兵器なんだ」

「感情？」

「ああ、特に人間にとっての負の感情。怒りや悲しみ、憎しみ、ねたみ、怨み。そういった人間がいる以上絶対に終えない負の化け物なんだ」

その説明にこの場にいる全員が顔を青くなっていた。

「さらに厄介なことにこいつらは進化をする。レベル1から2に変化するのにはどれだけ人を不幸に陥れたか、レベル2から3になるためにはどれだけ多くの人間を殺すか、そしてレベル3から4になるためにはどれだけ人を喰らったかだ」

「喰らうって……まさか……」

「文字どおりの意味だ。食す。我々人が野菜、肉を食べるようにこいつらは人間のことを餌としか見ていない」

「オエエエ……」

クロノが我慢できずに吐いた。吐き終わると、クロノはこちらを見て、

「き、君はこれらと戦ってきたのか、その元いた世界で」

「ああ。もともと、この零始によって私は強化されたのだからな」

「……どうのことだ？」

「人体実験を行われた。精霊と人間の融合実験。魔法の威力を図るために死刑囚、子供、大人、老人、男、女関係なく殺したりさせられた。そして、最後に自分自身の本当の両親も……大切な妹もな」

「「「ッ!？」」「」」

SIDEクロノ

「人体実験を行われた。精霊と人間の融合実験。魔法の威力を図るために死刑囚、子供、大人、老人、男、女関係なく殺したりさせられた。そして、最後に自分自身の本当の両親もな」

その言葉を聞いて正直驚きよりも、その零始の残虐非道な行いに怒りを覚えた。

（実験のために人を殺させる？ しかも、それで、この葵の親をだ  
と!?!）

「では、あなたが髪の色が変わるのも」

「ああ。実験の影響だ」

「君達の国は何をしていたんだ！ 違法どころじゃない！ 道徳的に、倫理的にもそして人間的にも違反してる！」

「クロノ覚えているか。私がなぜ組織は信用しない。だが、君達は信用しようといったのは」

「あ、ああ」

何を言っているんだ彼は？

「この研究のバックには日本政府、魔法省、環境省、文部科学省、国際ウィザード連合がついているんだ。無論警察や日本軍、今こちらではまだ自衛隊かな。それがついているんだ。頼れると思うか？」

だが、彼の言葉は終わらなかった。

「その後、あっちの世界では選ばれた12人の子供を使って最強の人間兵器を作る計画が立った。通称？ family計画。その選ばれた12人の中には日本の旧暦が性として与えられた」

「なんだいそれは？」

アルフの疑問はもつともだ。達体12人で何ができるんだ？

「神無月。これは今の暦で十月を表す。つまり私は十番目に選ばれ



た子供だと言うことだ。兵器になるためにね」

もう、言葉も出ない。実験で得られた魔力。それも葵並の人間があと11人もいる。だが、それよりもなんで、そんなことを！

「そっからはもう地獄だった。投薬、人殺し、魔力注入。そして、神姫と出会った」

「え？」

「この子たちはその実験室で出会ったんだ。だが、それで終わればよかった。両親を殺した後私の魔力が暴走。そして、研究室は消失。その後は通常の生活を送たというわけだ」

それだけじゃない。葵はまだ何か隠している。でも、それを聞いてはいけないと思ってしまふ。そうでもしないと、今の自分を保てなさそうみたいだ。

「すまないな。こんな変な話をして」

「いえ」

母さんも顔色が悪い。それだけじゃない。どこか悔しそうだ。

僕だってそうだ。世界が違うが、恐らくこの話を聞いて管理局も似たようなことをやっていると思ってしまう。彼が組織を恨んだり、信用できないと言うのがよく分かった。

それよりも、彼を友として迎えたいと、心の支えになってやりたいと思った。確かに僕は彼より弱い。でも弱者は弱者なりに葵を支えてみせる。

S I D E O u t

S I D E リンディ

「さて、話はずれたな。アルフ。もう一度確認する。君が見たのはレベル2でいいんだな」

「あ、ああ」

彼は少し考え、

「なら対応できるな」

「神無月君。レベル3と4だとまずいの？」

「ええ。まだ、レベル1と2なら。3と4になると倒せなくはないんですが、意思を持つようになるため面倒くさいんです」

「意思？」

「はい、レベル1と2はただ己が欲のための身に行動します。簡単に言えばゴーステムみたいなものです。ですがレベル3と4は自らの意思を持ち、行動します。そのため人に近くなります。ですが、や

はり己が欲には逆らえませんが。ですから、作戦を立てたり計画性を持って厄介になります」

「なんとも、本当に厄介ね。それで、プレシア女史からそれを取り外せる作戦はあるの？」

「無論。そのため協力をお願いします」

「分かったわ」

もう、彼に辛い思いをさせたくはない。偽善と思われるかもしれない。でもそれでもいい。

「では、私はこれで」

「まって」

「なんででしょう」

「なんであなたは戦うの？」

でも、聞かずにはいられなかった。でも、彼は満面の笑みで、

「大切なものを護るため。ですよ。エクストルミル。なのはやフェイト。アルフやリニス、無論リンディ提督やクロノ、ユーノ、エイミィ、今ではアースラの皆さんもね」

そういつて彼はその場を去っていった。

参ったわね。あんな子供に護られる大人なんて。でも、嬉しいわ

ね。

S  
I  
D  
E  
  
O  
u  
t

## 第二三話（後書き）

過去話を少し加えてみました。  
感想やご意見お待ちしています！

## 第二四話

### 第二四話

リンディ提督たちと別れ、一旦家に戻り食事と睡眠をとったのち再び公園を訪れた、

「この魔力反応。フェイトか？」

「さすがだね。葵」

「フェイト！　お願いだ！　もうやめよう！　葵が、葵が全てにけりをつけてくれる。だから！」

アルフが必死にフェイトを説得する。これでこちら側についてくれば楽なんだが。

「アルフ。ごめんね。私は、あの人の娘だから」

悲しげな表情を浮かべながらアルフの願いをけったか。それだけの思いを持って母を愛するか。

「葵。いっしょに、私と一緒に来て」

「・・・何を言っている？」

フェイトが言った言葉に私は驚愕した。

「母さんがいった！　葵は管理局にこき使われているんだって！

葵をこのままほおっておくと、葵が死んじゃうんだって！ 私は、私は葵がないなんて嫌！」

「……（人の一番弱い部分をつくか。どこまで卑劣で下衆なんだ）」

「だから葵。今度はわたしが助ける番。いっしょに来てくれれば私が護ってあげるから、だからお願い！」

このまま乗り込めば作戦などを踏み倒して【不の者】を叩ける。だが、どうする……

「ダメだよ！」

すると、後ろからなのはとユーノが現れた。

「……なのは」

「葵君。ここはわたしが！」

決意に満ちた目。吹っ切れたような、覚悟を決めたような。いい目をしている。

「分かった」

そういつて私は一歩下がった。

「……なのは、どういうつもり？ 私は葵を助けるんだ」

一瞬フェイトは悲しい表情を見せた。だがフェイトもフェイトで

私を助けるという【不の者】によってふきこまれた情報を信用しているんだろう。だが、それでも決意をした眼だ。

「フェイトちゃん。少しお話ししない？」

「話す必要なんてない。私は、葵を助けて、母さんの笑顔を取り戻すんだ。邪魔をしないで」

そう言ってフェイトはバルディッシュを構えた。

「そんなのずるいよ！ フェイトちゃんは葵君を連れて行こうとしてるんでしょ！ わたしだって葵君とずっと一緒にいたいもん！ そんなの許せないよ！」

あれ？ 論点だんだんずれてませんか？

「きっかけはジュエルシード。だから賭けよう。お互いが持っているジュエルシード全部を」

全部のジュエルシードをかけるか。それだけ互いにk「そして葵君を！」……はい？

「待てなのは。今私の耳が確かなら私をk「やっぱり戦うしかないんだね。いいよ。全部かけよう。お互いのジュエルシードと葵を！」……もういいです。好きにしてくれ」

私がorzとなっているのをよそに彼女達は互いのデヴァイスを構えて互いの出方を探らあっていた。

「あんたも大変だね。でもフェイトを不幸にすんじゃないよ」



犬型で私の肩にポンツと前足をのせてきたアルフ。その気持ちだけでも十分ありがたい。

落ち込んでいると、二人は空へと飛びあがったようだ。

「ありがとうアルフ。もう大丈夫だ。それと無論だ、二人とも守り通すさ」

「そうかい」

そう言って私とアルフ、ユーノは空を見上げる。

「いいの？　なのはに任せて」

「いいさ。あの目を見ればな」

「でもいいのかい？　フエイトは強いよ？」

「以前のなのはなら負けていただろう。だが、彼女には魔法の才能がある。あとはどれだけ経験を積むかが問題だった」

「そうか。だから君はなのはにつきっきりで訓練してたんだ！」

「鍛えるのはしんどかった。基礎体力から全てを底上げしたからな」

なのはは運動が下手なんてもんじゃない。運動音痴だ。だから基礎体力からの底上げが必須だったため短時間の底上げは無理だった。だから、アースラの訓練施設を使いその無理を無茶で押し通すしかなかったんだ。

「じゃあ今は？」

「正直分らない。これが答えだ」

「どっちが勝ってもおかしくない。ってことだね」

「ああ」

なのはが勝てばプレシアが何らかの形で介入してくるのは見えている。たとえフェイトが勝ってもフェイトを追跡するか、私が座標を教えればすべて済む。どっちにしろ決戦は近い。

空を見ると、黄色と桃色がぶつかり合っていた。

決戦前の序章曲を奏でるように。

SIDEフェイト

「速い！？」

最初の方こそ互角だった。いや、むしろこっちの方が有利だったのに今では形勢が逆転されていた。

それに速度の方も私について来れるぐらい速くなってる。なんで！？

「ディバイン・シュート！」

「くっ」

それに接近戦にも慣れている。これほどの魔導師なんて・・・いた。

そう、身近にいた。なのはと私の近くにいる最高にして最強の魔導師が。

（葵だ。葵に教えてもらったんだ）

教えると言うことはその人は少なくとも教える人間よりレベルが上じゃないといけない。それも一段階ぐらいじゃない、二、三と最低でもそれぐらい。そんな人、なのはの魔力を考えると少ない。でも、葵ならやってのける。

（ずるい。私だって教えてもらったこと無いのに！）

よく考えるとなのはは、いつも葵と一緒にいる。

（ずるい）

それだけじゃない。学校というものも一緒だ。

（ずるいずるいずるい）

そうだ。なのはのそばには葵がいる。いつでも、すぐに守ってもらえる。

「・・・ずるい」

「え？」

「ずるいよ、なのは！」

そうだ、なのははずるい！

S I D E O u t

S I D Eなのは

「・・・い」

「え？」

フェイトちゃん何か言ったけど、なんて言ったんだろう。

「ずるいよ、なのは！」

「な、何がずるいの！？」

フェイトちゃん、なにいつてるの！？

「いつもいつもいつも、葵がなのはのそばにいる！いつも葵が護ってくれる！それに今なのはがここまで強くなったのだって葵のおかげなんですよ！？」

「そ、それは・・・」

「私だって葵のそばにいたい。葵に護ってもらいたい！ だから葵を連れて行くんだ！ じゃまをしないで！！」

「……ムッ」

フェイトちゃん。それは自分勝手っていうんだよ？

「……フェイトちゃんだって。フェイトちゃんだってずるいよ！」

「え？」

「フェイトちゃんは葵君に怪我を治してもらったり、ジュエルシードが暴走したときだって助けてもらったり、頭なでももらったり、わたしだってしてもらったことないこといっぱいしてもらってるの！」

「そ、それは……」

「わたしから見たらフェイトちゃんの方がずるいの！」

そういつてわたしは砲撃を放つ。

そしてまた、戦闘を開始する。それは最初の時より白熱してたと思うの。

すると、両手が金色のバインドで拘束された。

「え！？」

## S I D E O u t

「おや？」

こちらから見ると、なのはが金色の何かによって両腕か拘束されて自由が利かなくなっている。

「あれは!？」

「知っているのか、アルフ？」

「ライトニングバインド。相手を拘束する魔法だ。つまりその後に来るのは……」

「フェイトの一撃必殺を確実に当てるための布石か。でも手を出しちゃだめだ」

「でも、あれじゃあなのはがやられちゃうよ!」

「それでもだ。あれはなのはとフェイトの真剣勝負。神聖な一騎打ちだ。それを邪魔することは許されない」

ユーノの方を見ると、ユーノも悔しそうに見ている。だが、この勝負がどういうものかを知っているから手を出さない。

「僕だって……本当はなのはに手を貸したい。でも、それじゃあ意味がないんだ。今回はなのはとフェイトの真剣勝負なんだ」

「ああ。それに言ったら。なのはも成長しているんだ」

おそらくここで手を出そうとしたらなのははそれをいらないと言  
うだろう。まだ負けたわけじゃない。なのはの眼を見ればそれがわ  
かる。

「でも、あれはまずいんだよ！」

「アルカス、クルタス、エイギナス」

フェイトの詠唱が始まると同時に今までとは比べ物にならないほ  
どの大きさの魔法陣が展開される。

「疾風なりし天神、今導きの元へ撃ちなかれ」

すると、いくつもの球体状のプラズマが現れた。その数はす十と  
も数百とも数えられる。

「バルエル、ザルエル、ブラウゼル」

すると、さらにその魔力が強くなっていく。

「おいおい、あれってまさか……」

「フェイトの最強魔法だよ」

あれが、フェイトの……

「フォトンランサーフランクスシフト」

そしてフェイトが命令を下した。

「撃ち碎け、ファイア!!!!!!」

すると、いくつもの雷の矢がなのはに向け放たれた。

なのはは抵抗できずにそれを喰らった。

「なのは!!!」

ユーノがそう叫ぶ。だが、フェイトの攻撃はまだ続く。いくつもの小規模の爆縁が広がり、さらに追い打ちをかけるようにまたいくつもの雷の矢が飛んでくる。

そして、フェイトの攻撃がやむ。

フェイトもフェイトでかなり魔力を消費したらしく肩で息をしていた。

「ん? フッフツ」

「なにがおかしいんだ!?!」

「いや、フェイトの攻撃もすごかったが、それをまともに受けて、耐えきったなのはもすごいと思ってね」

「「え!?!」」

私が爆煙の上がっているところを見ると、アルフとユーノもそれ



につられてみる。

爆煙は次第に晴れて行き、そこからは、

「いたあゝゝゝい!!」

多少ボロボロになっているのはだが、みたところ、それほどダメージを喰らっていないようにも見えた。

「バインドって撃ち終わると解けちゃうんだね。今度はこっちの」

《divin》

レイジングハートが砲撃のスタンバイに入り、

「番だよ!!」

《bastard》

放たれる桃色の砲撃。

フェイトも余ったランサーを集め魔力弾としてなのはの砲撃に對抗するが、一瞬にしてなのはの砲撃に飲み込まれる。

急遽フェイトもバリアを張るがやはり、先ほどの攻撃で魔力を使い果たしたのか、押されている。

「くううう・・・（なのはも耐えきったんだ。私だって耐えて見せる!）」

ディバインバスターを耐えきったフェイトだったが、その直後に、桃色のバインドによって両足両腕を拘束され固定された。

「バインド！？　ッ！！」

「受けてみて、ディバインバスターのバリエーション！」

なんとか抜け出そうと試みようとするフェイトだが、やはり、先ほどの魔力の消耗が激しいのか、抜け出すことができない。

「これがわたしの全力全開！」

そして今まで見たことのない大きさの魔法陣とも力の収束が始まった。

「あ、あれって……」

かという私も驚いている。あれは、確実に今のフェイトにはきつい。

それでもお構いなしにまだ増大し続け、攻撃準備を整える。そして、その時が来た。

「スターライト・ブレイカアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

まばゆい桃色の光がフェイトめがけ一気に駆け抜けた。

「明らかにオーバーキルだろあれ……」

そのオーバーキルの魔法はフェイトを飲み込み、さらにフェイトを突き抜け海に直撃。

《ジャッジメントより・・・いえ、止めよう》

《ま、マスター！　なのはちゃんのあの技、ギュリノース・ブレイカーの35%相当と一緒にです！？》

「・・・・あの子は将来破壊神でも目指すのか！？」

「そ、そんなにすごいのかい！？」

「35%もあれば一国の軍隊を壊滅状態に近いことができる・・・」

「・・・・」

まあ、そうなるよね。私も驚きを隠せない。それを放った子が若干9歳だ。私がこの意気にたどり着いたのは14だぞ。

そして、砲撃が収まり、フェイトはそのまま海へと落下。だが、海に入る前になのはが救出した。

「・・・・あの子が20になる時、私を追いぬく確率が出てきたな」

《はい、マスター。それと》

《なのはちゃんを怒らせないようにしましょう》

「ああ、怒らせたならあれが自分に来ると思ったら私でも怖いぞ・・・」

」

あれって非殺傷設定だったよな。あれ解除すると……止めやめ。今背中に変な汗が出てきた。

SIDEなのは

ギリギリのところで、フェイトやんの救出に成功。

「フェイトちゃん！ フェイトちゃん！」

「ん……」

すると、フェイトちゃんがうつすらとだけど、目を開けた。

「……そっか、私、負けちゃったんだ……」

でも、フェイトちゃんの顔はどこか満足そうだった。

「フェイトちゃん。葵君はね、わたしのこともそうだけど、フェイトちゃんのことにも心配していたんだよ？」

「え？」

「ジュエルシードを六つ封印した時あったよね？」

「うん」

「あの時管理局の人はフェイトちゃんが弱ったところを捕まえればいいって考えてたの」

「そうなんだ。でも、作戦だったら正しいと思うよ。私は敵だったもん」

でも、あの時わたしは命令を無視してでもフェイトちゃんのところへ行きたかった。でも、心のどこかで戸惑っていた。ううん。あの場所にただ行くのが怖かったのかもしれない。

「でもね、葵君は迷わず行っただよ。友達を、大切な人を護るのに理由なんかいるのか？　って言ってね」

その時の葵君はかっこよかったな。

「葵が？」

「うん。そんな葵君の気持ちを分からないで自分勝手なこといったでしょ？　だから、その、頭に来ちゃって」

そう。葵君は自分と関係ある人なら自分のことなんてお構いなしでその人たちを護る。そんな人なんだよ。

「葵君にとってみれば、葵君は大切な人たちを護る。それだけの理由……でも、難しい理由で戦っているんだよ。それにわたしやフェイトちゃんなんて関係ない。葵君なら迷わず二人とも守るって言うんじゃないかな？」

「そうだね。葵なら絶対そう言うね」

すると、フェイトちゃんが、

「ねえ、なのは。葵は許してくれるかな？」

「んー。どうだろう。心配をかけさせたという点では起こると思うけど、それ以外は起こらないんじゃないかな？」

葵君は大切な人が傷つくところを見たがらない。だから、その点では起こるかもしれない。けど、それ以外は、怒らないと思うな。

そう思っていると、葵君はあの白い翼と黒い翼をはばたかせながら、ユーノ君、アルフさんがこちらに向かってくる。

「フェイト」

「・・・ごめんなさい！」

そういつてフェイトちゃんは頭を下げた。

「はあ。まあ分かっているならいいが、あまり心配かけさせるな。あと、無事でよかった」

そういつて葵君はフェイトちゃんを抱きしめた・・・って

「ええええええええー！！！！！」

「あ、葵！？」

「よかった。もう本当に心配かけさせるな。無茶をするな。いいな？」

「うん。ホントにごめんなさい」

そういつてフェイトちゃんは葵君の胸の中で泣き始めた。

ぶくくく。こ、今回だけなの！ でも、うらやましいな。

S I D E   O u t

フェイトがある程度落ち着き、アースラへ向かおうとしたその時、

ーズカアアアアアアアン

あの雷がこちらめがけて落ちてくる。

「（エクスは間に合わない）精霊結界発動！」

精霊結界。精霊が使える結界の一種で、通称絶対防壁と呼ばれている。属性攻撃（火、水、雷などの自然系攻撃）であれば完全に防ぐことができる。ただ物理攻撃などにおいてかなり弱い。

それをなのは達を護れるぐらいの大きさにして、雷を防ぐ。

「デヴァイスなしで障壁を！？」

ユーノが驚くが、ユーノ。以前にわたしはこちらの人間ではないといったからそれで押し通せるか？

それよりも！

「……やられたか」

「え？」

「あれはおそらくただの目くらましだろう。目的はジュエルシードの確保。目的は達せられたようだ」

「葵。なんで、母さんはこんなことを……」

「分からない。ただ、君は君の母親を信じろ。以前も言ったと思うが、たとえ母親にひどいことを言われても自分の意思を強くもて。いいな」

「うん」

そういつてフェイト達を連れアースラへと戻った。



## 第二四話（後書き）

最近思うこと。それは・・・

前書きと後書きに何と書けばいいんだろう？

## 第二五話

### 第二五話

私たちがアースラに向かっている間にどうやらエイミィが座標を割り出し、武装局員を転送したみたいだ。

「葵！ 母さんは、母さんはどうなるの！？」

「落ちつけ。話を聞いただけだろう。今回のことをなぜ起こしたのか」

そうだ。なぜこのようなことを引き起こした？ あの部屋の奥に何やら生命反応、あれがおそらくアリシア・テストロッサだろう。彼女に何か関係があるのか？

「そうですよ。フェイトちゃん」

するとエクスが人型に戻り、フェイトをなだめる。

「心配する必要はない。マスターがどうにかしてくれる」  
そういつてルミルも人がだになった。

「え……。この人たちは？」

「私の家族だ。エクスとルミルだ」

「フェイト！」

すると、リニスがこちらに向かって走って来た。

「無事でよかった」

「うん。ありがとう。リニス」

リニスはそのままフェイトを抱きしめた。

「どうやらリニスも来ていたようだな」

「はい。少しでもお役にたてればと思い、リンディ提督に頼んで」

「そうか」

すると、こちらに向かってくる人、クロノが来た、

「クロノ。現在の状況は？」

「ああ。武装隊をプレシア・テストロッサのいる場所に転送し、逮捕。うまくいけばの話だろうがな。とりあえずブリッジに行こう」

そういつてなのはとフェイト達を連れ、ブリッジに向かった。

そしてブリッジのモニターでは武装した局員とプレシアが対峙していた。

「母親が目の前で捕まる処を見るなんて気分がいいものではないがな」

「母さん・・・」

「ん？」

おかしい。プレシアの眼はあんな目の色だったか？

「プレシア・テストロッサ。時空管理法違反、及び管理局艦船への攻撃容疑であなたを逮捕します」

「武装を解除してこちらへ」

武装局員は素早くプレシアを囲むと、一人が隠し扉を発見し数人と共に中に入る。

すると、プレシアの表情が変わった。

「こ、これは……」

その中には複数ものカプセルと、カプセルの中に入った一人の少女がいた。

それはまるで、

「……フェイトちゃん？」

なのはがそうつぶやいた。フェイトの方を見るとフェイトも驚きを隠せない様子だった。

「へマスター」

「へああ、あれが、アリシアだろうな」

すると、紫色の雷が庭園内で轟音を響かせたと思うと、次の瞬間には武装局員が倒れていた。

「私のアリシアに近づかないで……!!」

「いけない！　すぐに転送を！」

リンディ提督があわてて武装局員の撤退命令を下した。

「もう駄目ね。時間がないわ。たった九個のロストログアではアルハザードにたどり着けないかもしれない。でも、もういいわ」

すると、プレシアはアリシアの入ったカプセルを愛おしい者をなでるようにゆっくりと手で、サーチャー越しにこちらを睨む。

「この子を亡くしてから暗鬱な時間を……この子の身代りの人形に記憶を与えて娘扱いするのも……聞いていて？　貴方のことよ、フェイト」

「!？」

「え……」

フェイトとなのは驚いた。そりやそうだろう。フェイトは自分のことを娘として扱われていなかったことに、なのははそれを、友人を物扱いされたことに。

「せっかくアリシアの記憶を上げたのに、そっくりなのは見た目だけ。役立たずでちっとも使い物にならない。私のお人形」

すると、エイミィが、

「プレシア・テストロッサが引き起こした事故の話はしたよね。その時に彼女は自分自身の娘アリシア・テストロッサを亡くしているの。それで、彼女が最後に行っていた研究。使い魔とは異なる、使い魔を上回る人工生命の生成。そして死者蘇生の秘術。そしてフェイトって名前はその開発コードの名前」

馬鹿げている。何を考えているこいつは。不の者】は!?

「死者蘇生? そんなものなど無い。死んだものは二度と生き返らない。それに使者を生き返らせることは禁術だぞ!？」

つい声を荒げてしまう。だが、そうだ。死者は安らかに天に召され、そこで蘇りの時を待つ。死者蘇生はそれを無視した非道な術だ。

「そうね。でもそれも失敗。ちっともうまくいかなかった。作りモノの命は所詮作りモノ」

フェイトは、それでも母親を、プレシアを見ていた。

「でも、でも! ほめてくれた! さすが私の娘だって! あの時の「黙りなさい!」え……」

「バカなことを言わないで! 私の娘はアリシアだけ!」

「やめて……」

なのはが呟くが、当然その言葉はプレシアには届かない。

・・・もう我慢の限界だ

「私にとっての娘はアリシアだけ！ フェイト、あなたはただ私がアリシアをよみがえらせるまでのお人形であり、わたしが必要とするモノを言われたとおりに集めるだけの駒。でも、もうあなたは知らないわ。どこへなりと消えなさい！」

すると、フェイトの眼から光が消えた。

「やめてよ！・・・！？」

なのはも気づいたか。プレシアの瞳から涙が流れる。

「フェイト。私の言った言葉を忘れたか？」

「・・・え？」

「意思を強くもて。今からプレシアの心の声を聞かせてやる」

そういうと、フェイトの眼にわずかだが光が戻った。

「そろそろいいかな」

そういつて私は一步皆より前に出て、プレシアの眼を見る。

そして、足元に、ある魔法陣を展開する。これは、相手の心の中に住む本当の心を引き出す特殊な魔法陣。まあ、モニター越しに通じるかは不安だが。

「我、汝に問う」

「ッ!？」

すると、プレシアが頭を抱え始めた。どうやら通じたみたいだ。

「汝の思う心の声は真実か」

「う、くっ……」

「汝の心の声真実にあらず」

「あ、ああ、あああ！」

プレシアは何か抵抗するように頭を抱える。

「心を開き、汝の真の声をこの者に聞かせろ！」

「アアアアアアアアア!?!?!?!?!?!?!」

すると、プレシアの瞳の色が、赤色から紫色に戻り、

「ふえ、フェイト、逃げなさい。こ、こに、来ては、ダメ!？」

「え……」

フェイトも動揺するだろう。いきなりわけのわからないことを聞かされたのだ。

すると、プレシアの背中にアルフが見たと言っていたレベル2の魔



物が姿を現した。

―ナゼ、ジャマヲスル

―オマエハ、ダレダ？

「あ、葵、あれ、なに……」

フエイトが震えながらそう聞いてきた。

「あれが黒幕だ。まさかあちからから姿を見せてくれるとは予想外だな。まあ、答えるか。私は神無月葵、君に分かりやすく言えば【黄泉路への案内人】と言えは分かるか？」

―アンナイニン

―ダイエイユウ（サツジンキ）……カ

―オレノ、ミライヲウバッタモノ

―ワタシノ、アスヲウバッタモノ

―ボクノ、スベテヲウバッタモノ

「ッ！？　そうか、あの時の生き残りか……」

―オマエガ、レイシとタタカワナケレバ！

―オマエガ、セカイヲ、テキニマワサナケレバ！

―ワタシハ

―オレハ

―ボクハ

―アシタヲ、ツカメテイタ

―ミライヲ、ミテイタ

―ソレヲ、キサマハ、ウバツタ!!!

「……貴様らは何をしようとしている!」

―アルハザードへ、ムカウ

―ソコデ、モウイチド、イキル

「……そのための犠牲だと言うか!？」

―ソウダ

「貴様らがしていることは、私がやったこととなにも変わらない! 他人の幸せを踏みにじり、自分達が幸せをつかみそれが真の幸福だと思ふのか!？」

―コレイジョウ、ハナシテモ、ムダ

―イクマエニ、オマエ、コロス

そういつてモニターが消えた。

「……」

「葵。母さんの言葉は？」

「最後のが真実だ。フェイトが危険な目にあわせたくない。だから逃げろといった。今までの言葉は【不の者】、あいつらがいわせていたようなものだ。気にするなといったても無理があるかも知れんが、あれはプレシアの言葉ではないということだけは分かってやってくれ」

「……うん」

すると、エイミィの声が艦中に響いた。それは、

「庭園内に魔力反応を複数確認、いずれもAクラス、数は……な、何これ！？百、百五十、どんどん増えていきます！！」

「ジェルシードの発動を確認！」

「小規模ながら次元震が発生！ し、しかし徐々にですが、規模が拡大中！」

「プレシアは、いえ、【不の者】は何をしようとしているの！？」

「もう一度人として蘇り、新たな人生を歩むつもりだろう」

「そのために、こんなことを！？」

「そうだ」

すると、リンディ提督が決断を下した。

「私も現場に出て次元震を抑えます。クロノは時の庭園へ突入しプレシア・テスタロッサの救出並びに【不の者】を倒してください!」

「了解」

「神無月君もクロノと一緒にしてもらえますか? 武装局員の壊滅の影響で人手が不足しているので」

「言われなくても」

「なのはさん、ユーノさん、リニスさんお願いします!」

「」「はい(分かりました)」「」

すると、フェイトが、

「私も、行きます!」

「フェイト。あたしも行くよ!」

「いいのですか?」

「はい。母さんを、助けます!」

その目に揺らぎはなくまっすぐ前を向いていた。

「気持ちをくんでやれ。彼女の眼は本物だ」

「・・・そうね。では、フェイトさんとアルフさんお願いします」

「「はい!」」

さて参るとしよう。

【不の者】を黄泉路へ案内するための戦いを。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2069x/>

---

魔法少女リリカルなのは～黄泉路への案内人～

2011年10月26日13時59分発行